カオス レギオン 0

招魔六陣篇

冲方 丁

富士見ファンタジア文庫

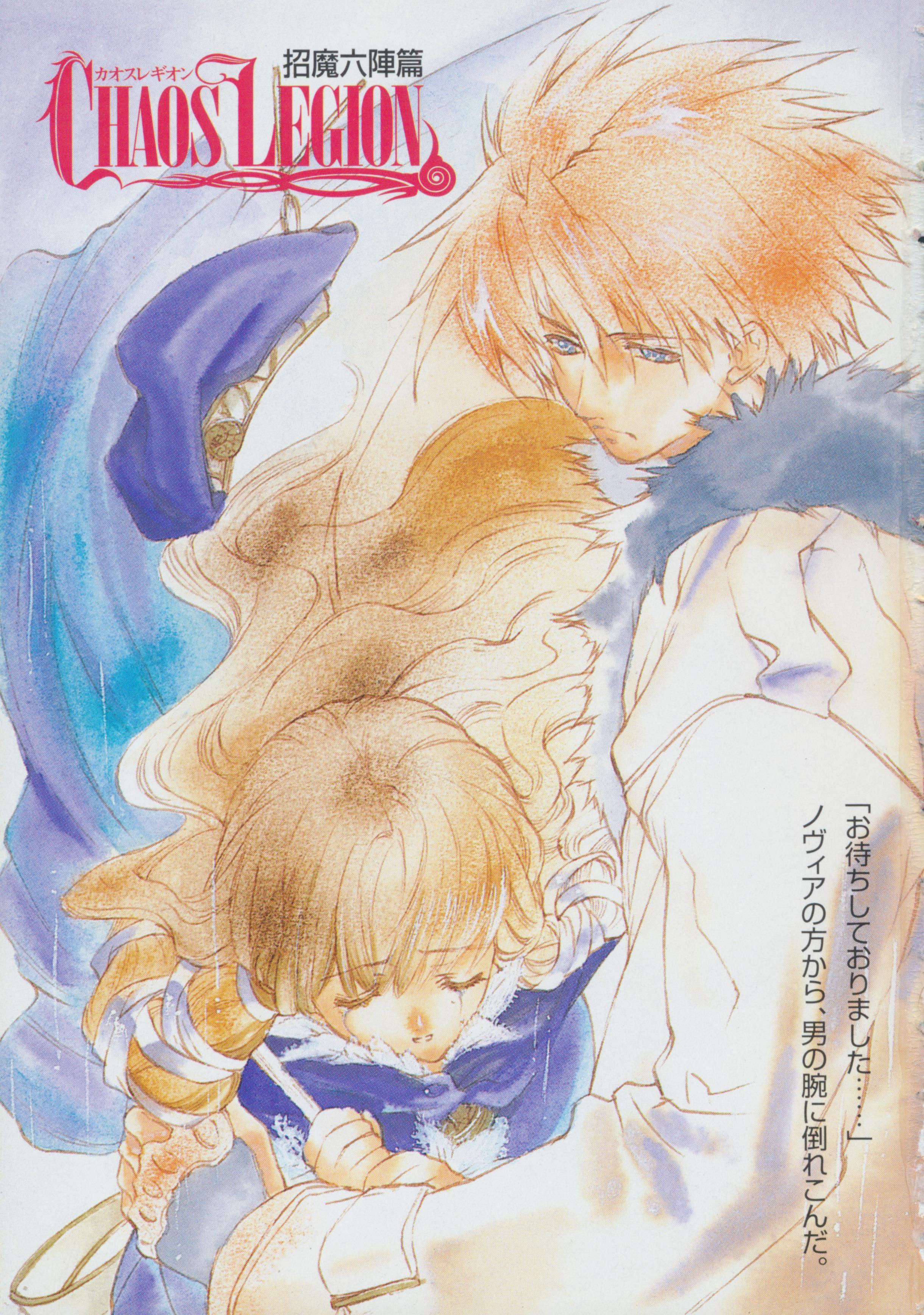
イラスト 結賀さとる

カオス レギオン 0
招魔六陣篇

少女は待ち焦がれていた。閉ざされた視界の向こう側に祈りの歌を捧げながら。
戦乱が続く混沌の大地で、盲目の聖女ノヴィアは、ただ一心に願い続ける。
亡き母が全てを託した男——自分の目を開かせてくれるかもしれない、最後の希望が訪れることを。
だが、そんな少女の前に現れたのは、シャベルを担ぐ一人の墓掘り人だった！
「貴方様のお名前を……お聞かせ下さい」
「黒印騎士団ジーク・ヴァールハイト」
無垢な魂と孤独な騎士が出会う時、二人の運命は激しく動き始める！
書き下ろしを含む初の短編集!!

招魔六陣篇
カオスレギオン
CHAOS LEGION
「お待ちしておりました……」
ノヴィアの方から、男の腕に倒れこんだ。

「ノヴィア、チビ、来い！　盟約により、森の守護者に助勢する」

貴方の目に宿るのは万里を見通す力――それに私の幻視の力を、委ねます。

カオス レギオン０

招魔六陣篇

894

冲方　丁

富士見ファンタジア文庫

136-2

口絵・本文イラスト　結賀さとる

目次

第一話　エルダーシャの娘

主、汚れし霊に問いたもう。

「汝の名は何か」

彼、答えていわく――

「〝軍団〟……我ら大勢なるゆえに」

横殴りの風に抗し、青い法衣姿の少女が、白木の杖を握りしめ、言った。栗色の髪を銀の紐で束ね、色白の頬に、淡い紫の瞳、小柄な身を凜と伸ばし、胸元には天界の聖性を力の源とする〈銀の乙女〉の紋章を飾っている。

「なに、それぇ」

と、少女の肩先で、鈴の音のような声が返す。掌ほどの大きさの妖精だった。シルクのドレスに女性形をした身を包み、瞳も髪も金に輝き、その背で震える羽も金色をしていた。

「聖典の一節よ。そうして霊は、闇に潜む聖法庁の敵を倒す使命を与えられた……」

「それが、黒印騎士団の由来、ねぇ……。でも何で、汚れし霊なんて言われてんのよ」

「きっと……お風呂嫌いなのね」

風が、少女の栗色の髪を激しく吹き上げる。

「黒印の軍団は、数千とも数万とも言われているわ。そんな沢山のお風呂嫌いを改心させるなんて、聖法庁は本当に偉大ね……」
びゅぅおぉお……。また違う意味で、冷たく吹き荒んだ気がする風に、体を持っていかれそうになりながら、妖精が声を絞る。
「いや、きっと、観念的な意味で汚れているんであって、本当に汚いわけじゃあ……」
そのとき――
「ノヴィア、こんなところに居たのか！」
大きな呼び声がして、草原を貫く一本道を、一孤の騎影が、少女のもとに駆け寄ってきた。
「あっ、ブランカ様ーぁ！」
たちまち、妖精が目を輝かせて叫ぶ。
「やぁ、アリスハートも。ご機嫌麗しゅう、我らが可憐なる姫君と、妖精どの」
思わず落書きしたくなるほど真っ白い馬から下り、丁寧にお辞儀をするのは、これまた純白の鎧とマントに身を包んだ、騎士である。
聖法庁から派遣され、今や近隣の辺境騎士団を一手に束ねる、聖騎士身分の男だった。
「盲目の身で、よくこんな場所まで……」

「アリスハートが私の目となってくれます。ご心配には及びません、ブランカ隊長」
少女が騎士を向く――が、それは気配を察してのことで、相手を見ているわけではなかった。淡く澄み切った紫の目は焦点を定めず、茫々と宙を泳いでいる。盲目であることを示す白木の杖を握りしめ、言った。
「それに、もし敵の斥候に襲われた時は、アリスハートが自爆して私を守ってくれます」
「おお、なるほど。それは安心だ」
えっ、と、アリスハートが目を剝く。
「あたしにそんな力、無いってば」
ははは、ふふふ、と笑う騎士と少女の間で、アリスハートの抗議が見事に風に流される。
「また黒印騎士団とやらを探して……？」
「はい。気配を感じます。数え切れぬ兵が、私達を救いに、現れようとしているのを」
「数千数万の、闇の軍団ですか……そんな圧倒的な軍勢が来れば、我らも危機を脱せるのでしょうが……どうも、信じがたい話です」
かぶりを振るブランカ隊長に、アリスハートはちょっとほっとした。ノヴィアといると、時々、まともなことを言う自分の方が間違っているような気にさせられるからだ。
「それよりもノヴィア、いつものように、彼らを弔ってあげて下さい。決戦の準備に忙し

く、いまだ一人も葬れずにいるのですから」
ふいに、かすかな陽光が射した。草原を覆い尽くすものが、不気味な光を跳ね返す。
砕けた剣や鎧、千切れ飛んだ馬具――そして血も乾かぬ死体達。それこそ何百もの死者が、地面一杯に折り重なっているのだった。
「この荒れ狂う風――死者が辺りに堕気を招いている証拠……お願いします」
ノヴィアはうなずき、こつこつと杖で道を探って草原に降りた。見えぬ目を死者の群に茫漠と泳がせ、緩やかに息を整える。
やがて、切々と澄み渡る慰撫の歌声が、その小さな唇の隙間から流れ出していった。
「……さすが〈銀の乙女〉の後継者」
ブランカが感に堪えぬように呟く。
吹き荒ぶ風が伴奏となり、無惨な戦場の跡に慈愛の歌を届けてゆく――と、
ずどん！　地面が揺れるかと思うほどの、凄まじい音が鳴り響いた。
ノヴィアの歌声が途切れた。ブランカとアリスハートがぎょっとなって道を振り返る。
いつの間に現れたのか、一人の男が、何か大きな物を地に突き立て、こちらを見ていた。
高い鼻梁に白皙の面立ち。一流の彫像のような顔を、燃えるような赤い髪が飾っている。
ブランカよりも頭一つ分高い長身で、ボロボロの白外套に、黒革の鎧、腕には真っ赤な

籠手という、実に殺伐とした戦闘衣裳だった。
ずぼっと、地に突き立てた物を引き抜いた。
どうやら、先ほどの音は、その大きな物を、地面に突き刺した音らしい。
そのまま肩に担いだそれは、いかにも男の戦闘衣裳にそぐわない、巨大な、銀色の――
「シャベルだ」
アリスハートが、ぽかんと呟く。
ぎろっ。男が凄まじい目つきで睨みつけ、
「無意味な歌で、風を騒がせるな」
低い、淡々とした声で、言い放った。
「無意味……？」
アリスハートとブランカが同時に聞き返す。
男が、すっとノヴィアに近寄り、手を伸ばした。ノヴィアが、はっと身をすくませ、
「何をするっ」
咄嗟に、ブランカが剣を抜くが――
男は、剣尖を喉元に突きつけられるのにも動じず、ノヴィアの胸の紋章を手に取るや、
「〈銀の乙女〉か……未熟者」

静かだが、きわめて鋭い口調で、言った。
「ちょ……何言ってんだ、このぉ！」
アリスハートが宙で羽を震わせて喚く。
剣尖が、ぐっと男の喉に食い込んだ。
だが、男は一向に構わぬ様子で、
「憎念に満ちた魂どもが、聖歌の浄めを拒み、堕気を放って風を呼んでいる――お前は、その歌で、死者の魂を殺すつもりか」
「浄めを……拒む」
思わず、ノヴィアは見えぬ目をみはって、その言葉を繰り返した。
「も、元々死んでんのに、殺すって何さ！」
「綺麗な死に方を押しつけることだ」
男が、紋章から手を離した。
すると今度はノヴィアが、男を追うようにして手をさまよわせ、男の籠手に触れていた。
「私に葬法を指導下さる方……願わくば、貴方様の位階を、お聞かせ下さい……」
男が、すっと身を引いた。ブランカの剣を避けるとともに、反射的に、ノヴィアの手からも逃げたように見えた。まるで生者に触れるのを拒むように、死者の群を背にし――

「黒印騎士団」
言うや、三人が、一様に愕然となった。
「黒印の……騎士様……」
男の籠手に触れるノヴィアの手が、震えた。
ブランカが、剣のやり場に困った顔になる。
「お名前を……お聞かせ下さい」
「ジーク・ヴァールハイト」
「貴方様がここにいらした理由は……？」
「助けを請われた」
つくづく端的にしか物を言わない。
アリスハートが呆れて何か言ってやろうとした途端、男が、懐から手紙を出してみせた。
手紙の封には、ノヴィアの首飾りの紋章と同じ、正十字に白薔薇の紋章が記されている。
「戦友、〈銀の乙女〉のフェリシテ・エルダーシャに招かれ、来た」
かくん、とノヴィアの膝から力が抜け、
「ノヴィアっ？」
必死に杖にしがみつき、見えぬ目を上げ、かろうじて男の気配を察して顔を向ける。

「フェリシテは、私の母です」
その目から、一筋の涙が流れ落ちていった。
「万軍を招く、黒印の騎士……聖印刻まれし銀剣を持ち、手には血の如く赤い籠手、背には黒印の紋章、と母から聞いてます」
「け、剣以外は、合ってるような……」
アリスハートが男を見やって言う。
「お待ちしておりました……」
そこでノヴィアの悲しい微笑が力を失った。
「ノ、ノヴィアっ!?」
男に、その小さな身を受け止める気は見えなかった。が――、結局、ノヴィアの方から、男の腕に、倒れ込むかたちになっていた。
「よほど気を張っていたのでしょう……緊張が解けて、気を失ったようですね」
男は、憮然としてノヴィアの身を支え、
「フェリシテはどこにいる？」
訊くや、ブランカは、ただかぶりを振った。
「どういうことだ？」

「御無礼、お詫び申し上げます。ぜひ我らの都市に来て下さい……全てをお話しします」

ルールドの都市は、万病を癒し、堕気を払う聖石の発掘場として発展した、鉱山都市である――とブランカは言った。

年に何度か聖法庁にも石を献上するほどで、地方の小都市には珍しいほどの繁栄を見せた。蛮族の襲撃もあって、辺境騎士団が防備に当たっており、その指揮は〈銀の乙女〉から派遣される優秀な人材が担っていたが……

「その人材こそ、〈見守る者〉こと、万里眼の使い手、フェリシテだったのだ」

そう告げるルールドの老市長以外に、今、市庁舎の一室で、各ギルド長、辺境騎士団の中隊長達、総隊長たる聖騎士ブランカらが、円形のテーブルを囲み、ジークを迎えている。

「フェリシテは、その万里眼で、遥か彼方の敵を透視し、誰にも真似の出来ぬ用兵術で、数々の敵を撃退してきたのだ」

「フェリシテの万里眼の怖さは知っている」

鋭く、低い声で、ジークが言った。

「なぜ、死んだ」

「あれは、ひどい戦いだった……」

鉱山が襲撃されたという報を受け、辺境騎士団を率いて駆けつけたフェリシテらを、なんと、千の兵団が包囲、一挙殲滅したという。
「蛮族が、〈見守る者〉を包囲した？」
「違うのだ！　襲いかかってきたのは、れっきとした騎士団だったのだ！」
市長が狂ったように叫び声を上げ、その場に居る者達が一斉に無念の声を上げた。
「辺境騎士団の大半が敵に回り、他領土からも呼応する者どもが続々集まってきとるっ」
「もはや、市民全員が一丸となって戦う以外、なすすべとてなく……っ！」
その騒ぎを、ジークは冷然と眺め、
「なぜ、辺境騎士団が、急に謀叛した？」
「あの男が、呼びかけたのですよ」
ブランカが、重々しい声音で、返した。
「聖法庁に離反し独自の勢力を築く男……」
ジークが、鋭くブランカを見た。
「辺境騎士団が、あいつに呼応したか」
「知っているのだね……ヴィクトール・ドラクロワ卿を」
ジークはうなずいただけで何も言わなかった。代わりに、テーブルの面々を静かに見回

し、状況を理解したことを示した。即ち、離反騎士団が、この都市を拠点とすべく続々と集結中――逃げ場もなく、聖法庁の応援も間に合わない。完全な孤立無援の状況であった。

騒ぎが収まり、みなが暗い顔で黙り込む中、市長が一抹の希望を込めて身を乗り出した。

「フェリシテの万里眼の力を受け継いだノヴィアは、あの通り、突然、目が見えなくなってしまった……力を受け継ぐには、幼すぎたのだ。だから、もはや我らの頼みの綱は、ノヴィアが言う、黒印騎士団だけ……」

「黒印騎士団は、そう容易く動かん」

「そ、それは……」

「だから、俺一人、来た」

「ひ、一人？　あ、いや、黒印の騎士は一人一人が万軍に匹敵する力を持つと聞くが」

「確かに、俺は、常に万軍が相手だ」

担いだシャベルを、くるりと回し、その歯に刻まれた聖法庁直下を示す刻印を示した。

「俺は今まで、こいつで、数万の兵をあの世に送ってきた」

おおおっ……部屋に、どよめきが走った。

「ただ埋めたのではなく、相手の流儀や宗派に合わせ、工夫してきた」

ほおお……と感嘆の声が上がる一方、埋める？　と小首を傾げる者がいる。

「黒印の葬士として、混乱する戦場で出来る限り礼儀を尽くし、お悔やみを行い——」
「あー、ジーク……さん」
市長が、遠慮がちにジークを遮る。
「その、葬士とは、いったい……」
「葬士とは、文字通り、人を葬る騎士だ」
「はあ……？」
「戦いで大勢死ねば、誰もが、つい無駄死にではないかと考えてしまう。その前に死者を葬り、みな立派に死んだ、自分も頑張ろうと兵に思わせるには、熟練した葬士が必要だ」
「つ、つまり、貴方の職業は……」
恐る恐る訊く市長に、ジークがぼそっと、
「墓掘りだ」
その一言で、何人かが、失神して倒れた。
「な、な、墓掘り……？　フェ、フェリシテは、わ、我々にも、死ねと言うのか……？」
「このことは他言せぬように！」
市長の嘆きを押しのけ、ブランカが叫ぶ。
「市民は、援軍が来るという希望のもと団結しているのだ！　軍団ではなく墓掘りが来た

などと知れては決戦どころではない。特に――ノヴィアには、言うな……不憫すぎる」
一同、呆然としながら、うなずいた。
「では、仕事にかかろう」
「仕事……？」
「来る途中の草原で、死者の群を見た」
ブランカが額に手を当て、自嘲気味に返す。
「……三日後、敵が集結する前にこちらから討って出る予定だ。その前に、彼らが立派に死んだと、我々に思わせてくれ。ただし、君が黒印の騎士であることは他言無用だ」
「分かった。報酬は後払いで良い」
「か……金を要求するのか？」
驚くブランカに、ジークは淡々とうなずき、
「討って出た後の分は、サービスしておく」
それを最後に、部屋を出ていった。
みな、呆気に取られて言葉もなかった。
ごばあっ。ジークのひと掘りで恐るべき量の土砂が宙を舞い、また一人、埋められた。

かと思うと、丁寧に、一つ一つ違う弔いの句を上げる。どこから用意したのか、無数の墓碑が、見る間に草原に並びゆく。しかも全部きちんと、故人の名が刻まれているのだった。

そのジークからやや離れた木陰に、杖と籠を手にしたノヴィアが、隠れるようにして、

「ジ、ジーク様っ、お、お昼にしてっ……あ、あのっ、私、お昼をご用意して……」

懸命に町への標識に声をかけている様子に、

「ノヴィアぁ、それあの男と違うー」

アリスハートが、呆れ返って言う。

「いつまでやってんのよ。本当は朝ご飯用意したのに、そんな調子で昼になっちゃって」

「だ、だって、まず練習してから……」

「そこで何をしている」

「きゃぁっ!?」

ぬっと現れたジークに、跳び上がらんばかりに驚いて悲鳴を上げるノヴィアであったが、

「あ……あのっ！」

咄嗟に声の主を察し、相手の方を振り向くや、手にした籠を突き出し、一息に言った。

「お昼のジーク様も少しお休みになって私をご用意しませんかっ！」

「ちょ、ちょっとノヴィア、意味不明すぎ」

ジークは、突き出された籠を、しばらく無言で見つめていたが――。やがて、ぼそっと、

「食べ物か」

感謝もせず、籠の中に手を突っ込んだ。だが中身を手に取り、ふと、眉をひそめて、

「食べ物……か？」

得体の知れない形状をしたものを見つめた。

ごてごてした青色のような緑色のような塊の、触った感じはどうやら元はパイ生地らしい物の匂いを、神妙な顔で、嗅いでいる。

「ノヴィアの趣味は料理なのっ。まだ誰も食べようとしたことは無いけどねっ」

と、宙を舞うアリスハートがけらけら笑う。

「い、い、一生懸命にアリスハートの手も借りるほど忙しく作りましたっ」

「あたしや猫かっ。つーかノヴィア、変」

ふむ、とジークが呟き、ばくりと食った。

うげっ、と声を上げたのはアリスハートの方だった。そのまま、ばくばく食らい尽くす。

「あのっ、お茶もありますっ」

差し出されるままに、どす黒い液体を飲み干し、更に籠の中の赤やら緑やら、何とも言えぬ色と形をした物を食いまくる様子を、

（まるで野良犬だぁ……）
アリスハートが唖然と見つめている。
黙々と食うジークの前で、もじもじと真っ赤になるノヴィアにも、深々と溜息が出た。
先日、意識を取り戻して以来、完全にこの土饅頭屋の男にのぼせるノヴィアなのである。
（雛鳥の刷り込みみたいなもんかねぇ）
卵から孵った雛鳥が、条件に適合した物を親だと思いこむ習性のことである。思い込みとも言う。それまでは偉大な母が対象だったが、死んでしまったため、母の遺言にその思いを寄せ、そしてこの男に行き着いたわけだ。
（よりにもよって、こんな男にねぇ……あたしだったら、断然、ブランカ様だけどさぁ）
ブランカの肩に座る自分を想像してきゃーきゃー笑う、――と、ジークと目が合った。
「おい、チビ」
「チ、チビと違うっ、小さいだけだいっ！」
「お前も食ってみろ」
咄嗟に逃げる間もなかった。口の中に、どどめ色をした物体をひょいと放り込まれた。
ぎょっと目を見開くアリスハートは、ふと、また違う理由で、目をまん丸にみはった。
とてつもなく上等なチェリーパイの味が、口いっぱいに広がった。味どころか香りも抜

群だった。信じられなかった。
「見た目を問題にする者は、真実を逃すぞ」
何ともあっさりとしたジークの言いざまだった。もっと分けてくれるのかと思ってたら、ぽんと全部自分の口に放り込んでしまった。
「美味かった」
ぱっとノヴィアの顔が輝いた。
「ついて来い」
「え……？」
「飯代だ。葬法を教えてやる」
「あ、あの……」
「朝から俺を見てたのはそのためだろう？」
知っていたのか、とは言わなかった。咄嗟にうなずいた。心臓がどきどき鳴るのがアリスハートにも聞こえそうだった。
「そいつはガリア派だ。両腕に赤い布を巻いていた。聖典の黎泰記篇は暗唱しているか」
「はいっ。聖典は、母が毎晩……」

「ロスコの『死を甘んじ受くる祈』だ」
ノヴィアが慌てて、墓前に祈りを捧げる。
「右にある奴はハナ派だ。大十字を二回、小十字を四回切り、浄歌の第二篇で慰めろ」
そんな風にノヴィアに指示を飛ばし、ジーク自身は土を掘り続ける。その二人の間で、アリスハートがつまらなさそうに浮いていた。
「ノヴィア」
「は、はいっ」
名前を呼ばれただけで真っ赤になった。
「そこから右は、お前には無理だ。一歩左に寄れ。そう。その列を頼む。宗派は——」
初対面でいきなり葬法を叱られたノヴィアは、内心、いつ未熟さを叱り飛ばされるかと怖がってもいた。が——ジークは、決して無意味には怒らなかった。冷厳とはしていたが、指示する声も穏やかで、死者に対するジークの優しさのようなものさえ感じるのだった。
「ノヴィアぁ、あたし少し遊んで来るー」
退屈しきってアリスハートが飛び去るのも気にせず、懸命に作業を続けるノヴィアへ、
「お前も、少し休め」
ろくに目も向けていないのに、正確にノヴィアの疲労を見抜いたようにジークが命じる。

素直にその場に座り込むノヴィアへ、
「当分、お前の目は開きそうにないか」
ぽつっとジークが言った。質問というより独り言に近い。ノヴィアの目が丸くなった。
「見えすぎることのショックで、逆に心が目を塞いだのかもしれん。――辛いか？」
「い、いえ、私にはアリスハートが……」
「あのチビがいるか。それとも、こんな世の中、見たい物など、無いか」
「私……」
「見ることとは戦うことだ。この世に大切な物が無くなった者から戦いの場を退いていく」
その厳しい口調に、思わずノヴィアが花の萎れるように項垂れる。――と、
「それも、良いんじゃないか」
「え……？」
「見えないのは怖い。俺だって怖い。その怖さに耐えてまで目を塞ぐのも一つの勇気だ」
「勇……気」
「いつかまた大切な物、見たい物が見つかるまで、目を塞いで生きるのも良い」
ノヴィアが、ぶるっと震えた。顔を伏せたまま、気づけば、目が勝手に涙を流していた。
「大切な物……。私には何も無いです……」

嗚咽の合間に、押し殺したように言う。
「貴方様には、あるのですか……」
ジークは答えず、ふと土を掘る手を止めた。
「風が、熄んだな」
はっと、ノヴィアが顔を上げた。
ジークの言う通り、あれほどまでに荒れ狂っていた風が、ぴたりとおさまっている。
ふと、差し込む陽光の暖かさを膝に感じるや、唐突に、大勢の人に感謝された時のような気持ちが湧いていた。
いや——実際に、そうなのだ。それは、死者が永遠の眠りにつき、魂が天への旅に発った時の、安寧と感謝の念に他ならなかった。
今や草原全体が無限の優しさに満ちていた。これが、ジークにとっての大切な物だろうか、と咄嗟に思った。その途端——
「ジーク様……ありがとうございます」
勝手に、そんな言葉が口をついて出ていた。まるで葬られた死者達が、自分を通して、ジークに感謝の気持ちを告げているようだった。
「まだ、早い」

だがジークは、ぽつりと返し、言った。
「まだ、最後の大仕事が、残っている」
「手はずは、整ったな？」
ブランカの言に、部下達がうなずき返す。
「黒印騎士団とやらを警戒したせいで、だいぶ遅れたが、ようやく市民を皆殺しにし、都市をドラクロワ卿に献上出来るな……」
それを木陰で聞いたアリスハートは、全身が凍りついたようになった。いつもノヴィアと散歩する道をふわふわ飛んでいたら、遠目に麗しのブランカ様の姿を見かけ、夢中になってすっ飛んで行った――その矢先だった。
「さて……いよいよドラクロワ卿の下に馳せ参じ、我らを辺境送りなどにした忌々しい聖法庁に、目に物見せてくれようか……」
「では、決戦を待たずに全軍で……」
「いや慌てる事はない。折角、あの男に、先の戦いの死者を埋めさせているのだ。あの四方八方から嬲り殺した死体を、見る者が見ればすぐに怪しむだろうが……墓掘りが埋めてくれるお陰で、誰も我らの謀叛に気づかん」

「とんだ埋め合わせですな」
部下の一言で全員が笑った。アリスハートの嫌いな、陰湿な悪意のたっぷりふくまれた笑いだった。特にブランカの笑う顔は信じられなかった。あの麗しさが消え果て、醜悪な毒トカゲみたいな顔で笑っていた。
「それに、奇襲は、私の美学に反する」
「美学……ですか？」
「貴様ら、絶望の黄金律を知っているか？」
さあ……と皆、首を傾げる。
「知らんのも無理はない。私が作ったのだ」
それじゃなぁ、と皆、苦笑いを浮かべる。
「人間を刺し殺す最高の刃は、剣ではない。絶望だ。私は、その絶望を長年研究してきた。そしてついに、一つの美学を、極めたのだ」
ははぁ、と皆でかしこまる。
「人間は十三・五対一の時に最も絶望する。強力な武器などではなく数こそ絶望なのだ」
「あの、なんで小数点がつくんですか」
「十四人もいたら、けっこう重なってて見えないだろう。それ以上いても、認識出来ん」

ああ、まあね、そうか、と皆で納得する。
「そんなわけで、都市の人口に対し、ちょうど十三・五対一になるよう策を練ったのだ」
そこでふと、指を立て、にたりと笑うと、
「待て待て、更に絶望の策を思いついた」
アリスハートが慌てて飛び立つのも知らず、ブランカは部下達に何事か囁いている。

「だから、墓作ってる場合じゃないって！」
矢のように飛んできて、ノヴィアに事の次第を告げたアリスハートが、じりじりして叫ぶが――ノヴィアは、遠目で土を掘るジークに見えぬ目を向けたまま、動じた風もない。
「大丈夫。私達には、ジーク様がいるわ」
「あんな墓掘りに、何が出来るのよぉっ。あのシャベルで戦うってのぉ？　墓作ってて自分たちが墓に直行なんて、笑えなさすぎっ」
「それ、面白ーい」
「面白くなーいぃっ」
だがノヴィアは静かに微笑って、言った。
「もう、どうせ逃げられないわ。私が感じた軍勢は、つまりブランカさんの軍勢ってこと

だもの。この都市はもう、囲まれてるわ」
「そんな……」
「信じるしかないわ、黒印騎士団を。もし、私が死んだら、貴女が私のお墓を作ってね。貴女だったら、空を飛んで逃げられるから」
アリスハートは言葉も無くぶんぶんかぶりを振った。大粒の涙がぼろぼろ零れて飛んだ。

決戦の日——それは異常な光景を生んだ。
震えながら剣を手に、子供をふくめた総勢千人弱の老若男女が、ぞろぞろと都市を出て、決死の行軍に駆り出されてゆくのだ。うち、戦闘経験者は実に百人足らず。
「絶望を絵に描いたような行列だな」
シャベルを手に、戦死者を埋めるという目的で行軍に加わるジークが、冷然と呟く。
「大丈夫ですよね……ジーク様」
ノヴィアが思わずぎゅっとジークの外套の裾をつかんだ。手が震えている。
「心配するな。埋葬の計画は立っている」
「ああ、不安で死にそうだよぉ」
アリスハートが喚いた。そのとき、先頭が山間を越えた。敵軍の駐屯地を発見したらし

い。わああっ。叫びがほうぼうで起こる。戦術も何も無い。手にした武器を振り回しながら、獣のように敵の幕舎に雪崩れ込んだ。
「こう簡単に間隙を突けるわけが——」
ジークが呟く。どよめきが静まり、武装した市民達が、空の陣営をうろうろしている。人っ子一人いない。痛いほどの沈黙が降りた。
ジークが、ちらりと周囲の地形を見やった。
「東だな。太陽を背に来るぞ」
ずん！　統率された行進に特徴的な、地鳴りの音が響いた。それが、開けた地形の向こうから、続々と轟いてくるのだ。
あ……と、誰かがうっかり嘆息を漏らした。文字通り気の抜ける声だった。本当の兵士だったら既に部隊長に首を切られている。それほど、周囲の士気を削ぐ声なのである。
瞬く間に、眼前をずらりと騎馬団が並んだ。美しいまでに揃えた鉄槍の尖端が、市民達を半円状に囲み、その左右後背で重装歩兵が隊列を整え、手に手に剣と盾を構えてみせる。
総数ほぼ千。数の上では互角だが——
軍勢と軍勢同士の、奇妙な対峙の空白が過ぎていった。胃の痛くなるような沈黙だった。
「あれはっ！」

突然、市民が叫んだ。次々と皆が山間を指さすや、その先に、なんと黒印の紋章をはためかせる旗が、一斉に揚がったではないか。
赤籠手をはめた手に、銀に輝く剣を握り、千、二千と数を増やし、いつの間にか敵兵の左右を数千もの兵が埋め尽くしてゆく。
「黒印騎士団だ！　聖法庁の軍団だ！」
市民が万呼の喝采でそれを迎えた。
「ジーク様……本当に、軍勢が……」
「すす、すごい数だよ。こ、これで……」
ジークは淡々と軍勢の配置を見回し、
「思った通りか――」
素っ気なく呟いた。
しゅっ。幾つもの矢が、鋭く空を切った。
ぽかんとする市民に向けて、黒印の騎士達が、面白半分に矢を放ったのである。腕や腹を貫かれた市民が絶叫を上げた。喝采がぴたりと止んだ。悲鳴と苦痛の声だけが残った。
誰もが呆然と立ち尽くす中――
突然、けたたましい笑い声が上がった。

ブランカが、市民軍と敵軍の間に馬を立たせ、腹を抱えて笑っているのだ。黒印騎士団も敵軍も、どっと一斉に笑い出している。

「美しいッ！　良いよお前らその顔良いよ。すごく良い。最高だよ。絶望だよ。いやもぉ、わざわざあの娘の言う通り、剣も鎧も仕立てた甲斐があったよぉ、完璧だよ、もぉっ」

呆然となる市民に、舌なめずりをしてみせ、

「ざまみろ貴様らっ、今までさんざんこき使いやがってっ。お前らこれからだよ、絶望は情熱だよ、心の叫びだよ。うん、そうだな、そっちから行こうかなぁ、でもなぁ」

「やっぱ、こうなるんじゃないかぁ」

蛇が獲物を品定めするようなブランカの様子に、アリスハートが泣きじゃくる。

と――ジークがノヴィアの肩に手を当て、

「ジーク様……？」

「ちょ、ちょっと、あんた……」

驚くノヴィアを押しやって、市民の間をかきわけ、なんと敵軍の前まで出てしまった。

ぴたっとブランカと敵の笑いが止まった。

敵味方全員の視線が、一斉に二人に集まる。

ジークが、冷ややかな声音で言い放った。

「どうだ。皆、お前の言葉に踊らされてこうなった。目が見えなくとも気配で分かるだろう。よく感じろ、自分が招いた結果を」

「お、お前ぇっ、そんなこと言うために、ノヴィアをこんな所に連れて来たのかぁっ」

アリスハートが我を忘れてジークの胸元を叩きまくる——が、それにも構わず、

「特にあのブランカとかいう馬鹿が傑作だ」

淡々としたその一言で、みな啞然となり、

「はい」

はっきりとしたノヴィアの同意の声に、更に、敵味方の全員が、ぎょっとなった。

「お前の母親が、万一の時のために俺に託した策だったが、実際に使うことになるとは、思わなかった」

「はい」

「母親の言いつけ通り、ちゃんと黒印騎士団が人間の、、、、軍団だという噂を流してくれたな」

「はい」

「後は、俺がやる」

はい、と返すノヴィアの目に、涙が溢れた。

「え？　ちょっと、何なの、いったい」

「何だ、貴様、墓掘り風情が……」
アリスハートとブランカが同時に疑問の声を上げるのへ――
どんっ！　と凄まじい音を立ててシャベルを突き立てた。しん、と静まりかえる一帯に、ジークの静かな声が殷々と響き渡る。
「貴様らのような騎士の栄誉を汚す輩を一騎残さず闇に葬るには、、、、色々と策も必要でな」
かちり。シャベルの柄が回った。引き抜くや、歯だけが地面に残り、代わりに銀に光る鞘が現れた。その鞘を右手で握りしめ――
「黒印の騎士の剣は、聖咎の剣と言う。聖法庁に害なす者は独断で殺して良い、それは聖なる罪だ、という殺人許可証だ。そんな剣を、剝き出しで持ち歩く馬鹿がいるか」
抜き放った。なんとシャベルから、聖印を刻まれた鋭くも妖しい剣が一瞬で現れていた。
「黒印騎士団――亡き戦友の招きにより、ルールドの市民に、助勢する」
ぶふっ。静寂に笑い声が飛んだ。ブランカを筆頭に、万軍の敵兵が一斉に爆笑を上げた。
笑いさんざめく最中、むしろ冷淡に、
「面白すぎる。貴様が我々をここに集めさせただと？　この数の兵に、墓掘り一人で？」
「ノヴィア、その妖精と一緒に、市民を安全な場所に誘導しろ」
そう命じ、悠然と立ちはだかるジークに、敵陣が思わず笑いをのみ込んだ。

ジークが、言った。
「俺が、軍団だ」
ブランカの顔から表情が消えた。手を挙げ、全軍に見せつける。
「馬鹿が……せいぜい美しく皆殺しになれ」
同時にジークもまた右手の剣を下ろし、すっと何も持たぬ左手を高く掲げている。
そして、ブランカが文字通り手を下す刹那、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
叫びを上げるや、その左手に白く眩い電光が走った、愕然となる敵陣の眼前で、雷花の咲き乱れる手を振りかざし――激しく地面に叩きつけた。
するとにわかに地中から青白い稲妻が幾つも迸り、ついで颶風が吹き荒れたではないか。
ブランカを筆頭に、敵軍が一斉に慌てふためいて頭を抱え、咄嗟に身を伏せた。
一拍の間が空いた。――何も起こらない。
全軍が恐る恐る顔を上げた。あるのは、地面でぱちぱち爆ぜる、雷花の名残ばかり。
「み、見かけ倒しも、ほどほどにしろっ！」
ブランカが喚いた。そのときである。
ずん！

一糸乱れぬ足音が、地響きを沸かして左右後背から怒濤のように押し寄せてきた。
ずん！
市民達が真っ先にその姿を目にし、悲鳴を上げて我先にと逃げ出してゆく。
「非業の魂ども！　土刻星の連なりの下、剛魔ダゴンとなりて我が敵の前に立て！」
続々と歩み来るそれは、実に、無数の汚い鉄の塊であった。一見、重装歩兵に見えたが、頭が無い。首から直接、獣の口に似たものが生え、ぞろりと牙を剝いているのだ。
「蟹座の陣！」
ジークの言下、数千にものぼる数の怪物どもが、一分の遅滞もなく、整然と三個の突撃方陣を整える。かちかちかちかち。一斉に牙を鳴らし、その音が無数に増え、雨のようにざぁあっと響き渡った。ついで鉄塊の胸元がめきめきと音を立て、錆びた匂いをまき散らし、槍のごとき角を胸に生やし出す。
「貴様らに嬲り殺された者達の魂だ。堕界で新たな肉体を得て、復讐に猛っているぞ」
「た……た……魂？　復讐？」
「い、い、い、弔い合戦だ。皆殺しにし——闇に葬れ」
びゅん。ジークの剣が空を切った。
剛魔の群が地鳴りを上げて驀進を開始した。

「う、うぉおおっ？　突撃っ、突撃ーっ！」
慌てて号令を下すブランカに応じ、俄然、雄叫びを上げて騎士団が槍を構え、突進する。
瞬く間に正面から激突した。剣、鉄が打ち鳴らされ、肉が砕け、血がしぶいた。
兵力と兵力の真っ向からのぶつかり合い——いわゆる全軍の消耗戦である。その様は、高台に避難する市民達の目に、互いにぶつかりあって飛沫を上げる、二つの巨大な波濤そのものに映るのだった。
「ノ、ノヴィアぁ……何あの化け物ぉぉ」
がたがた震えるアリスハートを胸に抱きながら、ノヴィアもまた凄まじい戦闘の気配に顔を青ざめさせつつ、答えて言った。
「堕界に堕ちた魂達よ……憎しみに汚れ、殺戮でしか鎮魂のかなわない、悲しい魂……」
「あの男が死人を埋めてたのは、このためだったの？　し、死人を、あんな姿に……」
「違うわ。死者の魂が、それを望むんだって母さんが言ってた……。あの男は、堕界の魂を招く、〈招く者〉……たった一人の、軍団」
凄まじい鉄と血飛沫の嵐の中、一人、ジークが静かに佇み、鋭い目を凝らしている。
やがて、その目に何かを見定めたのか、

「居たな。——どうする、お前達」
周囲で円陣を組む剛魔どもに、声をかける。
途端、剛魔どもが一斉に牙を剝き、ごうごうと何かを喚き立てた。
「それが、お前達の——唯一の、弔いか」
同じ頃、徐々にブランカの言う絶望が広がり始めていた。動く鉄塊を突き倒し、仕留めたかに見えた瞬間、鉄が割れ、更に幾つもの剛魔が現れるのである。やがてその数はブランカのいう黄金律に着々と近づくのだった。
一方、もはや言葉にもならぬ絶叫を上げて馬を駆るブランカは、次々と側近を失い、やがてただ一騎となったところを四方から剛魔どもの角に襲われた。瞬く間に馬を串刺しにされ、貪り食われる。間一髪、地面に転がり落ち、慌てて這うようにして逃げるが——
その進路を魔兵に塞がれ、ブランカが振り返った時には周囲をぐるりと取り囲まれている。震える手に剣を握りしめ、左右を見回すが、一向に襲って来ない。まるで、誰かを待つように、じっと円陣を組み、佇んでいる。
間もなく、魔兵どもの円陣の一角が開き、剣を手にしたジークが現れた。
「最後は自分の手で、というわけかっ」
ブランカが血走った目を剝き、吠えた。

「彼らが、それを望むんでな……」
ジークが言う。そのとき、戦慄くブランカの視線が、はっとジークの左手に注がれた。
血だ。雷花を帯びるジークの左腕が、籠手の下で著しく出血しているのだ。
「……これか？　魔兵を招いている間は、左腕が使えなくてな……」
ブランカの顔が、みるみる喜悦に染まった。
「化け物を操る代わりに……貴様自身も、化け物の望みを無視出来ない、というわけか」
答えぬジークに、舌なめずりをして言った。
「貴様を消せば、この化け物どもも消えると見た。馬鹿な市民どもめ。死んで化け物の体を貰ったところで、愚鈍の兵であることは変わらんな。最後の最後で一騎打ちなど甘すぎる。所詮、戦場では兵の数こそ真理だ」
「彼らは、俺を信じてくれている」
それが、ジークの答えだった。
「馬鹿が、その腕で私に勝てるものか！」
叫ぶや、両手で大振りの剣を握りしめ、猛然と間合いを詰めた。びゅっと空を裂き、刃を捻らせ、負傷したジークの左手側の下方から、鋭く斬り込んでくる。
ジークにこれを躱す余裕は無く、不自然な体勢で剣を受ける他ない。だがジークは、す

っと剣で撫でるように相手の刃を摺り上げ、火花を散らすや、するりと、全く自然な動きで二人の位置を入れ替えていた。ブランカは勢い余って二、三歩進み、慌てて振り返った。転瞬、ブランカが見たこともない迅さの剣撃が送り込まれてくる。ぎょっとなってそれを打ち払うが、あまりの衝撃に両腕に痺れが走り、危うく剣を落としかけたほどだった。
すかさずジークが攻勢に転じ、ブランカはその剣をかろうじて受けながら愕然となった。明らかに右手のみで振るうことを前提とした剣技なのだ。しかも両手で柄を握るのと違い、刃の届く範囲は格段に広い。
左手は死者のために血を流し、右手にその死者の願いをもって剣を振るうジークの姿を、今や、何百何千もの魔兵が――そして市民が、じっと見守っている。
「き、貴様さえ、貴様さえ来なければ！」
ブランカの絶叫が上がり、その声もろとも、ついにジークの剣がその首を刎ねた。宙を舞うブランカの首が、魔兵の群の中に落ちる。
魔兵どもが、一斉に轟々たる咆吼を上げた。
と――次々に魔兵が形を失い、がしゃがしゃとやけに呆気ない音を立てて崩れ落ちていった。戦場に、もはや人の姿はない。累々たる戦死者の上で、魔兵どもが、どろりとした黒い液体をまき散らしながら頽れてゆく。

やがて――ふわり、と倒れた鉄塊から、微光が昇った。瞬く間にその光の数が増え、やがて空一面、無数の光が天に昇りゆく中――

「案外、残ったな」

ジークの足下では、黒い液体がずるずると集まり、ジークの影を更に黒々と染めてゆく。

「いいさ。いずれ俺も、お前達と一緒に、あいつの足下に沈むか、それとも――」

目を細め、囁くようにその名を口にした。

「ドラクロワ……」

「綺麗だよ、ノヴィアぁ……魂が、お空に還っていくよぉ」

アリスハートが、天を眺めて言った。光は、それを見守る市民達にも、何の説明も無いままに深い悲しみと安堵とをもたらしていた。

「見たいな……」

ぽつりと、ノヴィアが言った。

見えぬ目をみはって、地上の惨劇に一人立つ男の、その静かな気配を遠くに感じながら、

「私も、見てみたいな……」

小さな声で、呟いていた。

第二話　ギュンターツィヒの森

青空の広がる昼下がり――大勢の人が行き交う街の入り口に、一人の男が、肩に大きな物を担ぎ、静かな足取りで差し掛かったとき、
「ジーク様、お願いします！」
凜とした呼び声が、男の足を止めていた。
声の主は、男の背丈の半分にも満たなさそうな、小柄な少女である。
潑剌と栗色の髪を束ね上げ、青い法衣に旅装を帯び、胸には、聖性を力とする、〈銀の乙女〉の紋章を飾っている。
「私を……私を、従士にして下さい！」
手には、盲目であることを示す、白木の杖を握りしめている。物を見る力を失った、淡い紫の目を虚空に泳がせ、必死に気配を探り、男の居所を測ろうとしていた。
そのような状態で、そもそも、どうやって、相手の存在を確かめられたかと言えば――
「ちょっとつ、さっきから呼んでんだから、少しは返事するとかしなさいよぉ、もぉっ」
少女の肩先で、喚くものがあった。
掌ほどの大きさの、女性形をした妖精である。金髪金瞳、白いシルクのドレスをまとい、その背で震える羽の翅脈も、金に輝いている。

この妖精が、少女の目となって、少女の道行きを、助けているというわけなのだった。
だが男は、杖を突いて近寄る少女に、その必死さを認めてやるようなことは何も言わず、
「こんなところで、何をしている」
憮然と、言い放ったものだ。
「あんたを追っかけて来たんじゃないかっ」
妖精が、少女の代わりに、喚き散らす。
「ずーっと声をかけてるのに黙ったっきりすたすた歩いてくなんてっ。ノヴィアの目が見えないの知ってんでしょっ、少しは……」
「良いのよ、アリスハート。ありがとう」
少女は、宥めるように妖精を撫で、
「ジーク様。私を、貴方の従士に……」
言いつのるのへ、男がやおら向き合い、
「ついてくるな」
一言のもと、切り払った。
さすがに、少女が、息をのんで絶句する。
「れ、冷血漢っ！　ノヴィアがどんな思いでここまで歩いて来たと思ってんだよぉっ」

喚きながら、一向に動じる風もない男を、妖精が、呆れ返る思いで眺め返す。
しなやかな長身に、裂け目だらけの白外套、黒革の鎧に、頑丈一点張りの赤い籠手。さながら、戦場を渡り歩く、一匹狼の傭兵といった風情で、そんな野蛮な男、つくづくこの妖精――アリスハートの好みではない。
ただ、その装束に似つかわぬ端正な顔立ちをしており、その顔が、燃えるような赤髪に飾られている様など、実に妖しい魅力がある。
その点はアリスハートも認めるが、だがどうもその目が鋭すぎる。ちょっと見つめられただけでも、まるで狼に睨まれるようなのだ。
それに何より、男の担ぐ物が、異様だった。
行き交う人みな例外なく、男の担ぐ巨大な銀色のシャベルに目を奪われ、笑うとも呆れるともつかぬ顔で、避けるように去ってゆく。
万人に愛されるべき可憐な妖精としては、そんな男との同行を望む少女の気の方が、だんだんと知れなくなってくるほどだ。
ルールドの戦いから、十日余が経っていた。
男――ジークは、そのシャベルで、敵味方の区別無く戦死者を葬ることに、七日を費やした。ノヴィアや市民も、それを手伝った。

当初、葬儀の報酬を要求していたジークだったが、単に、死者を放置したことへのこの男なりの叱責だったらしい。結局、一銭も受け取らずに、あっさりと都市を出ている。
そのジークの潔然とした態度も、ノヴィアに決意を固めさせた要因の一つだった。ジークを追い、従士にしてもらう――その決断に、市長もみなも驚き慌てたが、結局、別れを告げるノヴィアを、呆然と見送るばかりだった。
行きがけに、母の墓前に祈りを捧げ、アリスハートと共に追うこと三日――ついに、ジークに追いついたのであったが……。
「俺じゃなく〈銀の乙女〉の者を師にしろ」
その態度は、実に冷然として、にべもなく、
「私、貴方の教えを受けたいんです！　貴方の下で修行すれば、きっと、また目が見えるようになると信じてるんです！」
負けじとなおも言いつのるノヴィアの胸中を、言葉にならぬ思いが駆け巡ってゆく。
自分の葬法の誤ちをジークに叱られたことや、それを正したジークのお陰で、死者に安寧が訪れたこと、そして、そのとき大気に満ちた限りない優しさのこと――
なにより、敵に復讐することでしか浄化のかなわなくなった魂の群を、魔兵として率い、見事に敵を撃滅した〈招く者〉としてのジークの存在は、ノヴィアにとって、

（偉大な母に匹敵するただ一人の人――）
であった。そしてそういう男であればこそ、母から受け継いだ偉大なる透視の力――万里眼の力が使いこなせず、盲目となった自分を、
（導けるのは、この人だけ――）
と思い詰めるのも、至極当然といえた。
そうしたノヴィアの思いを、道中、切々と聞かされてきたアリスハートもまた、
「あんた、ちょっとはノヴィアの気持ちも聞いたらどうなのよぉっ。冷血っ、狼男っ！」
思わず舌鋒鋭くなじるのだが、ふと――
「死んだらどうする」
ジークの言葉に、意表を突かれて黙った。
「俺の任務は、綺麗なものばかりじゃない。死んでも、誰も見向きもしないものも多い」
途端にぎくっとなるアリスハートだが、ノヴィアの方は、むしろ敢然となって迫る。
「私の母も、危険な戦いの旅を続けてきました。幼い私も、何度もそれを見てきました」
そこでジークはしばらく黙り込み、やがて、
「お前に、真実を葬ることが出来るか？」
「――え？」

「偽りとはいかなる真実か？　欺きとは？」

「え——その……私……」

「答えられない者を、従士には出来ない。任務を理解出来ずに、逆に、俺を殺そうとする従士も、いる……」

ノヴィアの錯覚であろうか……。

ふと——そのジークの淡々とした口調が、ひそかな悲しみを帯びたような気がしたのは、

「今まで、四人の従士を連れたことがある。みな、死んだ。二人はその時の敵に殺されたが、残りの二人は、俺に斬られて死んだ」

静かに告げながら、一層鋭くなるジークの眼光に、ひぇ……、とアリスハートが怯えきってノヴィアの首筋にしがみついてきた。

ノヴィアも、言葉が出ない。恐いのではない。目に見えない分厚い壁を、ジークとの間に感じていた。その気持ちを察したように、

「去れ——」

ジークのその声だけが、不思議と優しい響きを帯びて、ノヴィアを突き放していた。

ノヴィアの杖を握る手が、震えた。ジークが背を向けるのが、気配と音で分かった。アリスハートも何も言わない。そのままジークの気配は人混みの中へと、消えていった……。

「ノヴィアぁ、もうあんな男、放っとこうよぉ。他にも道はあるよ、きっとぉ」
アリスハートが怯えて言うのへ、ノヴィアは、はっと我に返り、強くかぶりを振った。
急に——自分が許せなくなっていた。
いったい、何が許せないというのか。
奇妙なことに、自分がジークを傷つけたのではないか、という気持ちが起こっていた。
自分は絶対に死にません。貴方の任務も、必ず、理解出来ます——すぐに、そう返せなかった自分が、妙に情けなかった。
その情けなさをぐっと噛みしめ、
「頑張るのよっ、ノヴィアちゃん！」
激励の声を上げた。そしてすかさず——
「はいっ！　頑張りますっ！」
自分で応じるノヴィアに、アリスハートが、
「出たよ……ノヴィアの一人頑張るちゃんが。こうなると何言っても無駄なんだからぁ」
がっくりと、うなだれるのだった。
翌朝。靄も晴れぬ頃、ノヴィアが建物の陰で待っていると、アリスハートが声を上げた。

「来たよ、あの男だ！」

果たして、今しもジークが、教会裏の、巡礼者の宿から出てくるところであった。

目の見えぬノヴィアにもそれが分かった。ジークは物静かな男だが、気配は灼熱に等しい。戦いの意志を秘めた強い気配が、静かに街並みを抜け、都市を出てゆくのを、杖を突く手もひそやかに、そっと追った。

先日、ジークの姿を見失ったものの、その行方は、すぐに分かった。そもそも聖法庁の者が、都市で身を寄せる場所といえば、教会以外にない。ノヴィアもまた、都市の修道院で、巡礼者のための部屋を、借りていた。

「明朝、森に行くと言っておったなぁ」

教会の教父は、あっさり教えてくれた。

「お前様の師は何も教えてくれぬのかね？」

「自分で調べよ、と……それも修行だと」

「ふむ。何もかも言葉にしようとする者もいれば、一切無言で背ばかり見せる者もいる」

「私には、良き師です」

「うむ、うむ」

教父は、すっかりノヴィアがジークの従士であると思い込んでいる。これはノヴィアが、

「私の師ジーク様は、どちらへ？」
と、夕刻になってジークが街に出たのを見計らい、教父に話を聞き出したせいである。
「ギュンターツィヒの森はご存じかな？」
教父の問いに、ノーヴィア達が首を横に振る。
「裁き司の森のことですよ。森は、裁判所であり、また服役の地でもありましてね」
「服役……？　森が、牢屋なんですか？」
「罪人は、森の金鉱で働かされたのです。しかし、十年前には金も涸れ、都市は寂れ、来る者も死刑囚ばかりになりましてなぁ……」
「死刑囚……って、ことは……」
アリスハートが嫌な予感に身をすくませる。
「森全体が処刑場と化したのです。再び金が採れ、都市が繁盛しても、それだけは変わらなかった。かつては森の霊獣に見守られ、公明正大な裁きを誇る森だったのですが……」
霊獣は森の中心に生える聖木の化身である。
人間が森で裁きを行い、金を採ることを許すばかりか、罪人たちがちゃんと罪を償えるよう、時に厳しく、時に優しく、人間に接してくれていたという。
しかし森が単に処刑の場と化したためか、霊獣はいつしか姿を消した。代わりに、処刑

された者の怨みが凝り固まって生じた魔獣が、森を徘徊するようになった――という。
そんな森にジークが何をしに行くかは分からなかったが、処刑場だろうと魔獣だろうと、ノヴィアの気持ちに躊躇いはなかった。
目的は一つ。ジークの役に立ち、自分を従士として認めてもらうこと。それだけだった。
最後に、自分が来たことをジークに言わないよう頼むと、教父はにっこり微笑んで、
「私も、従士の頃は苦労したものですなぁ」
快く、口止めに応じてくれたのだった。

都市を出てしばらく進んだところであった。街道を逸れ、いよいよ鬱蒼とした森に入るかに見えたとき。ふと、ジークが立ち止まった。
すぐさまアリスハートがそのことを告げ、ノヴィアも茂みに身を潜めた。その途端――
ジークの気配が、見事に消え去っていた。
「そんな、一瞬で……」
慌てて茂みをかき分け、そして、呆然と立ち尽くした。急いでアリスハートが飛び回って探すが、既に影も形も無い。
「分かってたんだ……尾けてること……」

萎れつつも、すぐに、屹然と面を上げた。
「これも修行なのですねっ！」
「え、ちょっと、誰に言ってるのさ」
「行くわよ、アリスハート！」
「ま、待ってよ、この森には魔獣が……」
「大丈夫。心を開けば、魔獣だってきっと貴女みたいに私の友達になってくれるわ」
「そ、そんな無茶苦茶な……」
アリスハートが呆れるのも構わず、ノヴィアは、今や隠れもせず颯爽と歩き出していた。
朝靄も晴れ、木漏れ日が清々と光を頭上に零す頃になると、緑が鮮やかに萌える様子に、
「綺麗な森い……」
魔獣の恐怖も忘れてアリスハートが呟いた。
「変な森ねえ」
「変……？」
「気配が無いのよ」
「気配？」

「鳥とか動物とか……一匹もいないわ」
アリスハートの目が、まん丸になった。
「魔獣さんがみんな食べちゃったのかしら」
「ややや、やっぱ早くここ出ようよぉぉ」
「大丈夫よ、魔獣の気配も無いもの」
あっさり返し、杖が岩に当たるのを感じて足を止めた。そっと岩の上に腰を下ろし、
「お昼にしましょう」
宿でこしらえた食べ物を、たすき掛けにかけた荷袋から取り出した。包みを開くと、中からとても口に入れる物とは思えぬ、奇怪な緑色の物体が現れる。はい、とかけらを渡され、アリスハートが恐る恐る食べてみると——これが、とてつもなく美味いのだ。
「ノヴィアの料理は、食べるのに勇気が要るのよねぇ……見た目と違って、中身は美味しいんだけどさ」
ぶつぶつ言いながらも、かじりついた。
食事を終え、すぐに歩き出すノヴィアに、
「あんたもタフよねぇ」
魔獣を恐れないことに加えて、朝から歩き通しなことも、言っていた。

「ルールドに居着くまでは、ずっと母さんと巡礼していたもの。旅には慣れてるわ」
丁寧に杖で探って木の根を避け——やがて、ひときわ太い木々が生える辺りに出た。
「ひゃぁあっ……」
途端に、アリスハートが、悲鳴を上げて、ノヴィアの肩にしがみついてくる。
見渡すばかりの木々に、何かが吊されている。最初は、沢山の大きな荷物が、木の枝に吊されているのかと思った。それらが、一瞬で、首を吊られた死体の群となって、アリスハートの目に飛び込んで来たのであった。
「しし死んでる、死んでる、死んでるぅぅ」
四方八方、死者の群だった。風に揺られてぎしぎし縄が軋み、枝がしなる音が、調子っ外れの合奏のように鳴り響く。
「ノヴィアぁ、こ、こ、怖くないのぉぉ？」
「死んでるんでしょ？　魔獣の方が怖いわ」
「どっちも怖いよぉぉぉ」
ノヴィアの足が止まった。そっと木陰に身を隠す。ざっ、ざっ、と土を抉る音とともに、
「あ、居た……」
アリスハートの呟き通り、ジークが一心にシャベルを地面に突き立てていた。傍らには

既に葬ったらしい墓がずらっと並んでいる。
その様子をノヴィアが木陰から窺っていると、
「そこで何をしているっ」
突然、金切り声のような叱咤が飛んできた。
咄嗟にノヴィアが身を強張らせたが、ジークの声ではない。五、六人ばかりの男女が森から現れ、ジークを誰何しているのだ。
みな、ゆったりとした緑の衣を着ており、黄金の杖を持ち、髪も耳も金で飾っている。
「誰の許しで、勝手に罪人を葬るかっ！」
どん！　答える代わりに激しくシャベルを突き立てるジークに、緑衣の者達がたじろぎ、
「ジークー・ヴァールハイト。黒印騎士団」
そう名乗るや、みな神妙な顔を見交わした。
「黒印騎士団とな……」
嗄れ声とともに、ひときわ深い緑色をした衣の老人が前に出た。鋭い目つきで、身の丈の倍ほどもある黄金作りの杖を振りかざす。
「ならば、その証しを、示されよ」
かちり。ジークがシャベルの柄を回し、引き抜いた。地面に歯だけが残り、別の柄が現

れ、それを握り、抜き放った。ひと振りの剣が、鮮やかな銀の輝きを振り零した。
おお……と緑衣の者達がどよめき、
「黒き騎士の持つ、聖咎の剣……確かに」
老人が、炯々とした目で見据え、言った。
「いったい、何用で森を訪れた」
「森の守護者との盟約に従い、助勢に来た」
「助勢じゃと……？」
「ドラクロワが、現れたそうだな」
老人の目が、ジークに劣らず、鋭くなった。
「ドラクロワとな。確かに……つい先頃、か、の、反逆児に煽られた無法の騎士どもが、この地の金を狙って、攻め寄せて来おったわ」
「なぜ、聖法庁に、届け出ない」
「その必要もないからじゃ。全員、森の法にもとづき裁いてやったわ。そこで勝手に埋められているのが、それらの無法の騎士どもじゃ」
「黒印騎士団の葬法は、取り調べも兼ねている。この死体の検分を、させてもらう」
ふん、と老人が嘲るように鼻を鳴らした。

「――九十八名。心ゆくまで検分し、さっさと立ち去れ。助勢などいらぬ。この森は平穏そのものじゃ、我らの裁きによって、な」
そう言い捨て、他の者達と去っていった。

「ドラクロワって、誰ぇ？」
「聖法庁の大切な物を盗んで逃げ出した人だって、母さんが、言ってたわ。ジーク様は、その人を追って、ここに来たのかしら……」
ノヴィアは、出て行こうかどうか躊躇いながら、一心にジークの気配を探っている。
やがて、ジークが全ての死者を葬り終えた。
異変が起きたのは、そのときだった。
アリスハートが宙を振り向き、ノヴィアもあっと声を上げた。二人とも突如として頭から冷水を浴びせられたような感覚に襲われていた。
「な、な、なにこれ……？」
何か目に見えないものが四方八方を飛び交い、次々に二人の手を、足を、腹を、通り抜けてゆくのだ。それらが声無き声を上げて集まろうとする先に――ジークがいた。
「やはりそうか……。良いだろう、弔われざる者ども……その憎念、俺が、引き受ける」

空気が更にざわめいた。ノヴィアが顔を青ざめさせ、辺りを振り仰いだ。
「堕気が……死者の怨念が、集まってくる」
ジークが、膝をつき、苦悶の声を上げた。そのまま、どっと、前のめりに倒れ込む。
沈黙が落ちた。いつの間にか、空気のざわめきが、消えていた。まるで、全部どこかに、入り込んでしまったような、呆気なさだった。
ノヴィアの唇から、熱い吐息が零れた。
「あの人は、たった一人で……ああして、死者の堕気を、受け入れて……」
涙がにじんだ。到底、自分には出来ない業だった。思わず木陰から出て、最後にジークの声がした辺りへ、杖で探り歩み寄っていた。
「ちょ……ちょっと、ノヴィア」
慌てて追うアリスハートの頭上を、再び、何かが、猛烈な勢いで駆け抜けていった。
今度は、死霊の類ではない。形と重さを持ったものだった。それが、凄まじい地響きを立て、ジークのすぐそばの地面に着地した。
きゃっ、と悲鳴を上げるノヴィアに、それが、血のように真っ赤な目を向ける。
それは、たてがみも尾も全身漆黒の体毛に包まれ、身動きするたびに、体から硫黄の臭いのする青白い煙を噴く、巨大な獣であった。

「バババ……魔獣うう？」
獣が、雷鳴にも似た唸りを巨大な口から漏らし、のそりと、ノヴィアに近づいた。
それを見たアリスハートの頭の奥の方で、何かが切れた。すっ飛んでいって獣の顔に体当たりするや、滅多打ちに叩きまくった。
「ここ、こいつこいつこいつこいつぅぅ！」
ごおっ！　獣が吠えた。赤黒い口に、巨大な牙がずらりと並ぶ様に思わずアリスハートは失神しかけた。
が、涙を振り零しながら慌てて身を翻す。今度は倒れたジークに飛びついて、
「起きろオマエ起きろオマエ、〈招く者〉だからって招くなこんなもの！　起きろぉぉ」
手も足もめちゃくちゃに振り回してジークの顔を叩きまくるが、一向に目覚めない。
「何て静かな気配……」
そこへ、ノヴィアが、何を思ったか、そっと獣に手を差し伸べようとする。
「うわあああ、駄目それ違う危ないいいい」
混乱の極みに陥るアリスハートの目の前で、刹那、獣の肩に、黄金色の矢が突き立った。
獣が咆吼を上げて振り向く。続けて現れた者達に、アリスハートは、恐さと驚きで一杯になりながら、それでも、驚いた。

それは、一個の兵団であった。
それも、黄金色に輝く兵団である。
兜も甲冑も黄金なら、その槍も盾も何もかもが黄金作りという、燦然たる重装歩兵達が、続々と隊列をなして獣に向かってゆくのだ。
「黄金兵団よ、やつを討てっ！」
喚いたのは、先ほどの緑衣の老人だった。
金の輝きを振り零す兵士達が、漆黒の獣に向かって一斉に槍を向け、攻め寄せる。
その隊列は見事な統制ぶりで、間もなく獣は追いやられるようにして、森に消え去った。
「そなたは……？」
「この方の……ジーク様の、従士です」
老人の問いに、咄嗟に、そう答えていた。
「そうか……危ういところであったな。負傷したならば、我らが館に来るがいい」
はい、と答えるノヴィアの頭上に、安心して脱力したアリスハートが、ひらひらと宙を舞う木の葉のように、落ちていった。
裁き司の館は壁一面、黄金に輝いていた。

その燦めく館を見ても、あまりに驚く事が多くてすっかり食傷気味のアリスハートは、
「これ、窓まで金だったら、不便よねぇ」
呆れたように、呟いただけだった。
「お台所を貸して下さい」
何か要るかと訊かれ、ノヴィアが即答した。
アリスハートも手伝い、出来上がったものを持って部屋に戻ると、夕日の輝きの中に、
ジークが窓の外を見ながら、佇んでいた。
ジークが振り向く気配を察して、ノヴィアは、盆を手に、そっと相手に近づいた。
「堕気払いの薬草を、幾つか混ぜています」
ジークは、ノヴィアがここに居ることには何も言わず、椀とスプーンとを受け取った。
「〈銀の乙女〉の触れる物には聖性が宿る。薬以上にそれが堕気払いに効く。礼を言う」
アリスハートの顎がかこっと下がった。この男が、人に感謝するとは思わなかったのだ。
ノヴィアは、思い切って言った。
「たとえ、堕気を力にする堕法の使い手でも、あれほどの堕気に身を冒され続ければ……
何年もしないうちに、死ぬと思います」
アリスハートが、目を丸くする。ジークは、手を止めずに、椀の中身を食った。

「堕気払いが出来る、聖性の使い手が、いつも側にいる必要があるのではないですか」
たとえば、自分のような人間が——そう言おうとして、口ごもった。今こそ、自分がジークに必要とされるチャンスだと思った。だが、なぜか、最後の一言が出てこない。
「そうかもしれない」
ジークが淡々と言った。心なし、ノヴィアを避けるように窓を見やる。最大のチャンスに何も出来ないノヴィアの代わりに、アリスハートが無邪気に宙を舞って、窓辺に寄った。
「なになに？　なに見てんの？」
「裁き司達の——宴だ」
見ると、館の前で、例の老人を中心に、緑衣の者達が輪を作り、何ごとか喚いている。
「……では続いて、六日後に到着する罪人達の予審に入る！　まず一人目は——館の薪を盗んで、自分達のために使った使用人！」
「……別に良いじゃん、そのくらい」
だが裁き司達は一斉に杖を振り上げ、
——死刑！　死刑！　死刑！
かこっとまたアリスハートの顎が、外れた。
「……では二人目。家畜を死なせた獣医」

──死刑！　死刑！　死刑！
「では三人目。税を滞納した農民」
──死刑！　死刑！　死刑！
延々と耳にこびりつくような死刑宣告が続き、アリスハートは開いた口が塞がらないどころか、気持ち悪くなってきた。
「来る……」
ジークが呟いた。何が、と訊く間もなく、素早く空の椀を置き、シャベルを手に取った。
途端──がらん、と鈍い音がしてシャベルが転がった。シャベルを取り落としたジークの左手が、物もつかめぬほどに震えている。
その気配を察して、反射的にノヴィアが近寄った。何も考えていなかった。ただ、何かが悲しかった。その悲しさを確かめるようにしてジークの左手に触れ、両手で握っていた。
「なぜ……そうまでして、戦うのですか」
訊きながら、ノヴィアはふいに、なぜ先ほど自分が言葉を失ったかを悟った。ジークが命を削る理由も知らぬまま、その心に踏み入るような真似は、出来なかったからだ。
いや、既に、そのままでは死ぬなどとジークに言ってしまった。ジークにそれが分かっていないはずがないのに。それなのにジークが従士を持たないのは、それだけ、かつて自

分の従士を斬ったという、その悲しみが強いからではないのか。それなのに自分は……。
「すいません……余計なことを訊きました」
顔をしかめて、零れそうになる涙を堪えた。
ぽつねんとアリスハートが見守る中、
「……その聖性の強さ、母親譲りだな」
いつしかジークの手の震えが止まっていた。
「今回だけ……一緒に来てもらう」
はっと、ノヴィアは見えぬ目を見開き、
「こんな場所まで、ついて来るとは思わなかった……その強情さも、母親譲りだな」
「は……、はいっ！」
慌てて顔を上げ、間が遅れた返答をしていた。

館から出てきたジーク達に、老人が予審を中断し、にやりと歯を剥き出して笑いかけた。
「黒き騎士よ、歩けるならば、再び森の魔獣に襲われる前に、森を出てゆくがいい」
「そうはいかない。盟約を守り、助勢する」
その言葉に、裁き司達が一斉に笑い出した。

「要らん、要らん。獣のそばで、ぶざまに倒れ伏していたのは、いったい誰じゃ」
ジークは何も言わず歩み寄った。ふとその足が止まるや、くるりと、館を仰ぎ見た。
「なんという、静かな気配だ……」
その視線を追って、誰もがぎょっとなった。
なんと、館の屋根に、先ほどの漆黒の獣が、唸りを上げてこちらを見ているではないか。
全身に青白い煙霧をまとい、真っ赤な目を見開くや、咆吼を上げて躍りかかってきた。
「お、お……黄金兵ーっ！」
またたく間に周囲の森から黄金の兵団が現れるが――今回は、間に合わなかった。
緑衣の男女の半数が、一瞬で巨大な獣の牙と爪の餌食となった。その阿鼻叫喚の騒ぎに、ぎらぎらと黄金の輝きが突入する。
ジークは、悠然と銀剣を抜き放ち、
「おいチビ。この森で一番高い樹を探せ」
「チ、チビじゃないやっ！」
「急げ。魔獣が増える」
その言葉に、アリスハートはぎょっとなって慌てて空高く舞い上がった。夕闇が迫る中、森の更に北に、異形の大きさの樹が見えた。

戻ってきてそう告げるアリスハートに、
「よし。いったん退却し、その樹を目指す」
ジークが、言った。
そのとき、獣が凄まじい咆吼を上げた。全身を矢に射られ、完全に槍で包囲されている。
ジークは、すっと獣を包囲する兵へ歩み寄るや、剣を旋風のごとく左右に迅らせた。
鎧さえ両断する、凄絶な剣閃だった。
黄金兵の首が二つ、同時に宙を舞う様を、アリスハートが、ぽかんと見守った。
「ノヴィア、チビ、来い！」
目の見えぬノヴィアは、事態を理解せず、呼ばれるままに、急いで足を運んでいる。
「ななな、何をしとるかぁっ！」
喚く老人に、ジークは、つと振り返り、
「盟約により、森の守護者に助勢する」
しごく当然のように、言ったものだった。
老人達が呆気に取られるのも構わず、素早くノヴィアの体を抱き上げ、叫んだ。
「魔獣が出るぞ！　森の王よ、退却を！」
ノヴィアの下で、暖かなものがうねる感触と、硫黄の臭いとが起こった。気づけばなん

と、ジークと共に漆黒の獣の背に乗っていた。

そのとき、斬り倒された兵の鎧が、めりめりと音を立てて裂けた。卵から孵る雛のように、鎧を突き破って現れ出るのは、実に、鶏の頭に蜥蜴の手足という異形の魔獣であった。

ジーク達を乗せて、漆黒の獣が走った。

「逃すなっ！　殺せっ、殺せぇーっ！」

老人の恐れと怒りにまみれたような声が、みるみる背後に遠ざかっていった。

「魔性の黄金を招き出す、禁断の秘儀だ」

走る獣の背で、鋭く、ジークが言った。

それは、堕界から招かれる、意志を持った黄金なのだという。人の欲望を刺激して操り、あらゆる命を餌に増殖し、あの黄金の鎧をまとう魔獣を生み出すのであった。

「それが……涸れた金鉱の代わりに、裁き司達が手に入れた、黄金なのですね……」

ノヴィアは、ぞっと震えた。裁き司達は、黄金を増やすためだけに、あのようにごく軽い罪の者達まで、死刑にしていたのだ。

「森に動物がいないのも……黄金の餌に」

「無慈悲な刑を止めようとして、魔獣に殺された、九十八人の騎士の命もな」

ふいに、獣が膝をついた。横倒しになる寸前、ジークがノヴィアを抱えて飛び降りる。
獣は、眼前の巨木にぶつかり、止まった。
すぐさま、ジークが駆けつける。
獣は立ち上がれぬまま、苦しそうに喘ぎ、その真紅の目を、じっとジークに向けてきた。
「聖法庁と古き盟約を結ぶ、裁き司の霊獣よ。その憎念、俺が引き受ける」
獣が咆吼を上げた。その巨体が崩れ、真っ赤な液体と化した。それが見る間にジークの足下に――影に、流れ込んでゆく。
「うわーっ、ななな何この樹ぃーっ」
見上げれば、そこにアリスハートの見つけた巨樹があった。裁き司の館よりも大きな幹に、青く幽かに光る聖印が刻まれている。
枝は奇怪にねじ曲がり、そこから無数に垂れ下がる、脈動する果実があった。それらが割れるや、腐ったような臭いをまき散らし、黄金の兵が、続々と生まれ出て来るのだった。
「聖木を、堕界の魔獣を招く扉と化したか」
ジークが、低く呟きを漏らす。
ふいに、木々の闇に無数の篝火がともった。
絢爛たる黄金兵団が、剣の距離ではなく、弓矢の距離で、瞬く間に包囲を敷いてゆく。

「森の平安を荒らす罪深き者どもっ。一人残らず、我らの黄金の苗床にしてくれるわ！」
息を荒らげて喚く老人に、ジークが言った。
「一つだけ訊く。この秘儀を、お前達に授けたとき、あいつは、何と言った」
「これが我らを救うと仰有ったのだ！」
途端、傍らのノヴィアが慄然となるほどの凄まじい戦いの気配がジークの全身に満ちた。
「貴様らを裁く者達が——必要だな」
ジークは、ずらりとひしめく黄金兵団に対し、すっと、静かな動作で、その左手を掲げ、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
叫ぶや、その手から白熱する電光が迸った。
どくん！　巨樹が戦慄したように鼓動し、
「無念の魂よ！　火刻星の連なりの下、砲魔ネルヴとなりて我が敵を撃て！」
雷花を帯びる手を激しく地面に叩きつけた。
地中から稲光が発し、風が吹き荒れ、その凄まじさに黄金兵団が隊列を乱した。
刹那、前面に並ぶ黄金兵達が、いきなり木っ端微塵に爆発し、粉々に吹き飛んでいた。
アリスハートとノヴィアが慌てて耳を塞ぐ。
あの漆黒の獣の咆吼にも似た轟音が次々に上がり、立て続けに爆発音が轟いたのだった。

濛々と立ちこめる爆煙から、ぬっと魔兵が姿を現した。数は九十八体。焼けただれた体に、仮面のような顔貌。全身から煙霧を噴き出し、その右腕はみな、巨大な砲身だった。
「獅子座の陣！——撃てっ！」
砲魔の軍団が即座に凸型の陣形を整え、一斉砲火を放った。前面の黄金兵に弓を引かせる間も与えず爆殺し、続々と進軍を開始する。
「か、数では優っておるのだ！　囲めっ！」
老人の言葉は正しく、黄金兵が左右から攻め寄せるや、後陣の砲魔達が次々と槍の餌食となった。アリスハートが、おどおどして、
「ちょ、ちょっと、この人たち弱くない？」
「近接戦闘には向かない兵種だからな」
あっさり返し、陣形の中心で進撃を命じて、
「ノヴィア、どうにかしてくれ」
いきなり立ち止まり、左腕を突き出した。
ノヴィアが触れると、ぬるぬるした熱いものが滴っている。血だ。夥しい出血だった。
ノヴィアは慌てて手探りでジークの籠手を外した。何をどうして良いか分からぬまま、自分の法衣の襟をまくり、咄嗟に衣服の中に、ジークの血まみれの腕を突っ込んでいた。

「わ……私の聖性で、堕気を中和します。……うっ、動かさないで下さいっ！」
首まで真っ赤になって言った。
「助かる」
眉一つ動かさず言うジークに、ぐっと腕を押しつけられ、ノヴィアが悲鳴を零した。
「〈招く者〉の軍勢より、我らの黄金兵の方が優っているぞ！　それ、攻めよ、それ！」
老人が、満面に喜悦をしたたらせて喚く。
老人の目には、ジークの軍団が、黄金の輝きに追われ、必死に逃げるように見えるのだ。
その老人の表情が、急に、一変した。
なんと、逃げると思われた砲魔の軍団が、素早く転進し、老人達に向いたのだった。
凄まじい砲声が轟いた。その流星雨のごとき火球の数に、老人達が愕然と凍りついた。
が——文字通りそれは、流れ星となって、黄金兵団の更に後背へと、消え去っていった。
「馬鹿めっ、的を外しおったわ！」
老人が快哉を叫び、黄金兵団を、怒濤の勢いで、砲魔の群に攻め寄せさせる。
——そのとき、にわかに、暗い夜が赤く燃え上がった。
老人が振り返ると、なんと、森が、火災に沈んでゆくところであった。

「ひ、ひ、火を消せーっ！」
老人の絶叫に、更なる全軍砲火が重なった。
今度は、流星にはならなかった。
陣の前面をなしていた五十体ほどの黄金兵が一度に爆殺され、無数の破片と化している。
今や、包囲されているのは黄金兵団の方だった。左右後背の炎、前面は砲撃の嵐――
やがて、炎は、異形の巨樹にも及んだ。その果実が次々に焼けただれ、地面に落ち、気づけば黄金兵団は、一切の援軍を失っていた。

「血が止まった。お陰で、腕が保った」
ぱちりと腕に籠手をはめ、ジークが言う。
ノヴィアはジークの血で染まった襟元を握りしめ、真っ赤になってかぶりを振った。
「い、いえっ、お役に立てて良かったです」
「お前達は、このまま真っ直ぐ街道に出ろ。……決着をつけた後、森の入り口で会おう」
ノヴィアは素直にうなずいた。ジークは砲魔を引き連れ、燃え盛る森へと向かった。
老人は必死で火から逃れようと走っていた。

他の者達がどうなったかまるで分からない。汗だくで喉がからからだった。体が重い。
ふと自分が金で飾られていることを思い出し、慌てて金細工を外そうとして愕然となった。
金が体から離れない。手にした杖さえ放すことが出来ないのだ。その重さに悲鳴を上げ、
ついには金の重みで力尽きて倒れた。
火はすぐそこまで迫っている。必死で這いずる老人の前に、ジークが剣を手に、立った。
「己の欲望のために許しを忘れた裁き司よ……許さない者こそ、最も許されない者だ」
「ひぃっ、貴様っ、貴様ぁっ」
「火に焼かれた黄金が、力を取り戻すため一か所に集まろうとしている……餌をつれて」
老人が、呆然となった。金細工が、ずるずると、老人の体を引っ張っていくのである。
「この黄金に冒された者を救う方法は無い……焼け死ぬ苦しみを、味わいたくなかろう」
老人は、目に涙を溜め、ジークを見上げた。
やがて、震えながら、うなずき、
「ドラクロワに会うたら、わしに代わって、訊いておいてくれ……これが、救いかと！」
老人が、最後の絶叫を上げ――途絶えた。
ずるずると、老人の体と首が、金に引きずられ、炎の中へと、消えてゆく。
ジークは、その無惨な様を、静かに見つめ、

「俺も、それを訊きたいよ……ドラクロワ」
ぽつりと呟き、燃え上がる夜空を見上げた。

「死刑にされた人達はどうなるんだよっ！」
猛然と言うアリスハートに、ジークは、いまだ遠くに炎の残る焦土を眺め、言った。
「この森に起きたのは、ただの不幸な火事だ。赦しを忘れた裁き司など存在しなかった」
「んな……大勢死んで、森を焼き滅ぼして、そんで何にもありませんでしたって？　ノヴィア、やっぱこんなわけ分かんない奴についてくなんて、あたし反対っ！　絶対反対っ！」
躍起になって喚き散らすアリスハートに、ふとノヴィアが、しゃがみ込んで、言った。
「……私も、初めて聞く音」
へ？　とアリスハートが目を丸くする。
ぱちり。まだ熱を帯びた灰の中で、何かが鳴った。ぱちり。なんとそこに、火で炙られるようにして、弾ける種子があった。
「森には、必ず、火事があって初めて芽生える種があると、母が、言っていました……」
「そうだ……。古来、火で滅んだ森は無い」
「へえー……って、ご、ごまかすなぁ！」

「もし、裁き司の悪事が公になれば、あの都市の人達も、罪に問われるのでしょうね」
えっ、とアリスハートがびっくりするが、当然、これほどの事態であれば、森の黄金で栄えた都市全体の連帯責任になる。主立った財産は聖法庁に没収され、死刑者も出る——
「だからこそ、葬るのですね……真実を」
さすがのアリスハートも、言葉に詰まった。
ノヴィアは立ち上がり、胸に手を当てた。
「偽りとは死んだ真実です。欺きとは殺された真実です。偽りは真実を隠すこと、欺きは真実をねじ曲げること……昔、母が教えてくれた聖典にそうあるのを、思い出しました」
胸に、拭われぬままのジークの血を感じた。
「人を生かすために、真実を葬る……それがたとえ、偽り、欺くことであっても……貴方は、それを背負って……」
声が震えた。アリスハートが慌てて宙を舞い、心配そうにノヴィアの頬に手を触れた。
「私に、そんなこと、出来ないかもしれません……でも、私、ジーク様について行きたい……だって、真実を葬るということは、一番、真実に近い場所にいるということだから」
襟を握りしめ、顔を伏せた。その見えぬ目を更に強く閉じても、涙を止められなかった。
「私……真実が見たい。もう一度、目を開くために……。迷惑……ですか」

そのノヴィアを、ジークは静かに見つめ、
「……迷惑じゃない」
はっとノヴィアが顔を上げると、すぐにまた、焦土に目を戻し、
「……そう言えば、今まで、料理の上手い従士は、いなかったな」
どこか、憮然として、呟いていた。
アリスハートが、きょとんとなる。
「それって、ついてって良いってこと？」
「……今回だけだ」
なんともはっきりとしない返事だが、ノヴィアの涙で濡れた顔に、笑顔を咲かせるには、十分だった。思わずアリスハートまでつられて微笑んでしまうほどの、満面の笑みだ。母親が死んで以来、ノヴィアがこんな笑顔を見せるのは初めてのことで、それだけでも、
「ま、良いか……」
そう思う、アリスハートなのであった。
ジークは、相変わらずノヴィアを見もせず、
「ただし、一つだけ条件がある」
「は、はいっ。何でも守ります」

「守れそうにない場合は、すぐに放り出す」
「は……、はいっ」
「俺に、お前の墓を掘らせるな」
その言葉に、ノヴィアはかっと胸が熱くなった。そして今度こそ、即答していた。
「はいっ。絶対に！」
ふと、そこで、ジークが奇妙な顔になった。
それは、アリスハートの目に奇妙と見えただけで、実際は、微笑したのかもしれない。
そんな相手の表情も知らぬまま、ノヴィアは、今や師となった男の傍らにつき、ともに歩むその最初の一歩を、踏み出していた。

第三話
ラグネナイの涙

夕闇とともに淡い霧雨が立ちこめ、涼やかな香りが巡礼宿の一室にも入り込んでくる。
部屋の壁際には、黒革の鎧が置かれ、その上の鉤に、ボロボロの白外套が吊されている。
小机には、血塗られたかのような赤い籠手と、いかにも苛烈な戦装束が並んでいるが
――最後に小机の隣に置かれた物を見たら、多くの者が、きょとんとなるに違いない。そ
れは、剣でも槍でもなく、とても武装とは縁遠い、大きな銀色に光るシャベルなのだった。
今、それらの荷の持ち主である男は、武装を解いた長シャツ姿で、テーブルにつき、用
意されたシチューを静かに口に運んでいる。
しなやかな長身に、長い手足。白皙の、鼻筋の通った、美貌といっていい顔立ちを、炎
の如き赤髪が、妖しく飾っている。
赤みがかった灰色の鋭い目を、やおら、テーブルの向こう側にいる者へ向け、
「ノヴィア、少し、塩が多い気がするな」
「そうですか、ジーク様？」
と、自分も食事を口に運びながら、むすっとして返すのは、小柄な少女である。
栗色の髪を溌剌と束ね、青い法衣に身を包み、胸元を、聖性を身に宿らせることで力を
得る〈銀の乙女〉の紋章が飾っている。

その、旅暮らしにも白さを失わぬ滑らかな頬が、何かを堪えるように、紅潮しており、
「美味しくないですか」
淡い紫の目は茫々と焦点を定めず、物を見ていない。傍らには、盲目であることを示す、
白木の杖が、立てかけられている。
「美味いが――少し、塩辛い気がする」
「お下げしましょうか」
「いや――おい、チビ」
男が呼ぶと、テーブルの隅でパンを齧っていた、掌ほどの大きさのものが、顔を上げた。
女性形をした、妖精だった。金瞳に金髪、白いドレスの背から伸びる金の羽を震わせ、
「チビって言うなぁ、とんがり目の狼男！」
「パンを分けてくれ」
「嫌だよーだ。パンが無いと塩辛くて……」
言いさして、首をすくめた。
少女が、無言で席を立った。こつこつと杖を突き、台所でパンを切り、皿に盛って、
「どうぞ、ジーク様。アリスハートも」
むっつりと、テーブルに置く。少女がいない隙に、水を一息に飲んでいた男と妖精が、

同時に、音を立てぬよう、コップを置いた。
席に戻ったノヴィアの顔は、そっぽを向いている。しーんと部屋の空気が張りつめ、そういうのが苦手なアリスハートが、
「あ……明日は晴れるかなぁ」
「曇りね」
「曇りだな」
「な、なんで分かるのさ」
「雨が引く気配がするから」
「風が雨を宥めている」
「あ……そう」
場を明るくしようとするのだが、黒雲漂う空気に縮こまってしまう。この黒雲、もくもくとノヴィアの全身から湧き立っており、
「明日、任務に出る。お前達は、街にいろ」
ジークが言うや、その黒雲がぴかっと稲妻を発するのを、実際にアリスハートは見た気がしたほどであった。
「な……なんでですかっ！」

ノヴィアは激しくテーブルに手を叩きつけ、
「私、貴方様の従士です！　なのに、もう一月近く食事しか作らせて貰ってません！」
「それも修行だ」
「私、ジーク様が今、どんな任務でこの街に来たかさえ知りません！　前の街も、その前の街も、その前の前の街も、ジーク様が傷を負って帰って来るのを、待ってただけで！」
「お……落ち着いて、落ち着いて、ノヴィア、そんな、良いじゃん、楽なんだし」
「私、自分が情けなくって……っ！」
唇を噛んでうつむき、アリスハートも、おろおろと宙を舞うばかりであった。
そこへ、つと空になったシチュー皿を出し、
「ノヴィア、お代わりを頼む」
ジークが、ぽつりと、言った。
これに、アリスハートが、ぎょっとなった。
本来、ノヴィアの料理は、見てくれはともかく美味いのだが、これぱかりは、とてもこれ以上食う気になれぬ——まるで涙をそのまま煮込んだかのような塩辛さなのである。
アリスハートが、あわあわとおののくのも知らず、ノヴィアは目尻を拭い、手探りで皿を取ると、台所でシチューを盛ってきた。

その間、ジークは一滴の水も飲んでいない。
差し出されたシチューを黙々と平らげ、
「……美味かった」
その声が嗄れて聞こえるのは、果たしてアリスハートの錯覚であろうか——
一方、はい、と返すノヴィアの声は、どうやら、幾分か落ち着いたようであった。
ジークは、テーブルを離れ、左袖をまくった。上腕から手首にかけて包帯が巻かれており、それを解くや、その下から現れたものに、アリスハートが再びぎょっとなる。もう何度も見ているのだが、どうにも慣れないのだ。
聖印——聖法庁が管理する、様々な力をもたらす刻印である。普通、それは剣や鎧などに刻み込むもので、人体に施すものではない。
今、アリスハートの目に映るのは、複雑な刻印にびっしり覆われたジークの左腕だった。
堕界への扉を開き、死者の怨みをこの世に具現するジークの力の、これが秘密である。
腕の聖印は、強い力を行使するたびに出血するため、あちこち血がにじんでいる。
その様子が、アリスハートには烙印を思わせ、ぞっとしてしまうのだ。
ジークは、自分で新たな包帯を巻こうとするのだが、これが、なかなか綺麗にいかない。
どうもジーク、案外に、不器用らしい。

「お手伝いしましょうか」
「……頼むむ」
目の見えぬノヴィアの方が、よほど手際よく綺麗に包帯を巻いていくのであった。
「……私、お役に立てていますか」
「お前が触れる物には、聖性がやどる、それが、俺の強すぎる堕気を、中和してくれる」
「じゃあ……私を連れて行けば、戦いの最中に、強い堕気に命を奪われそうになっても、私の血を浴びれば、助かりますね」
「こ……っ、怖っ、ちょっとノヴィアぁ」
「もう一度言ったら、その場で放り出す」
「じゃ……せめて、聖法庁の人と任務の話をする時だけでも同席させてくだされば……」
「まだ駄目だ」
「まだ、まだ、まだって、ジーク様……いつもそれで……いったい、いつまでですかっ」
ノヴィアはそのまま包帯をぎゅうぎゅうぎゅう縛り上げるが、眉一つ動かさぬジークに、ぽつねんと手を離し、うつむきながら、杖を手に取った。
「私達の宿に行きましょう、アリスハート」
「あ……うん」

「おやすみなさい、ジーク様」
「くれぐれも大人しくしていろ。命令だ」
と、釘を刺すような声が飛び、たまらず、
「わ……私が子供だからですかっ」
「未熟だからだ」
「いやぁ……同じことのような」
「私の目が、見えないからですかっ！」
勢い込むノヴィアに、ジークはぴしりと、
「俺が気に入らないなら、従士をやめろ」
これにはさすがのノヴィアも青ざめ、さっとドアを開き、何も言わずに飛び出した。
「お、お前ぇっ、そりゃ無いだろっ。冷血漢っ、狼男っ、ノヴィアが可哀想じゃんかっ」
アリスハートが騒然とノヴィアの後を追う。
それを見送ってから、ジークは淡々とドアを閉めた。それから、さっと足を速め、テーブルの水差しを手に取り、一気に飲み干した。
ふうっと息をついて口元を拭い、締め付けられた包帯を解こうとするが……果たしてノヴィアの思いが込められているゆえか、それとも、単にジークが恐ろしく不器用なだけか、

「解けん」

珍しく眉をひそめ、憮然とうつむいていた。

「私……母さんから受け継いだ力を……いつまでも使いこなせないで……この目さえ開ければ、万里眼の力で、きっとジーク様も……」

「そんな……ノヴィアは、目が見えないんじゃなくて、目で見ないだけだよぉ。ノヴィアに、そんな力、要らないよぉ」

「……アリスハートは、友達思いなのね」

「そうよぉ。あたしみたいな優しい妖精は、他にいないんだからぁ」

「私……野良妖精だった貴女とお友達になれて、本当に良かったな」

「野良違うっ。妖精はもともと自由なのっ」

ノヴィアがくすっと顔をほころばせ、ようやくアリスハートも、ほっと息をついていた。

すぐ近辺にある修道院への道すがらだった。

そこで、ジークとは別個に――つまり男女別々に巡礼者用の部屋を借りているのである。

「早く大人になりたいなぁ」

「急いでなることないじゃん。大人って面倒そうだし、どうせ、嫌でもなるんでしょぉ」

そうね、とノヴィアはくすっと笑って、
「あーあ、ジーク様も母さんと同じかぁ」
大きな声で言う。ふと、そこで、何となく疑念が湧いた。そもそも、偉大な母に匹敵する人物の従士になることが、当初の目的なのである。そしてそれは満たされているのだ。
それなのに、何もかもが不安だった。その不安に苛まれ、やけに苛立つのである。
そもそも、従士の分をわきまえるならば、色々と秘事の多い聖法庁の任務について、あまり詳しくジークに問わないのが当然だった。
また、任務の場につれて行かないのも、今のノヴィアの目の状態を思えば当然といえた。
しかしそうした理屈も、荒立つ心には何の意味も生じず、
「私……心まで盲目になってるのかな」
思いつつ、どうにもならない。
「早く……大人になりたい」
その言葉が、全ての答えのような気がした。
大人になる。目が開く。それで全てが解決する。けれども——いつまでたっても……
「じめじめするのって、嫌いだなぁ」
ふいに呟くのは、アリスハートだった。

これは単純に、天気のことを言っていた。
だがこの、いつでも明るさを失わぬ友達の言葉に、ノヴィアは心の底から感謝を覚えながら、そうね、とまた笑って同意した。
「明日は曇りかぁ……って、あれ？」
「どうしたの、アリスハート？」
「なんか……あっちの方から吹く風が、妙に──懐かしいような……気がして」
「あっちって、どっち？」
「うーんと、教会が右にあるから、北かな」
「北──？　そういえば、修道院の人が、北に、精霊のいる泉があるって……」
「精霊の泉……？」
「もしかすると、貴女がこの世界に招かれた場所なのかもしれないわね」
途端に、アリスハートが、どきっとなる。
「そ、そうかな。あたしの仲間がいるのかな」
急にそわそわして、落ち着きがなくなった。
その気配を察して、ノヴィアがどこか翳りのある微笑を浮かべ、
「貴女と私の約束ですものね……貴女が自分の居場所を探すまで、友達でいるって」

「そ……そんな、それまでってわけじゃないよぉ。ノヴィアはずっと友達だってばぁ」
本気でうろたえたようなアリスハートに、くすっと笑った。なんとなく嬉しかった。継承した万里眼の力を使いこなせず、視界が闇に閉ざされた時も、それに耐えられたのは、何よりアリスハートという友達の存在があったからだ――ノヴィアはそう固く信じていた。
友達……。その魔法の言葉を最初に口にしたのは、果たしてどちらだったろうか。

もう、二年も前のことになる。
ノヴィアはそのとき、泣いていたことを覚えている。目に涙を溜めるのではなく、心の中で泣いていた。なぜか。またその土地を離れなければならなかったからだ。
偉大な母――万里眼のフェリシテの力を望む者は、大陸中にいた。同じ地に留まることは滅多になく、自分はただ戦う母の後をついて歩くだけだった。多くの土地、人々、景色を見せてくれた母だったが、友達を作る機会だけは、与えてくれなかった。
母自身、母親として接してくれているというよりも、いつか自分の力を継承する弟子を育てている感じだった。人々も、母の娘というだけで親切にしてくれたが、ノヴィアの求める温かさは、与えてはくれなかった。
街の修道院や教会で出会う同い年の子供達も、多くはノヴィアのことを偉い人の娘とい

う風にしか、見てくれない。しかしそれでも、中には親しくなってくれる者達もいたが、母の次の任務が、ノヴィアと彼らを引き離した。

どれだけ多くの人々と出会えようとも、ノヴィアは、常に世界でたった一人だった。

出発は明日――。もう何度と無く経験し、涙を流すことさえ無くなった思いを抱いて、ノヴィアは一人、郊外の森を歩いていた。

そして、何かの気配を察して森の中へ入り込み、たまらない淋しさを紛らわすようにして歩き続けた末に――突然、見付けたのだ。

金色に輝くものを。最初は鬼火のようにも見えたが、何の危険も感じなかった。それどころか、その輝くものがしきりと訴えかけ、自分を招いたのだとさえ思った。だから、何の警戒も無く近づき、そして、訊いていた。

「あなたも、淋しいの……？」

その問いが、はっきりと何かの力を発揮するのが分かった。――途端、輝くものは瞬く間に形を得て、金色の妖精の姿となって、ノヴィアの掌に舞い降りたのだった。

呆気に取られながらも、名前は、と訊いた。

アリスハート、というのが答えだった。

どこから来たのかと訊くと、分からないと言う。分からないまま彷徨い、疲れて眠って

いたのだと、金色の妖精は泣きながら言う。
「私、ノヴィア。私も迷子みたいなものよ」
そう告げるノヴィアを、妖精は不思議そうに見つめた。それから日が暮れるまで、森を歩きながら、互いのことを話し合った。
そして森を出るとき――ノヴィアが言った。
「私の母さん、あちこち巡り歩くから、貴女の来た場所も、見つかるかもしれないわ」
「……それって、あたしも一緒に行くってこと？」
「そうよ。私と一緒に行かない？」
ノヴィアはどきどきしながらそう言った。妖精も、どきどきしながら大きくうなずいた。
友達になろう――それが、二人の魔法の言葉だった。どちらが先にそれを口にしたかは覚えていない。ただ、二人とも、それを先に言ったのは自分だと思っていた。
「行ってみましょうか、その泉に。貴女が懐かしさを感じるなら、行ってみるべきだわ」
「い、一緒に行ってくれるの？」
おどおどしながらアリスハートが訊き直す。
今まで、ノヴィアと共に色々な地に行き、自分によく似た精霊にも何度か出会ったのだ

が、全てが手痛い体験となっていたのである。
精霊達は同種族以外を、極端に嫌う。時にはアリスハートを敵だと思って攻撃してくるものさえいて、そのたびに、アリスハートは、ずいぶんと傷ついてきたのだった。
「どうせ、ジーク様が戻るまで、何もやることが無いもの。明日は、貴女の故郷巡りよ」
「ま、まだ故郷と決まったわけじゃないけど……。それにしてもノヴィアの行動力ったら、妖精のあたしでさえ敵わないのよねぇ。お陰であたしも色々な所に行けて、良いわぁ」
「あら、羽がある貴女には、勝てないわよ」
「いくら羽があって自由に飛べても、独りぼっちは怖くて寂しいだけだよぉ」
アリスハートの言葉に、ノヴィアもうなずいた。今、友達とは何か、と問われれば、ノヴィアはこう答えるだろう。それは、大人になるために通る真っ暗な道を、そっと照らしてくれる、灯りのようなものだと。
お互いの道を照らし合う、小さな灯りだと。
夜更けて、ジークの部屋を、教会の教父が訪れていた。足が不自由らしく、身を傾けるようにして歩み寄り、ノックをしつつ、
「入るぞ」

言うや否やドアを開け、きょとんとなった。
「何をやっとるんだ、ジークよ」
「……手伝ってくれ」
「うわっ、お前、手が真っ青じゃないか」
「解けん」
「解けんって……切ったらどうだ」
「折角巻いてもらった。勿体ない」
「…………？　何が勿体ないんだか」
教父が呆れたように結び目に手をかけ、力を込めると、不思議なくらいあっさりと解けた。そのまま、ちょうど良い程度に結び直す。
「ところでお前の従士……な、昼に、また来たぞ。ジークはどこへ行った、何しに行ったと、まるで親鳥を呼ぶ雛のようでなぁ。お前に口止めされて、何も言わなかったが……」
そこで、この教父、にやりと笑って、
「可愛いもんだなぁ、おい。お前がまた従士をつれるとはな。いやいや、包帯一つ解けん男が、よく従士無しでやってこれたもんだ」
「――ノヴィア達は、どうしてる」

「大人しくしとると、修道院長から聞いとる。お前、あんな可愛い従士が居たら、死ぬに死ねないだろう。な、な？」
　気さくにジークの背を叩きまくるこの教父、かつてのジークの戦友であるという。
　ジークは、それ以上、取り合わず、
「あいつの消息は、確かだな——？」
　本題を切り出すと、急に教父も真面目に、
「やつは、ノクターナの街に入った後、姿を消した。ラグネナイの泉で……な。追撃した騎士団も、俺の部下も、全て、消えおった」
「ラグネナイの泉か」
「あの泉とお前では、相性が悪い、が……今、やつを追えるのは、お前だけなんだ。この足でなきゃ、俺も、一緒に行きたいが……」
　言って、教父が右足をさすった。膝から下が無く、代わりに、木製の義足が生えていた。
「なに、百の戦場を生還し〈戦場の真理〉の称号を得たお前だ。可愛い従士もいる。たとえ相手が昔の親友だからといって……みすみす、やられることはないと、俺は信じとる」
　ジークはうなずき、そっと腕の包帯に触れ、
「死ねない理由が、増えるばかりだ」

相変わらず憮然としたまま、呟いていた。
霧の濃い朝だった。弁当を携え、ピクニック気分で出かけたノヴィアとアリスハートの頬を、ひんやりとした空気が撫でてゆく。
ノクターナの街に入った途端、やけに、しんとした空気が辺りを包んでいた。
人口数百人程度の小さな街だが、様々な薬草の栽培をし、名の知れた薬法士などもいて、
「もっと活気があると思ったのに……」
帰り際にジークのための薬を買おうと思っていたのだが、どの店も軒並み閉まっている。
「なんか、みんなで夜逃げしたみたい」
自分達の声が、陰々と路地にこだまする様に、二人とも何だか薄気味悪くなってくる。
「泉の場所を訊きたかったんだけど……」
「あ、看板があるよ、ノヴィア」
アリスハートがすいっと飛んでゆく気配を追って、ノヴィアが杖を突きつつ進む。
と――ふいに水たまりを踏み、慌てて足を引いた。
「変ね……水の気配なんか無かったのに」
道のところどころに大きな水たまりがあるらしい。水を避けていると、ふと、道沿いの、

開けっ放しの店の窓口に手を触れていた。
「水浸し。そんなに強く雨が降ったかしら」
そっと手を滑らせると、そこに置かれた商品らしい、様々な草葉もすっかり濡れている。
「ノヴィアぁ、泉の場所分かったよぉ」
その声で、奥に伸ばしかけた手を引っ込め、
「今行くわ」
そのとき、店の中一杯に満ちる水が、鈍い光を放ちながら密かに揺らめいたが、目の見えぬノヴィアは、それに気づかなかった。

麦畑の畦道を通ると、そのすぐ先は苔生す森だった。岩肌にびっしりと苔が密生しているお陰で、かえって足が滑らずに済んだ。
「川が無いのに、こんなに潤ってる……きっと湧き水が出るのね」
呟くが、アリスハートには聞こえておらず、しきりに辺りをきょろきょろ見回している。
「ねぇ、何か、気配する？　精霊とか……もしかすると、妖精とか」
「……あちこちに、何かの気配を感じるわ。でも変ね……精霊は、妖精と違って、招かれた場所から遠くには行けないのに。さっきの街と同じような気配がするなんて……」

「じゃ、じゃあ……妖精……かな」
ノヴィアには何とも答えられなかった。
そのまま岩道を進んでいると、ふいに開けた場所に出るのが空気の変化で分かった。かと思うと、杖が何かに当たった。手で触れると、岩壁が、行き止まりを告げている。
ノヴィアが、見えぬ目を丸く見開き、
「地面の気配を読み損なったかしら。壁がある感じなんか、しなかったのに……」
声が、尻すぼみに消えていった。
ふいに、ノヴィアは続けて気配を読み損なったのを悟った。今度はもっと身近な気配を。たった今まで居たはずなのに……
「アリスハート？……どこ？」
声が岩場に反響し、隠々と消えてゆく。
返事は無く、代わりにひときわ冷たい濃霧の感覚が来た。肌に水の粒子がまとわりつき、杖を握る手をうっすらと濡らしてゆく。
アリスハートを呼ぼうとして、ノヴィアの喉が、ごくっと鳴った。突然だった。アリスハートではない誰かの気配が起こっていた。
誰かが居る。二、三歩離れたすぐそこに、じっと黙って誰かが立っている。ノヴィアの

背中を、ふいに冷たいもので撫でられたように恐怖が滑り落ちていった。
「ノヴィアちゃん」
その誰かが――言った。
「私が見える？」
愕然と凍りついた。よく知っている声だった。しかも、もう二度と聞くことが無いと思っていた声――そう思った途端、心の中に何かがするりと入って来たような衝撃が起きた。
「いやっ！」
目に、光がにじんだ。自分の意志とは無関係に、閉ざされていたはずの視覚が、こじ開けられてゆくのだ。目が更に物を映し出し、
「せっかく授けた力を、そんな風に閉ざしていてはいけないわ……ノヴィアちゃん」
「いやっ、やだぁっ！」
慌てて手で顔を覆いかけた刹那、目に相手の姿が飛び込んできた。一瞬で目が離せなくなった。指一本動かせぬほどの恐怖に囚われながら、震える声音が、自然と零れていた。
「母さん……」
紫の目を持つ、万里眼の天使――。ノヴィアと同じ栗色の髪に、艶やかな青い法衣をま

とった母が、静かにこちらへ歩み寄る。
「来ないでっ！」
　訳が分からなかった。恐怖と――やるせない怒りが吹き荒んでいた。それまで心の底に封じ込めておいたものが、一挙に噴き出してゆく。いや――暴かれてゆくのだ。
（偉大であるというだけで、全て許されると思っているのか）
　他ならぬ自分の心の奥底から、そういう思いが込み上げてくることへ、呆然となった。
（挙げ句の果てに、自分を一人置いて死んでしまった。あんなに危険な戦いはしないでって言ったのに。自分一人の頼みよりも、大勢の人の頼みの方を聞いて死んだ母さんから、何も受け継ぎたくない。寂しさしか残してくれなかったくせに、万里眼の力が母子の絆なんて言うなら、そんな力、一生使わない）
「いやっ、やめてっ！」
　誰かが――何かが、自分の心の一番弱い部分を正確に貫き、こじあけ、潜り込んでくる。そのおぞましさに、ぞっと肌が粟立った。母への想いと憎しみが同時に暴き立てられ、自分が心の底では母を憎んでいたのだという事実が、恐ろしい衝撃となって心を揺さぶった。
「見えないことは、怖いでしょう？」
　母の冷たい手が、杖を握る手に触れてきた。

「目を開けば怖くなるわ。こっちへ……母さんが抱いてあげるから」
「いやっ。絶対にいやっ！」
慌てて手をふりほどくが、なおも母が手を伸ばしてきた。いや、母では無い何かが、自分を取り込み、押し包もうとしていた。
もがいた拍子に、その場に転倒し、母が覆い被さってきた。そのとき——
(見えないのは怖い)
誰かの声が、ノヴィアの脳裏に響いた。
(俺だって怖い。その怖さに耐えてまで目を塞ぐのも一つの勇気だ)
自分に、そう言ってくれた声——
(いつかまた大切な物、見たい物が見つかるまで、目を塞いで生きるのも良い)
まだ、従士になる前に、自分にそう言ってくれた、ジークの声が脳裏に甦るや、ノヴィアの心に決然とした抵抗の思いが湧き出した。
止めるのだ。自分の中に入って来ようとするこれを止めなければならない、荷袋を慌てて探った。慌てて探り当て——鞘から抜いた。
果物ナイフの刃が母の腕を水のように切った。なんの手応えも無く、刃はそのまま相手の首を切り裂き、母の首は人形のように後ろに倒れ、ぷっつりと裂けて地面に落ちた。

「そんなに憎いの？　ノヴィアちゃん……」
地面に落ちた母の首が、笑った。
「やあぁっ！」
「さぁ、私を……母さんを見て……その目で母さんを見て……」
「要らない……。こんなもの、要らない！」
叫んだ。ナイフを握りしめ、その切っ先を、自分の右目に向けて振るった。刃の鋭い光が、自分の目に永遠の闇をもたらす瞬間——
その刃の尖端が、自分の目ではない何かに、鋭く突き刺さっていた。かと思うと、しっかりと誰かの手がつかんで止め、
「離してっ、離してぇっ！」
涙を流しながら暴れる——と、いきなり、頬をもの凄い力で引っぱたかれた。
「泣くな！　涙がやつらを招く！」
はっと力が抜けた。呆然となった。いつの間にか母の姿が消え、代わりに——男がいた。
手にしたナイフの何倍も鋭い顔立ち。厳しさに満ちた目。燃え立つような赤髪——それらが断片的に、ぼんやりと視界に映り、
「ジーク……様……？」

その途端、こじ開けられていた心が再び閉ざされ、視界が元の暗闇に落ち込んでゆき、男の顔を自分の目から隠し込んでしまった。

かと思うと、いきなり抱き上げられた。慌ててその首にしがみつく。ふわっと体が浮いた。ジークが跳んだのだ。なんと軽やかな跳躍か。あっという間にその場から走り去る様は、まるで風に連れ去られていくようだった。

「ラグネナイの精霊達だ。人の心を読む力を持ち、人の魂に慰めを与える――」

ジークが言った。ノヴィアを抱えて走りながら、息一つ切らさない。その腕の温かさを感じていると、ふいに走るのをやめ、荷物でも下ろすみたいにノヴィアを地に立たせた。

「なぜ、ここに来た」

「あの、私達、妖精の泉を探して……」

「何も伝えなかったことが、裏目に出たか」

強い声音に、思わずびくっとなったが、

「怪我はないか」

その一言で、急に、ジークが自分のことを心配してくれているのが、伝わってきた。

「あ……ありません」

胸がとくんと跳ねた。心をこじ開けられたせいで感情が揺れやすくなってる感じがした。
「あの……ここはどういう場所なんですか？」
どきどきする鼓動を抑えるように、訊いた。
「ラグネナイの泉だ。聖法庁によって葬儀を禁じられた死者を、水葬にする場所だ」
「葬儀を禁じられた……死者？」
「自殺者だ。自殺は聖法庁の定める大罪の一つで、埋葬が許されない。ラグネナイの泉は、自殺者を葬ることの出来る数少ない場だ」
言い伝えでは、最初に泉に身を投げた娘の魂が、精霊を招き出し、以後、精霊は自殺者達の遺体を泉の底に沈ませ、その救われざる魂を慰めるという。そして、ノクターナの街の住人とは、そのほとんどが、泉に葬られた者達の、遺族なのであった。
「自殺……私、もう少しで自分の目を――母さんを……一番大事な存在なのに……」
「泣くな。人の涙がやつらに力を与えるんだ。敵を倒すまで――その涙、飲み込め」
「敵……ですか？　泉の精霊が――？」
「今はもう、招かれた使命を忘れ、生きた人間の魂の味を覚えた――邪霊だ。ノクターナの住人は、既に全滅していた……」
そこでふとジークがノヴィアの頬を撫でた。

「赤くなっている……強く叩きすぎた」
ふいに血の臭いが鼻を突き、ノヴィアは、自分が振るった刃が何を刺したかを悟った。
「ジーク様、私……ジーク様の手を……」
「気にするな。剣を握るのに支障は無い」
ジークが言って、果物ナイフの血を拭い、ノヴィアの荷袋に入れてやる。それから、
「自棄になるな。道は必ず、見つかる」
何もかも察してくれているような言葉に、思わずまた別の涙が込み上げ、ノヴィアは震えながら、それをこらえるのだった。

「なんでこんなの見せるのさぁ……」
アリスハートが涙を零しながら言った。
その目の前に、軽やかに舞う妖精の群の姿があり、想像していた通りの村があった。
常春の村、花が咲き乱れ、金に輝く者達の誰もが、自分を温かく迎え、決して傷つけようとはしない場所――
「全部インチキじゃないかぁ……」
アリスハートが手を触れようとすると、何もかもが透き通って消えてしまう。自分が心

から望むものがすぐ目の前にあるのに――
「やはり、妖精には魂が無いから、触れられるほど実体化させるには力が足りないのね」
そう告げたのは、一人の女性だった。ノヴィアとはぐれた後で、森の中で出くわし、
「貴女と、同じ姿をした妖精が、いるわ」
そう囁かれ、ここまで連れて来られたのだ。
「魂が無いって、何さぁあ、嘘つきぃい」
アリスハートが泣く様子を、女性が静かに見つめている。長い蜂蜜色の髪に、白亜の肌を持つ美貌の女だった。濡れたような目が、憂えるような眼差しを深くたたえている。
「貴女も私も、エインセルなのよ――」
「……エイン――セル？」
「〝自分自身〟という意味……。招かれた使命から解き放たれ、自由意志を持ったけれども……人間のように魂を持つことはなく、孤独に彷徨い続ける者達……」
「そ……そんなこと言うために、あたしをここまで連れてきたのぉっ？」
「違うわ……貴女もまた、逆巻く〈刻〉の渦を起こす、鼓動の一つだから……あの方が目指す、理想の地への階段……」
その途端、切り裂くような声が飛んだ。

「チビっ、そいつから離れろっ！」
「チビって呼ぶなぁっ――って、何で狼男がここに？　ノヴィアも？」
慌てて飛び去るアリスハートを追うようにして、ゆっくりと、女が振り向いた。
はっとジークが息をのんだ。滅多なことでは眉一つ動かさないジークの突然の動揺が、傍らのノヴィアにもはっきりと伝わってきた。
「シーラ……」
ジークの声に――艶やかな女の声が返した。
「来たのね……ジーク」
一瞬だった。その女性の姿が、閉ざされていたはずのノヴィアの目に映り込んでいた。綺麗だと思った。素直な感想だった。自分が大人になろうとして抱く理想の姿、雰囲気、面立ちを、全て兼ね備えたような女性だった。
その輝くような女性の姿が心に焼き付き、一瞬で視界が暗転した。また心をこじ開けられたのかと思ったが――違う。自分自身が強く相手の姿を見たがったのだ。それが分かった。ジークが呼んだ女性――まるで恋人を呼ぶような声で、その名を口にした女性の姿を。
「胸が痛いわ……ジーク……とても痛いの」

女の胸がひとりでに裂けた。鮮血が溢れ、その白い衣を見る間に真っ赤に染めてゆく。
「うわわわっ、血っ、血ぃっ？」
「どうして私を殺したの……ジーク」
その一言で、ノヴィアとアリスハートが、愕然となる。途端、凄まじい怒気が、ジークの身に凝縮した。ノヴィア達が、言葉一つ出せなくなるほどの迫力だった。
「その姿……俺の心を読んだか、それとも、あいつの——ドラクロワの、入れ知恵か！」
どん！　シャベルを地面に突き立てた。その柄が回転し、歯の部分から現れた第二の柄を握りしめ——鋭く輝く銀剣を抜き放ち、
「黒印騎士団として、貴様らを殲滅する！」
常に無い勢いで、ジークが、叫びを上げた。
「泉の水憂い乙女達が、お相手するわ」
女の流れる血から、真っ赤な女性形をした水の精霊達が、続々と姿を現し、
「あの方が授けてくださった剣——」
女の掌から刃が生え、するすると伸び、一振りの剣となって女の手に握られ、
「ラグネナイの涙——」
それが、剣の名らしかった。柄も刃も、水晶のように透き通った剣であった。

「ジーク……地属の〈招く者〉に、水属の精霊が倒せると思っているの？」

ジークは答えず、左手に電光を迸らせ、

「ジーク・ヴァールハイトが招くっ！」

刹那、女が、手にした剣で、地面を一文字に斬った。なんと、斬られた地面から滾々と水が湧き出で、瞬く間に地を覆ってゆく。

地面に叩きつけられるはずのジークの左手が、水面を叩いていた。稲妻の輝きが水に弾き返され、左腕が爆発したように吹き荒び、

「ジーク様っ!?」

「わわわっ、なに、なんなのっ？」

「逃げろっ……ノヴィアっ！　チビっ……！」

叫ぶジークの左腕から、鮮血が噴いた。

「な、何よぉっ！　早くいつもみたいに化け物の軍団を呼びなよぉおっ！」

ノヴィアが辺りの気配を察し、はっとする。

「水——。水のせいで、招けないんだわ」

「そそそ、そんなぁああ！」

女が走り、その刃が、空を切って振り下ろされるや、ジークが素早く迎え、打ち払った。

剣戟の音が響き渡り、続けて、左右から、真紅の水精達が、その両手を槍のように尖らせ、攻め寄せる。転瞬、ジークの銀剣が迅り、水精達の頭部を、肩を、斬り割っていた。

剣を握るジークの掌の傷から血が零れるが、ジークは歯をくいしばって、声一つ上げない。

「水が貴方の力を奪うわ……倒れなさい――そして、ラグネナイの涙に溺れなさい……」

女の言葉通り、ジークの動きが鈍くなってゆくのがアリスハートの目にも明らかだった。

「こ、このままじゃ、やられちゃうよぉ」

ノヴィアがびくっとなった。気づけば、くるぶしまで、水に浸っていた。言われた通り逃げなければ――足手まといにだけはなりたくない。そのためには逃げるしかない。ジークを置いて……涙が込み上げ、慌てて耐えた。

そのとき、ある考えが閃いた。地面から招く――。はっとなった。思わず叫んでいた。

「ジーク様っ！　こっちです！」

ノヴィアは必死で地面の気配を探るや、杖さえ突かず、ほとんど走り出していた。

「ええっ、ノヴィアが……走ってる!?」

アリスハートが愕然と追う。すぐさま水面から脱し、乾いた地面を蹴り続けた。真っ暗な視界の向うから、いつ何かに激突するか分からない恐怖が襲ってくる。だがここで走れ

なければ、従士の意味も、ジークの側にいる資格も無かった。精一杯の勇気で地面を蹴り続け、ついに目的の気配を探り当てた。
最初に、迷い込まされた場所――
ジークが、素早く走り込んで来た。そのまま岩の壁に背を打ち付けるようにして、止まった。その息が荒く、にわかに声も出ない。
「……って、行き止まりじゃんかぁあ！」
アリスハートの絶叫が、辺りにこだました。
しかも、窪地である。追いすがる女が、
「逃げても無駄よ！」
素早く地面を斬るや、水が溢れ出し、いったんは水面から逃れたものの、あっという間に、今度は膝まで、水が溜まってゆく。
女の背後から、水の精霊達が、血の紅さを振り零し、金切り声を上げて、殺到してきた。
ジークは深く呼吸し――息を整え、言った。
「お前には……助けられている。ノヴィア」
ノヴィアが、何かを言い返す間もなかった。
「ジーク・ヴァールハイトが招くっ！」

空気を引き裂く雷花の輝きが起こり、その左手を、激しく背後の岩壁に叩きつけていた。
「あ……地面だ」
アリスハートが、我に返ったように呟く。
「そんな、か……壁から……」
女が、目を見開き、愕然と凍りついた。
「絶望の魂よ！　冥刻星の連なりの下、哭魔ブラスフェミーとなりて我が敵に雪崩れ込め！」
刹那、壁一面に稲妻と風が吹き荒れ、丸い風船のようなものが、続々と現れ出た。
赤黒い、巨大な蚤のような姿で、水の上をぴょんぴょんと跳ねたかと思うと、
「地……地属の者が、私達に敵うものかっ」
女の声とともに、真紅の精霊達の手足が鋭い刃と化し、現れたばかりの丸っこい魔兵達を次々と刺し貫いては水面に沈ませていった。
「ぜぜぜ、全然駄目じゃん！」
哭魔どもの悲痛な声が、響き渡る、と――
「身も心も溶け合い、侵そうとする水属の精霊に対し、有効な戦術は、ただ一つ……」
ジークが、すっとその剣を掲げ、

「牡羊座の陣──すなわち、自爆戦術だ」

ひゅん。剣が空を切る。それを合図に、哭魔達が、嘆きの声とともにかっと光を放ち、なんと一挙に爆発した。片端から轟音が鳴り響き、粉々に吹き飛ばされる精霊達もろとも、盛大な水しぶきが上がった。

「貴様らを信じ、死者の魂の慰めを託すしかなかったノクターナの住人の慟哭だ……」

慌てて爆発を避ける女に向かって、ジークが剣尖を構えるや、水を跳ね上げ、疾走した。

「ひ、ひいっ……！」

女は、咄嗟に身構えたが──遅かった。

ジークが振り上げた剣は、そのまま女の身を、その剣ごと真っ二つに斬り下ろしていた。

女は、右肩から腰まで斜めに両断され、

「貴女には……涙が無いの……ジーク」

ジークは無言で刃を返し、更に女を真横に両断した。女の姿は見る間に崩れ──水の塊となって、飛沫を上げて水面に消え落ちた。

女の剣の破片が、ジークの足下に沈み、

「一度でも血を流すことを選べば──二度と、涙は流せない……」

その透明な剣尖を、更に足で踏み割った。水が瞬く間に引き、乾いた地面が現れる。

「そうだろう……ドラクロワ」
呟きが、水とともに地面に吸い込まれていった。
それから――つと、顔だけ振り向かせて、
「今度から、話にだけでも、同席させるか」
岩壁のそばのノヴィアを見やり、なんとなく撫然として、口にしていた。

「強くなりたいなあ……」
ジークの気配を遠くに感じながら、呟いた。
「早く大人になりたい」
脳裏に、あの女性の姿が浮かんでいた。ジークがシーラと呼んだ――大人の女性の姿が。
「焦ること無いよぉ。あたしの故郷探しも、まだしばらく、続くみたいだし……さ」
「そう、ね……。ねぇ――アリスハート。貴女、死にたいと思ったことある？」
「うぇえ？　な、なに、いきなり？」
「訊いてみただけよ」
「ノ、ノヴィアは……あるの？」
「さあ……」

「死んだら大人になれないじゃんかぁ」

ノヴィアは、くすっと笑った。

「それもそうね」

そして、声をひそめ、こう訊いていた。

「ね……ジーク様って――どんな顔なの？」

アリスハートの、立て板に水の如き罵詈雑言が、しばらく続いた。

第四話　グノーの祈り

朝の透明な日差しのもと、砂色の馬車道を北へと踏みゆく一行が、いた。
一行と言っても、傍目には二人しかいない。
一人は、しなやかな長身の男であった。
鮮やかな赤髪が、美貌と言って良い顔立ちを飾っている。ボロボロの白外套に黒革の鎧、頑丈一点張りの赤籠手という戦闘装束だが、その肩に担ぐのは、実に戦いとは無縁そうな、ひと振りの、巨大な銀色のシャベルである。
やや遅れて、男の傍らを、男の背丈の半分にも満たなさそうな少女が、共に歩んでいる。
さっぱりと束ねた栗色の髪、淡く透き通る紫の双眸、旅暮らしにも白さを失わぬ滑らかな頬が、日差しを受け、爽やかな輝きを帯びている。その青い法衣の胸元には、聖性を力とする〈銀の乙女〉の紋章が飾られてあった。
盲目であることを示す白木の杖で道を探り、男の足音を頼りに道を進んでいる――と、
「楽しみよねぇ、ノヴィアぁ」
明るい喚き声が、二人の間で上がっていた。
声の主は、男でも少女でもない。
少女の肩先で、二対の金色の羽を震わす、掌ほどの大きさの、妖精であった。金髪金瞳、

女性形をした身に白いドレスをまとい、
「故郷かぁ。懐かしい故郷、良いわねぇ」
元気良く小さな手足を振り回して言う妖精に、少女はちょっと困ったように微笑し、
「そうね、アリスハート。楽しみ、ですね……ジーク様。どんなところなんですか？」
男の気配をうかがうように訊くが、
「大して何も無いところだ」
男の口調は淡々として、内心が知れない。
「なに照れてんのよぉ、狼男ぉ」
ふわっと少女の肩から舞い飛び、妖精が言う。狼男とは、男の鋭い目がまるで狼のよう、という理由で、妖精がつけた渾名だった。
「本当は嬉しいんでしょぉ。いくら仕事でも、自分の故郷に帰れるんだもん、良いわぁ」
「チビが楽しめるような場所じゃ無い」
「チ……チビって呼ぶなぁっ。あたしにはアリスハートっていう可憐な名前があるのっ」
妖精が男の赤い髪を引っ張って抗議するが、
「チビの方が呼びやすい」
などという男に、憤然として、

「こ、この狼男ぉっ、こうしてやるっ」
男の髪の毛を、ほうぼうで結んでしまった。
男が足を止めた。それほど固く結んでもいないのに、不器用そうに髪をいじる気配に、
「……解きましょうか、ジーク様」
「ん……すまん」
その長身を折るようにして頭を差し出した。
目の見えぬ少女が手探りであっさり解くや、何も言わず、再び歩き出している。
「ちぇ、相変わらず無口で無愛想な男ぉー」
妖精がつまらなさそうに肩をすくめる。
「でも、優しいのよ。とても……ね」
声をひそめ、にこりと少女が微笑んだ。
はいはい、と妖精が呆れて、呟き返す。
少女は微笑したまま、男の足音に耳を澄ませた。男が、心なし大きな足音を立てて歩むのは、目の見えぬ少女への、気遣いからだ。
男の足音の調子から、道先がどうなっているか、デコボコで歩きにくいか、曲がっているか、どこが歩きやすいかまで伝わってくる。

男が――ジークが、無愛想というのは、あくまで口数のことだけだ。ジークの身振りは実に気配りに溢れている。時にはノヴィア自身が気づかぬほどの自然さで、目の見えぬノヴィアの動きやすさを助けてくれるのだった。
そのジークの足音を聞きながら、いつしか、ノヴィアの微笑が、消えていた。
ジークの歩調が、やけに重々しいからだ。
足音から伝わるのは道行きばかりではない。
そこには、ジークが滅多に表に出さない様々な感情までもが、零れるように表れている。
ここ数日、ジークの、何かを押し切るように踏み出す歩調から、かえって内心の葛藤のようなものがしきりと感じられるのだった。
ラグネナイの泉から戻り、街の教父に次の情報を得てから、既に十日余が経っていた。
その話の場に同席を許され、今ではノヴィア達も、ジークの本当の使命を理解している。
――ヴィクトール・ドラクロワ。
二年前に聖法庁から秘儀を盗み出して以来、各地で反勢力を煽り、暗躍する男の名である。その男を追討することが、黒印騎士団にして、死者の魂を魔兵として招き出す〈招く者〉たるジークの、使命であった。
ルールドの都市で、ノヴィア達を救った働きも、いわばその使命の一部だったのである。

「よくやってくれた。本当によくやってくれた。これで、俺の部下も報われる」
ジークの昔の戦友で、足の負傷がもとで戦場を離れたという教父は、しきりに礼を述べ、
「ドラクロワ本人は、見つからなかった」
と告げるジークに、ひそやかにうなずき返し、新たに届いたという書類を、見せた。
そのときのジークの反応は、それこそ、
「この場所は……」
息をのむような、鋭い呟きを漏らし、
「やつの姿を、実際に見た者がいるらしい」
教父の言葉に、沈黙するジークの気配が常にない激しさで荒立つのが傍らのノヴィアにも察せられたほどであった。
「なぜ、そこかは、分からん。そもそも、なぜラグネナイの精霊なぞにドラクロワが目を付けたかも分からんのだ。追っ手を迎え撃つだけにしては、仕掛けが凝りすぎてやがる」
「……試しているのかもしれない」
「試す？　何をだ？」
「あいつが盗み出した、秘儀を」
「なに？　まさか、ごまんといる追っ手をかわすだけじゃなく、秘儀を試すだと……？」

「むしろ追っ手など、眼中に無いんだろう」
「馬鹿言え。何百人もの手練れに追われているんだぞ。尋常の神経じゃねぇ……」
「そういう男だ」
「その男を理解するお前も尋常じゃねぇよ」
呆れつつ、教父は、書類の地図を指さし、
「いずれにせよ、地の利はお前にある。なにせ、この地は、お前の故郷なんだから、な」
ノヴィア達にとっては、実に驚くべきことを、平然と言ったものだ。
咄嗟にノヴィアは口を挟みかけたが、初めてこうした場に同席させてもらえた身としては、黙って話を聞くことしか出来ない。
むろん、気になる事は、他に幾つもある。特にジークが罪人のはずのドラクロワをあいつと親しく呼ぶことは、実に気にかかった。
だが、どんなに己の気配が炎のような激しさを帯びたとしても、ジークは、表面的には常に氷のように冷静で、どんな葛藤があっても、綺麗にのみ込んで一言も出さない。
だから、ドラクロワという男との関係については、何も聞かされていないし、何より、あのラグネナイの精霊が見せた女性のことも、おいそれと訊けないでいたのだ。
ジークが、シーラと呼んだ女性――まるで、恋人の名を呼ぶような声で。

閉ざされたはずのノヴィアの視覚の隙間を、縫うようにして飛び込んで来た、たおやかな美貌の女性だった。その女性のことが、やけにノヴィアの胸を騒がせるのだが――
もし、自分にジークを助ける十分な力があれば、ジークの過去や葛藤について色々と訊けるかもしれないが、そうでない以上、どれだけ胸が騒いでも、黙っているしかない。
だがそう思うのも、実はおかしな話だった。
なにせ既に、万里眼と呼ばれる偉大な透視の力が、その身に宿っているのだから。ただ、それを、心が拒んでしまっているだけで――
心を読むラグネナイの精霊達に暴かれたことが、それだった。母への憎しみゆえに、母から受け継いだ力を、心が拒んでいる。そしてそれゆえに、盲目となってしまった……。
まさか、自分が母を憎んでいるなどとは、思いもよらなかったノヴィアに、ジークは、
「お前の心の中の真実を、葬れ」
全てを察しているように、言ったものだ。
母を憎む心を、時間をかけて、受け入れる。
それが、力を使いこなす、最短の方法だと。
「自棄になるな」と言ってくれた時と、まるで同じ口調で、ジークは告げてくれていた。
そもそも、目が開かれないことへの苛立ちから、自分が自棄になっていたなどというの

も、ノヴィアにとっては、意外な事だった。
だがそんな自分を悟ったからこそ、先の戦いで、目が見えない状態で走る事が出来たのだと、ノヴィアは思う。それは、従士として、自分に何が出来るかを問う行為だった。従士として何をさせてもらえるか、ではなく——
そんな風に、ノヴィアが、自分の心と向かい合う段階になって初めて、ジークは任務の話の場に同席することを、許してくれていた。
報いたい。自分を導いてくれているジークの役に立ちたい。なのに、では何が出来るかと言われれば、何もないように思われる。自分が力を——母を、受け入れない限りは。
そうしたことが、胸の底でちくちくとした疼きとなって、いつの間にか、ことごとに、ノヴィア自身を責めるようになっていた……。

途中、昼食を摂ってから、再び、灰色の道を歩み、しばらくした頃であった。
気づけば、ひんやりと空気の沈む、谷間に入っている。木々はまばらにしか生えず、風は冷たく、荒い。その荒涼とした景色に、
「……こんな所にも、人って住めるんだぁ」
アリスハートがちょっと気圧されて言った。

「他に、住む場所が無かった場合だ」
ジークが、ぽつりと返す。
グノー峡谷(きょうこく)というのが、この谷の名である。
鉄鉱(てっこう)の産地だが、何しろ辺境(へんきょう)の地で他に産物も無く、住まうのは戦乱で追われた流民(るみん)くらいだという。そうしたことを、ジークから軽々と聞き出したアリスハートは、
「やっぱここも、あたしの故郷(ふるさと)じゃないみたい……全然、懐(なつ)かしい感じしないもん」
がっかりして、言ったものだ。
「ねえ、ノヴィアぁ。あたしが、魂(たましい)の無いエインセルだって、どういう意味かなあ……」
これはラグネナイの精霊(ジーン)に言われた事だった。魂無き者(エインセル)——元は、自分自身(エインセル)という意味の言葉である。招かれた使命を忘れ、自由意思を持ったが魂を持つには至(いた)らず、常に何かが欠けている——そういう存在なのだという。
「あたし、魂が無いから、自分の故郷が、分かんないのかなぁ……」
物寂(ものさび)しい景色に影響(えいきょう)されたか、アリスハートが、珍(めずら)しく沈んだような声を零(こぼ)すのへ、
「そんなこと、ないわよ」
ノヴィアは、きっぱりと返して言った。
「私には見えたわ、貴女(あなた)の魂。それが私を呼んで、貴女と出会わせてくれたんですもの」

アリスハートは、うん、と呟き、ノヴィアの細い首筋に、そっとしがみついた。
やがて、谷の底に出た。人の住んでいる証拠に、鉄鉱所やら、小屋やらが散在し、その先に集落が見える。立ち止まらず進みゆくと、
「なんだろう、あれ」
幾つかの四角い広場のようなものがあった。
「鍛錬所だ」
「鍛錬……。鉄の……ですか、ジーク様？」
「いや。鉄とは別の売り物だ」
「別の売り物って、他に何売ってんのさ」
「――人だ」
アリスハートが、へ？　と返す。
そこへ、にわかに、大勢の人間の気配が起こった。二十人ほどの若い男達がぞろぞろと鉄鉱所から姿を現し、集落の方に向かおうとして、ジーク達と出くわしたのである。
中には抜き身の剣を持っている者もおり、何かあれば、すぐにでも振るってきそうな、炭鉱労働者らしい荒々しい気配をまとっていた。
「何だい、あんたら」

ジークの担いだ巨大なシャベルをじろじろ眺めながら、男達の一人が、訊いた。
「ジェノ神父はいるか」
ジークが訊き返すと、男がはっとして、
「赤い髪……あんた、まさか……」
男達が、にわかにざわめいた。
そこへ、ふいに、渋みのある声が飛んだ。
「よく来たね、ジーク──」
男達の声ではなかった。
黒ずくめの神父が、集落の方から歩み寄って来るのである。中肉中背。壮年を過ぎた精悍な顔を、短く刈り上げた白髪が飾り、右のこめかみを、大きな刀傷の痕が走っている。
「実に久しいね……ジーク」
神父が、柔らかく微笑んで言った。
「お久しぶりです……ジェノ神父様」
かくん、とアリスハートの顎が落ちた。
「狼男が、敬語を使ってる……」
神父はうなずき、そっとジークの肩に触れ、

「よく来てくれた。聖法庁からお前が派遣されると聞いて、待ち侘びていたよ」
それから、男達を振り返って、
「お前達と同じ、この里で育ったジークだ。剣の腕前は一流で、聖法庁から〈戦場の真理〉という有り難い称号まで頂いているのだぞ」
まるで我が事のように自慢する様子に、男達の雰囲気が、急に和らいだものになった。
「お帰り、ジーク」
神父に、ジークは静かに頭を垂れた。

集落のすぐ入り口にある大きな家だった。
「ドラクロワの姿を見たとのことですが」
ジークは、ノヴィア達が聞いたこともないような丁寧な口調で、そう質した。
神父が、ちらりとノヴィア達を見やった。
「俺の従士です。安心してお話し下さい」
ちょっとかしこまるノヴィアとアリスハートに、神父は微笑んでうなずいてみせ、
「……近頃、妙に身なりの良い者達が、東の洞窟を出入りしていると、若い者が言い出してな。あそこは大昔に鉱石が涸れたまま、放ったらかしになっている所だ。不審に思い、

私と若い者とで、隠れて見張っていたのだが……驚いたよ。お前の良く知る、あの男が、何やら妙な儀式を行っているじゃないか」
「今も、そこにいますか？」
「いや。三日おきくらいに現れては、いずこともなく去っていく。何度か後を尾けさせたが、不思議な事にみな、まかれてしまった」
「今、洞窟に、見張りはいますか？」
「常に見張らせている。あの男が現れれば、すぐに連絡が来るよ。多分、一日か二日は、旅の疲れを取る間があるだろう」
「恐れ入ります」
折り目正しく頭を下げるジークを見て、
(狼男が、子犬みたいになってるぅ)
アリスハートが、思わず笑いを噛み殺した。
「なあに。お前は、里を変えた恩人なのだ。何でも言いつけてくれてかまわんのだよ」
アリスハートが、俄然、好奇の目になった。
「里を変えたって、なになに？」
「おや、ジークは何も話していないのかね」

「ぜーんぜん。この男の無口さったら、石と話してるみたいなもんだもん」
神父が、声を上げて笑った。
「相変わらずだな、ジークよ。自分の手柄なのだから、少しは自慢してもよかろうに」
はあ……と気の無さそうに呟くジークの代わりに、神父がにこやかに、言った。
「実は、この里は昔から、鉄以外にも、別のものを、売っておりましてな」
「そーいや、さっきも聞いたような……」
「剣や槍などの他に、それを身につける者もまた、この里の売り物だったのですよ」
「身につける……ですか」
「そうです。要するに、十四歳から十七歳の子供を、剣奴として、売るのですよ」
それを聞いたノヴィアは愕然となって、
（剣の……奴隷――）
慌てて、その言葉をのみ込んでいた。
「剣奴ってなーに？」
「戦争で親を失った子供を育てる養育院が、ここから離れた里にありましてな。そこの子供達から、体の丈夫な者を選んで、剣を教え、あちこちの軍隊や傭兵団に、売るのです」
そこまで言われて、さすがのアリスハートが、ぽかんとなって言葉を失った。

「何せ、故郷や親を失った者達にとって、人間の命以外、売る物がないのですよ」
人の好い神父が平然と恐ろしい事を言う姿に、ノヴィアもアリスハートも、言葉が無い。
「ですが、ジークが〈戦場の真理〉の称号を得たとき……聖法庁に頼んだのは、剣奴売買を無くすことでした。そのお陰で、この里には毎年、孤児養育のためのお金が、聖法庁から払われています。また、聖法庁の資金で、鉄鉱所の規模を拡げることが出来ました」
「彼ら、みな……剣を持っていましたね」
ぽつりと、ジークが、言った。
「彼らが鍛えた剣だ。評判が良くて、よく売れる。もちろん、みな剣の腕も立つぞ。どうだ、お前からも少し剣を教えてやらんかね」
「神父様が俺に教えてくれたようには、上手く教えられないでしょう」
殊勝な言葉とともにかぶりを振るジークは、
「それに、俺はこの里で一番……弱かった」
そう付け加え、ジークの剣の腕を知るノヴィアとアリスハートを、ひどく驚かせた。
「確かに、お前は剣の覚えは遅かったが、だからこそ……私には一番可愛い子供だった」
神父の言葉に、ジークは黙って目を伏せた。
「よく生き残ってくれたね……ジーク。称号を得たことよりも、それが……嬉しいよ」

「はい……」
「とにかく、今はゆっくり休みなさい。くれぐれも遠慮無く、ね。この家もまた、お前達の命を売って、建てたものなのだから……」
　神父と一緒に四人で早い夕食を済ませてのち、二階の大部屋を貸し与えられた。
ランプの明かりの中で、ジークは外套も脱がず、黙々とシャベルを磨いている。そこへ、ノヴィアが、そっと杯をテーブルに置き、
「ジーク様、薬湯を温めました」
「ん……すまん」
　杯を取り、中身をすするジークを見ながら、
「狼男も、案外、色々とあるのねぇ」
　アリスハートが、しみじみと呟いた。
「ああ……」
　いつもなら返事が来るところではない。アリスハートの目が、きらりと好奇心に輝いた。
「ねえねえ、狼男って、お父さんお母さんが居ないから、ここで育ったわけ？」
「親は……どこかの街が戦場になって、死んだらしい。街の誰かが、赤ん坊だった俺を拾

って——この里に辿り着いたんだ」
「何で、墓掘りになったの？」
ジークは、銀のシャベルに手を触れながら、
「戦死者の埋葬は、少年兵の仕事だった。みな嫌がったが……俺は嫌いじゃなかった」
「どういうこと？」
「死者は、戦場で一番弱い存在だ。もう、戦うことも、逃げることも出来ない、そういう者に何かしてやれることがあるというだけで、心が救われる……。それに——」
「それに？」
「死者が、色々と教えてくれた。相手の武器や、気を付けるべき地形や、戦場の教訓を」
「それって、死人が喋るってこと？」
「死人は、喋らないものだぞ」
真面目な顔で、怪訝そうに言うジークに、
「いや、そりゃそうだけど……」
アリスハートが呆れたように返す。
「魂のかけらが、戦場に縛られたまま、俺に訴えて来たんだ。多くの魂が——自分達の代わりに戦って、怨みを晴らしてくれ……と」

「そんなん、放っときゃ良いのに」
「ジーク様は優しいのよ」
ノヴィアがきっぱりと言う。
「頼まれると、嫌とは言えないの」
「うーん……難儀な性分よねぇ」
「……その代わり、死者がくれる情報のお陰で、俺はどの戦場でも生き残れた」
「はあ……人生、何が役に立つか、分かんないものねぇ。死人の声を聞くことが出来るなんて、考えてみれば、凄い特技よねぇ」
「戦場では割とみな、出来るようになる」
「そ、そうなの……？」
「だがなぜか、たいていの人間は、自分の気が狂ったとしか思わないらしくてな……」
「ああ、まぁ……そうだろうねぇ。でもさ、じゃあ、いつから〈招く者〉になったの？」
沈黙が降りた。さすがにここで口を閉ざすかに思われたが、やがて胸につかえた硬い石でも吐き出すように、そっと語り出していた。
戦場で、死者の声を聞くという剣奴が噂になった。その者には、死者が智恵と力を与え、

また、より多くの死をまき散らす、死神が取り憑いているのだ、とも言われた。
あるとき、その噂を聞いた貴族の指揮官達が、好奇心で戦場のジークを呼びつけた。
戦場には似合わぬ整った顔立ち、少年兵らしからぬ鋭い目、長い赤髪を束ね、痩せて小柄な身に、いかにもそぐわぬ長大な剣を背負う、というのがその時期のジークの姿だった。
そのジークの顔立ちや身なりにも好奇の目を向けながら、色々と質問をしてくる指揮官達に、ジークは、努めて真面目に答えた。が、全て冗談ごととして受け取られ、笑われた。
結局、戦死者の魂がどんなものか、本当に知ろうとする者は、貴族にはいなかったのだ。
ただ一人を除いて。
その男は、ジークを呼びつけたりしなかった。自分から、ジークを訪ねて兵舎を歩いた。
長い銀髪、白皙たる相貌――氷のように透き通った青い目に、穏やかで理知的な光をたたえた青年だった。すらりとしたその長身に、貴族には珍しいほどの剣の腕と、聖法庁の秘儀の力を秘めた、その青年は、自ら、剣奴用のテントに入って来るなり、
「私には、お前の才能が必要だ、ジーク」
呆れるほど端的に、言ったものだった。
会ったことも無い男にいきなり名を呼びつけられ、むかっ腹が立った――が、次の瞬間、男がいきなり微笑んだ。そのなんとも屈託の無い笑みに、思わず惚れ惚れとしてしまった。

慌てて我に返って、いったい自分に何の才能があると言うのか、と食ってかかると、
「――〈招く者〉」
輝くような微笑みのまま、告げた。
当時のジークにとっては、意味不明の言葉である。またぞろ貴族が茶化しに来たのかと思い、だんまりを決め込んでいると、
「お前は、ずいぶんと人を斬るそうだな、ジーク。その気持ち……私にも分かるな」
なんと、そんなことを言った。
ろくに戦場に出たこともない貴族が何を言うのかと、内心思わずかっとなったが、
「私も、大勢、斃してきた」
その一言で、また奇妙に怒りが薄まった。
「お前がより多くの敵を斬ろうとするのは、死者の声ゆえに、というよりも、そうすることで、お前と同じ境遇の剣奴が、戦場に送り込まれなくなると、信じているからだろう」
図星だった。自分が戦えば、そのつど里に金が払われる。金があれば、グノーの里に残る子供達が次々に戦場に送り込まれないで済む。剣奴を、一人でも少なくする――それが、当時のジークの、命を賭した行いだった。
「だが敵にも、お前と同じ剣奴がいる。それを倒さねばならぬ矛盾は、苦しく辛かろう」

いちいち図星であることを確かめるように、青年は、ジークを見つめ、そして、言った。
「剣にのみ頼る限り、味方しか救えない。それが真理だ。いいか、ジーク。争いを無くすためには、敵をも救わねばならないのだ」
その言葉に、愕然となった。
敵をも救う――そんな夢のようなことを口にするこの男は、いったい、何者なのか。
「私の名は、ヴィクトール・ドラクロワ」
青年が、言った。
「この世から争いを無くすために力が要る。私にはお前が必要なのだ。たった一人で万軍に匹敵する、〈招く者〉の才能を持つ者が」
毅然と言い放つ男の姿に、ジークは、正直、全身が震えるような感動を覚えていた。
「じゃあ、そのドラクロワって男に言われて、ジークは〈招く者〉になったんだ」
面白い話の一つくらいにしか受け取っていないアリスハートが、のんびりと言った。
一方、ノヴィアは呆然となって、
「ドラクロワが、ジーク様を見いだした……」
同じその男が、今、聖法庁の秘儀を盗んで逃げ、ジークに追われているとは――

「ジェノ神父と……あいつの、二人の存在がなければ、今日の俺は、なかった……」
淡々と言いながら、ふと、ジークは、ランプに手を伸ばした。アリスハートが、あっと叫ぶと同時に、ランプの明かりが消えている。
「どうしたの、アリスハート？」
ふと、ジークがテーブルを回り、ノヴィアの手を取った。突然のことにびっくりしていると、ジークが、指で、ノヴィアの掌に、
『静かに。ここを出る。荷物はそのまま』
そう書きつつも、
「そろそろ寝るぞ。休みをとるんだ」
口では、大きな声で、そう告げている。
「あら、そうなの……？」
合点のいかないアリスハートをよそに、夜目の利くジークと、そもそも暗闇に生きているノヴィアが動き出す。そしていきなり、
「え？　なに？　なんなの？　うわ……な」
ジークにつかまれ、声も出せなくなった。
間もなく、静かに開かれた窓から、シャベルとノヴィアを抱えたジークが、信じがたい

脚力で、一気に飛び降りたのだった。
「何もいきなり飛び出さなくってもさー」
月の光がかすかに届く夜の谷間を、アリスハートのひそひそぼやく声がこだまする。
「隣の部屋で、盗み聞きされていたからな」
「……全く、気づきませんでした」
完全にジークが話す過去に気を取られていたのである。気恥ずかしくなる反面、何となく面白くなかった、密かな過去を打ち明けられたのではなく、計算づくで話されていたことになるからだ。それでは、自分達まで、騙されていたことにならないか。
「少しは、私達に心を開いてくれても……」
ごつごつした岩の歩きにくさ、杖の突きづらさと相まって、不機嫌な呟きが漏れたが、
「話し込んだせいで出発が遅れた。お前達といると、つい安心して気が緩んでしまう」
呟くジークに、ノヴィアは思わず微笑し、
「ジーク様って、けっこう可愛い」
はぁ？　とアリスハートが素っ頓狂な声を上げた。そのとき――
鉄鉱所の裏側へと回り込んだ一行の前に、月光に黒々と穴を穿つ、洞窟が開いていた。

無造作な足取りで入ってゆくジークの後を、ノヴィアとアリスハートが追った。
「うわー、でっかい洞窟ぅ。鉱山なの？」
「グノーの、始まりの洞窟だ……」
「始まりって、なんの？」
「この地の伝説だ。かつて流民がここに辿り着いたとき、洞窟に住む、グノーという名の竜に、子供を生贄に捧げることで、この地の鉄を採って生活する許しを得た……」
「子供を……ですか」
「今も昔も変わらない、グノーの業だ」
何かが、洞窟の奥から響いてきている。
洞窟を進むにつれて強く耳を打ち、やがてひとまとまりの言葉となって届いてきた。

我らグノーの血の祈りに伏して母なく父なく子を食い剣にて生き残りたる者なり
願わくば民の糧となりて血を捧げん事を

まるで呪文にも似た言葉が延々と繰り返されている。やがて広大な空間に出ると、灰色の衣を着た男達が、高々とそびえる壁に向かって、声を上げている光景に出くわした。

あっとアリスハートが低く声を上げる。
「な、何あれ？　壁に、変なのが……」
巨大な蛇にも似た、獣の化石――そうとしか言えぬ物が、壁一面にのたくるようにして、赤黒く光っているのだ。その濡れ濡れと光るものから、じわりと、何かがしみ出している。
「……すごい。……血の臭い」
ノヴィアが口元を塞ぐ。吐き気がしていた。
「お前達はここにいろ」
有無を言わせぬジークの鋭い声に、ノヴィアがはっとなった。いつの間にか、ジークの総身に、凄まじい戦いの気配がみなぎっている。その気配のあまりの激しさに、アリスハートでさえ、にわかに言葉を失うのだった。
ジークは、無造作に歩を進め、
「〈刻の竜頭〉――まさか、本当に……」
壁を見上げ、呟いた。
その声に、男達が、はっと振り返る。
みな、谷で最初に出会った、男達であった。
どん！　ジークがシャベルを突き立てた。

男達が無言で剣を手に、ジークを取り囲む。
そのとき、突然、ジークが振り返って叫び、
「ノヴィアっ、横に跳べっ！」
同時に、ノヴィアもまた背後で殺気が走るのを察し、反射的に倒れるように横に跳んでいた。目が見えない状態で跳ぶ恐ろしさを遥かに上回る恐怖が、鋭く空を切る刃の音とともに、それまでノヴィアのいた空間を迅り、
「ノヴィア!?」
アリスハートの叫びとともに、
「かわすか。さすがに、ジークの従士だな」
ノヴィアは地に倒れ込みながらその声を聞いた。実に優しげな、ジェノ神父の声だった。
神父は、アリスハートがぎょっとするくらい長く大きな剣を手に、ジークに歩み寄った。
「実に素早い行動だね……ジーク」
「ここに、ドラクロワがいるという情報を流したのは、俺を呼び寄せるためですか」
「その通りだよ。よく読めたね、ジーク」
「あいつが……そう容易く、姿を見られるとは思えませんから。あいつが、俺をここにおびき出せと……指示したのですか」

「いかにも。数十人程度の魂では、この化け物は育ちきらない。無数の死者の魂を率いる〈招く者〉を生贄に捧げることで、飛躍的に成長する——とね」
「貴方は分かっていない。この化け物は……この世に存在しては、いけないものです」
「知らぬよ。我々はただ、ドラクロワ卿のためにこれを育てる代わりに、再び、生きていく手段を得る。それだけだよ、ジーク」
「生きていく手段……？」
「聖法庁を倒したあかつきには、この里の剣奴売買を、再開させて下さるということだ」
そう神父が告げるや、ジークは瞠目し、
「嘘だっ！　ドラクロワが……嘘だっ！」
激しく、血を吐くような叫びを上げていた。
「嘘ではないよ、ジーク」
優しげに、神父が言った。
そこかしこから、剣を握る男達が現れた。総勢五十名強が、ずらりとジークを取り囲む。
だがジークは、戦いの気力さえ失ったかのようにうつむき、ぽつりと、言った。
「神父様、まさか里の者をこの秘儀に……」
「病人、老人が主だがな。みな喜んで命をくれたよ。弱い者が、より強い者の糧となって

死ぬ。それが地上に生きる者たちの試練だ」
「剣奴として生きたいかっ！」
にわかに顔を上げ、ジークが叫んだ。神父にではなく、周りの男達に向かってだった。
「殺し合い、裏切り合い、仲間同士でさえ命を奪い合わねば生きていけない剣奴にっ！」
その途端、男達の間で、失笑がわいた。
「こいつ、神父様の言う通りの臆病者だ！」
「次に聖法庁から称号を得るのは俺だ！」
いや、俺だ、俺こそがと一斉に剣を掲げて喚き立て、ジークの叫びをかき消していた。
「この通りだ。さ、ジーク。魔兵とやらを呼びなさい。実は私達も、寝込みを襲うのは、どうも気が引けていたところなんだ」
「……覚えていますか、ジェノ神父」
「なにをだね？」
「俺と一緒に売られた、十六人の剣奴達を」
いっとき、神父が沈黙した。
「全員、名前も顔も、覚えているよ」
「戦場に運ばれる馬車の中で、俺達は、互いに誓い合いました。絶対に、仲間を裏切らな

い、お互いに助け合うと。何もない俺達にとって、仲間だけが全てだった……」

「――――」

「戦場では、剣奴のそんな思いなど無に等しかった。ジェノ神父……俺はそのとき誓い合った仲間達を、戦場で、三人、斬りました」

ジークの左手が、シャベルの柄を握りしめ、

「招く必要はない。お前達の愚かな言葉を聞いた時から、現れたがっている魂達がいる」

血が一筋、銀の柄を、滑り落ちていった。

「死んだ仲間の剣を溶かして作った物です」

ぽつりと言った。みな何のことだと怪訝な顔になる。ノヴィアがはっとなった。シャベルが、ひとりでにがたがたと震え出していた。

かっとジークが目を見開き、

「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」

刹那――激しい雷火がシャベルに走った。

「水刻星の連なりの下、凄魔ギルトとなりて、我が敵に見せしめよ！」

シャベルが、無数の銀の輝きとなって飛び散り、にわかに禍々しい姿が宙に現れてゆく。

シャベルが消え、中から現れた銀剣を手に取るジークの周囲に、銀の鱗を持つ魔兵ども

が、美しい円陣を見せ、地に降り立った。
総勢十六体。人の形をしたトカゲの如き姿、両手に分厚い剣を握り、顔には目も鼻もない。突き出した口に、かっと鋸のような牙を剝き、
「見ろ！　殺し合いの日々に、ただ殺戮を願うだけになった、修羅の姿を！」
ひゅん。ジークの銀剣が、空を切り――
「蠍座の陣！」
言下、両手に剣を握る魔兵達が、蠍が尾を広げるように円陣を展開し、一斉に男達に殺到した。男達もただの素人ではない。腕も度胸も立った。その男達を、魔兵が旋風の速さでなぎ倒してゆく。人間離れした速さと力だが、決して、力任せのものではない。
相手の剣を読み、絡めて封じ、斬り倒す――その絶妙の剣捌きに、神父が、瞠目した。
「グノーの剣技――」
魔兵が、殺戮の風を巻き上げながら、牙を剝いて、一斉に不気味な声で唱え始めた。
我らグノーの血の祈りに伏して母なく父なく子を食い剣にて生き残りたる者なり
願わくば民の糧となりて血を捧げん事を

神父が、大声で笑った。
「可愛い子らよ！　地獄に堕ちても剣を振るうか！　私が教えた技を使うか！」
その声に引き寄せられるようにして、一体の凄魔が、神父に向かって、二つの剣を縦横に振るってきた。ふわっと、神父が、その長大なる剣で、相手の剣を撫でるように振るうと、刃の嚙み合う激しい音とともに、なんと凄魔の剣が、二つとも綺麗に弾かれていた。
「嬉しいなあ……その剣の癖、グンか？」
次の瞬間、がら空きとなった凄魔の首を、何の躊躇いもなく、一瞬で刎ね飛ばした。
「次は誰だ？　シフ、お前か⁉」
斬りかかる凄魔に対し、神父が地を蹴って舞い跳んだ。凄魔の双剣は宙をなぎ、神父の長大な剣が、凄魔の頭部に潜り込み、更には上半身をほとんど真っ二つに両断している。
「つつ強いよ、なにっ、あれでも神父っ？」
アリスハートの悲鳴とともに、円陣を崩した神父が、瞬く間にジークに切迫する。
かと見るや、ジークもまた飛び込むようにして神父に向かって剣を振り下ろす。
一瞬、刃の嚙み合った一点に目のくらむような火花が飛び散り、ついで両者、位置を入れ替える形で剣を叩き込むや、激しく刃が絡み合った。
「裏切り合い、殺し合う。結構なことだ。それが、人間に与えられた試練なのだから」

にわかに、ジークの体勢がぐらついた。
アリスハートが呆然となってその様子をノヴィアに伝えた。二人とも、ジークが一対一の剣の勝負で負けるなど信じられなかった。
「弱いなぁ、ジークよ。あのとき売られた子供達の中で、一番弱かったお前が、なぜ生き残れたのか、不思議で仕方がなかったよ」
「俺は弱さのせいで、多くの事に気づけた」
足が乱れたかに見えた一瞬、ジークが身を翻し、転身する勢いで、素早く剣を突き込んだ。その剣尖を受けしのいだ神父が二、三歩後退するほどの、迅速で壮絶な刺突だった。
「貴女は強さのせいで、命の犠牲に慣れすぎた。貴方の剣は、今の俺には、軽すぎる」
神父が、かっと目を見開いた。
「なめるなっ!!」
破鐘の如き怒声とともに、その長大な剣を振るって跳んだ。その気息を正確に計ったように、同時にジークも地を蹴っている。
二人の剣の光芒が、暗い洞窟に煌めき――
再び地に降り立った二人のうち、一人だけが、がくりと膝をつき、倒れ伏していた。

「も、もうやめさせてよぉ……」
アリスハートが、がたがた震えながら言う。
殺戮の嵐は続いていた。意地になって闇雲に剣を振るう男達を、凄魔どもが、血の祈りを唱えながら、無造作に屠ってゆくのである。
気づけば、神父に斬られたはずの凄魔どもさえ、首を刎ねられた姿、頭を割られた姿で、再び立ち上がり、男達を斬り殺している。
「ねぇえ、狼男ぉ……ジークったらぁ……」
アリスハートの声が、尻すぼみに消えた。
ジークの剣を持つ手が、震えるほど強く握りしめられているのに、気づいたからだった。
凄魔は、逃げる者は追わない。なのに無益な戦いを続ける男達を、ジークは、じっと悲しい光を溜めた目で、見つめているのだった。
ノヴィアも、ジークの切々とした気配に、ただ黙って、傍らに寄り添うしかなかった。
ふいに、笑い声が起こった。倒れた神父が、斬り割られた肩から血を流し、笑っていた。
「少しは、笑え……ジークよ。これで……里の、剣奴……二度と、売られまい。ふ、ふ……お前が売られた時の……よく、覚えている……お前が、心から笑った、最初で最後の……戦場への……馬車を、前にして……」

——そのとき、ジークは、神父を振り返り、
（俺の命で、神父様の服が買えますね）
そっと微笑んで、言ったものだ。
神父の礼装は一着きりしかなかった。しかもあちこちほつれを縫い直している。神父の服を買う金さえ無い——それがこの里だった。
（もっと大きな物が買えるよ）
神父はそう言ってかぶりを振り、まだ十四歳になったばかりのジークの肩を叩いた——
「お前は、優しすぎる……」
神父の口から、どっと血が溢れた。
「一番最初に、お前が……死ぬと、思っ……たが、最後まで生き……私を……討つとは」
その目は、朦朧と霞み、何も見ていない。
「私の、生きた……時代……優しさでは……生き残れなかっ……」
そこで初めて、神父の顔から、笑みが消えていた。代わりに、深い嘆きの顔が現れ、
「これから……お前達の……時代……」
それを最後に、息絶えた。
神父の腕に、ジークが、そっと触れた。

何度も縫い直した跡の一つに、見覚えがあった。自分が里を出た時と、同じ服だった。
多くの剣奴を育て、自分自身もまたかつて剣奴であった男の、それが死に装束となった。
やがて、ようやく男達が剣を捨てて逃げ去ると、ジークは凄魔どもに命じ、壁に脈打つ石の化け物を、粉々に砕き散らしてしまった。

「やっぱ、墓掘ってあげるのね……」
明けゆく空の下で、シャベルを振るう音が、谷間に侘びしく響いている。
「自分を殺そうとした相手なのにさ……」
アリスハートにしては珍しく、ジークに同情するような口調だった。ノヴィアも黙々とジークの指示に従って、埋葬を手伝っている。
ふと、ジークが手を止めた。
過去の声が、しきりに耳を打つからだった。
(もっと大きな物って、どんな物ですか?)
そう問うたとき、答えはすぐに返って来た。
(皆で住めるような家だよ。お前達が戦場から戻った時、みなで平和に暮らすためのね)
(平和に……)

（そうだ。お前達にはちゃんと帰るべき場所があるんだ。だから——帰っておいで）

本心から、育て子の生還を祈る声。

（生きて、帰っておいで）

十四歳の手に、剣を握る少年の声——

（帰って来ます）

馬車に乗り、大声で叫ぶ声——

（生きて、帰って来ます）

やがて、土を掘る音と、風の唸りに消えてゆく、遠い日の幻の声だった。

第五話 ラプンツェルの階段

町中を香の匂いが立ちこめている。
じゃらん。鎖の音が響く。司祭が、手に、鎖で吊した香炉を持ち、白い煙をもくもくと辺りに撒きながら、一心に祈りの文句を唱え、歩いている。
その後を、黒い葬服に身を包んだ者達が、幾つもの棺桶を担ぎ、あるいは子供達の手を取り、一列になってぞろぞろと歩いてゆく。
疫病によって、一度に大勢死んだ時に独特の、死の行列の光景だった。
香は、疫病を抑え、浄めるためのものだ。
その様子を、聖堂の二階の窓から見やって、
「あ、また、別の列が来たよ」
明るく言うのは、掌ほどの大きさの妖精である。金の瞳に金の髪、真っ白いドレスの背で震える羽の翅脈も金に淡く輝いている。
「そんなに？　アリスハート？」
部屋にいる少女が呼ぶと、羽を震わせ、ふわっと宙を舞って、少女の肩先に降り、
「凄いよぉ、ノヴィアぁ。まるで町中の人が死んだみたいに、後から後から来るよぉ」
「……凄い匂い。息が詰まりそう」

部屋の中でも焚かれる白煙に、少女が細い眉をひそめる。右手に、盲目であることを示す白木の杖を握りしめ、片方の手は、胸元の、聖性を身に帯びて力とする〈銀の乙女〉の紋章を、頼るように握っている。

疫病除けの匂いは、少女の溌剌と束ねた栗色の髪や、青い法衣にも染み込み、かえって猛烈な病が周囲で牙を剝いていることが実感され、つい、不安になって、

「それほどの障気なのですか、ジーク様？」

隣に座る男に、声をかけていた。

「ただの流行病ではないな」

というのが、男の落ち着き払った返答だった。美貌といっていい顔を、燃え立つような赤い髪が飾っている。ボロボロの白外套に、黒革の鎧、赤籠手という殺伐とした戦闘衣裳であるが――その肩に担ぐのは、いかにも戦いには不似合いな、巨大な銀のシャ、ベルだ。

そのシャベルの柄を、こつこつと指で叩き、

「普通、もっと障気が出るものだが……」

言いさしたとき、部屋のドアが開き、眼鏡をかけた壮年の男が入って来た。

「待たせてすまんな、ジークよ」

〈白印〉の紋章を付した、肩掛けマントをはたき、殺菌用の石灰を落としながら、

「なんとも、お手上げさ。とにかく症状が読めん。熱病が起こり、かと思ったら骨の悪くなる病が流行り、そうするうちに胃の腐る病が……という具合でな。まるで、世界中の病が集まってきているとしか思えんのだよ」

一気にまくしたてた。唖然となるノヴィアとアリスハートの傍らでジークは冷然と、

「ドラクロワと関係が？」

と、本題を切り出した。

「ああ、その件だったな」

男が、思いだしたように呟いた。

男は、かつて従軍医として軍に居たとき、医術の腕を認められ、聖法庁直営の救護医師団である〈白十字〉の紋章を得たという。ジークが、死者を葬る〈黒印〉の紋章を、白外套の背に負っているのとは、対照的だった。

「古くからの知り合い」とジークが言うこの男は、ジークの任務――聖法庁から秘儀を盗んで逃げたドラクロワを追う――についても、熟知しているようだった。

「いつ、現れた？」

「ここ最近のことさ……ドラクロワから接触があったと、ラプンツェル聖堂教会から、俺の方に、ひそかに連絡があってな。それで、聖法庁――お前さんに、通告したわけだ」

「ラプンツェル聖堂教会……」
「最近の、あそこの評判を、ドラクロワが聞きつけたのかもしれん」
「評判――？」
「あそこは、〈銀の乙女〉の中でも、特に、傷や病を治す力を持つ……ほら、お前さんの良く知ってる……シーラ、と言ったか？」
途端、ノヴィアが、どきっとなって、ジークの気配を探った。ここでいきなり、シーラの名が出るとは、思わなかったからだ。
ひと月ほど前――ラグネナイの泉で、ノヴィアの心に直接焼き付いた、かの女性の姿が、またぞろ思い出されていた。ジークが、恋人のように、シーラと呼んだ女性――
だがジークの気配は揺らぎもせず、いつもの寡黙さで、ただ静かに男の話を聞いている。
「彼女も、ラプンツェル聖堂教会の出身だったな。シーラ・リヴィエール……彼女とは別の〈癒す者〉が、近頃、随分と評判でな」
「別の〈癒す者〉？」
「マリアーナ・リヴィエール」
と、男は、新たな女の名を口にした。
「近頃、聖堂長に、めでたく就任した女だ」

「マリアーナが……聖堂長に？」
「ああ……お前は、彼女とも親しかったな。そう……はっきりいって、今この町が保っているのも、マリアーナ聖堂長のお陰なんだ」
蔓延する病に対し、マリアーナの浄める聖水だけが、てきめんに効くのだという。
また、前の聖堂長までもが病で息絶えた時、マリアーナが皆を率いて聖堂内の病を一掃し、群がる病者を癒した功績が大きく称えられ、次の聖堂長に選ばれた――というのだ。
「その評判は高まるばかりでな……こんなに病が流行ってるってのに、ラプンツェルの試練に向かう者も、跡を絶たん」
「試練……ですか」
ノヴィアが訊くと、おや、という顔で、
「知らないのかね？　俺はまたてっきり、ジークが〈銀の乙女〉を従士にしたと聞いて、あんたも〈癒す者〉かと……」
「ノヴィアは〈見守る者〉だ」
「万里眼か――！　偉大な透視の力……って、それにしちゃ、お前……その――」
男が、盲目であるノヴィアを見やって口ごもる。ノヴィアは咄嗟に目を伏せ、
「受け継いだ力が、使いこなせなくて……」

思わず悔しげな声音が零れ、退屈しきって肩でとろとろ睡りかけていたアリスハートが、
「ノヴィアに、そんな力、必要ないよぉ」
慌てて、ノヴィアの頬を撫でて言う。
ジークは、静かな面もちで、何も言わない。
男は、ちょっと気まずそうに頬を掻き、
「ま、それなら、試練を受けることで、力を使いこなせるようになるかもしれん……な」
「どんな試練なんですか――？」
「いや、詳しいことは、実際に試練を受けなければ分からんらしいし……まだ誰も、最後まで到達した者はいないらしい」
ラプンツェル聖堂教会は、もともと、一人の天才的な〈銀の乙女〉が、自分の力を受け継がせるために設けた試練の場に、後世、成り立ったものだという。
その試練は、受けるだけでも、数年分の修行に匹敵するといい、その分、命を失う危険さえあるという――が、実際にどのようなものかは、固く他言を禁じられているのだった。
「聖堂教会で修行する〈癒す者〉は、全員、その試練を受けるって話だしな……」
――では、シーラも、その試練を……咄嗟にノヴィアの心をよぎったのは、それだった。
「マリアーナが、直接、ドラクロワとの接触について、お前に、連絡してきたんだな？」

ジークが、淡々と、話を元に戻した。
「ああ……本来、中立を保つ〈銀の乙女〉だが……ドラクロワの悪行を、さすがに見かねたのだろうよ。あの男……このままでは本当に、聖法庁を転覆しかねんからな」
「では、後はマリアーナに、直接訊こう」
「そうしてくれ。……〈招く者〉のお前が味方なのが、救いだよ。かつてドラクロワの最強の軍団だった、お前がな……。それとも少しは、彼に加担する気が、あるのかな？」
男が、測るような笑みをふくませて言うが、
「ドラクロワ自身が、それを望まないさ」
というのが、ジークの端的な答えだった。

「死者を検分してくる」
そう言って墓地に向かうジークを、素直に見送るノヴィアに、
「いつもならついてくのに、いいの？」
アリスハートが、意外そうに訊いた。
「私は、〈癒す者〉じゃないから……病気になって足手まといになるのは、嫌だもん」
もし病死者の集まる墓地で、障気に中てられて病に伏したりしたら――恥ずかしくて、

とてもジークの従士を名乗るどころではない。
何より、ここひと月の間というもの、ラグネナイの泉で暴かれた無力感が、否応無しに心を責めるようになっていたのだ。
亡き母から受け継いだ力を、心が受け入れられない無力感と、ジークの従士として、力を使いこなし、立派に助けを担いたいという思いの狭間に、無限の闇が落ち込んでいた。
アリスハートがそばで、
「そんな力、必要ないよ」
そう、優しく言ってくれてなければ、どうにも耐えられないほどの辛さだった……。
アリスハートは、静まり返る町を見回し、
「辛気臭いと、それだけで病気になりそう」
もっともなことを、明るく喚くのだった。

翌日、三人は町を出て、丘の上に広がるラプンツェル聖堂教会の施設へと向かっている。
そこら中、癒しを求めて来る者でごった返しており、聖堂長マリアーナの名が付された、護符やお守り、薬や聖水などを求め、有り金をはたく者達が跡を絶たない様子であった。
「これじゃ、中に入れないよ」

アリスハートが呆れたように言うのへ、
「裏へ回ろう」
ジークは、肩に担いだ巨大なシャベルに、行き交う人の注目を集めながら、やけに慣れた足取りで、施設を迂回してゆく。と——
「そこで何をしているっ！」
いきなり、怒鳴り声が響き渡った。
続いて、ぞろぞろと武装した兵達が現れる。
「丁度良い。マリアーナは、いるか」
やおら振り向いたジークが、声を投げた。
「きき貴様っ、マリアーナ様と呼べっ！」
怒鳴った男が、更に怒りに奮い立つのへ、
「ここにおりますわ、ジーク」
更に裏口の陰から声が放たれるや、兵達が、一斉に跳び上がらんばかりに驚いた。
「マリアーナ様っ!?」
現れた女性は、薄青い法衣に華やかな肩掛けマント、胸に〈銀の乙女〉の紋章という出で立ちだった。長い蜂蜜色の髪に艶めく光をたたえ、青い目に濡れたような微笑をふくみ、

「ありがとう、隊長様。この方は、わたくしの客……旧くからの知り合いです」
嫣然と、言った。男は、う……と唸り、
「で、では、我々はこれで……」
じろり、とジークを一瞥し、渋々といった様子で、兵達を引き連れ、去っていった。
「困るわ……すっかり、お姫様扱いで」
マリアーナが、くすくす笑って言った。
その様子は、アリスハートなどには、
（ちっとも、困ってなさそう……）
に見えるのだが……。
「気配を感じて来てみたのよ。さ、どうぞ」
なよやかに、婉然と、手招くのへ、
「苦手なタイプかも……」
ノヴィアが、小さく呟く。
するとジークが振り向き、真面目な顔で、こくっとうなずいてみせるのへ、アリスハートが、ぼかんと目を丸くするのだった。

「どうぞ、皆様。今、お茶を運ばせるわね」
招かれた応接室に一歩入った途端、アリスハートが、ぎょっとなって宙ですくんだ。
石造りの外観とかけ離れた、豪勢極まる部屋であった。壁も天井も精緻なタペストリが飾り、シャンデリアも金縁の窓枠も、ソファも黒檀のテーブルも、どれもこれも眩いというか、ちぐはぐな輝きをぎらぎら放っている。
「困るのよ……貴族からも、お布施や贈り物が、後から後から、贈られてきて」
何も困ることなどなさそうに、言う。
ジークは構わず部屋に入り、シャベルを肩に担いだまま、どっかとソファに座った。
その隣に、ノヴィアが腰を下ろす。ふと眉をひそめ、豪奢なソファの刺繍を手で探り、
(……こんな椅子、初めて座るわ)
こそっとアリスハートに耳打ちした。
それほどの、きらびやかさであった。
やがて〈銀の乙女〉の見習い修道女らしい女性が茶を運び入れ、深々と、マリアーナにだけお辞儀をし、しずしずと退がると、
「まるで女王様扱い……本当に、困るわ」
また、言った。

「あ……あたしもお茶、欲しいなぁ」
あはは、とアリスハートが笑って言う。最初から期待せず、ノヴィアにねだるつもりだったが、俄然、マリアーナの表情が一変した。
アリスハートがびくっとなるのをよそに、いきなり冷厳に大きく手を叩くと、
「なにか御用でございましょうか……」
飛んできた先ほどの修道女に、
「あの妖精さんが見えなかったかしら？」
修道女は、はっとして、
「ただいま、お茶をもう一つお持ちし……」
みなまで言わせず、マリアーナがその頰を、ひっぱたいた。ばしっ、と大きな音が響き、
「わたくしに恥をかかせてはなりません」
言うや、もう一つ、ばしっとひっぱたいた。
修道女は、震えながら急いでお茶を用意し、
「どうぞ……」
涙をこらえ、アリスハートに、ミルク入れ用の、小さなカップを差し出した。
「どうぞ、妖精さん。美味しいわよ」

味も何も、これほど不味い茶の出され方があるのかと思い知らされるアリスハートだった。ジークは泰然として動かず——傍らのノヴィアは、呆気に取られて沈黙している。
「貴女はどこからいらしたの、妖精さん？」
「え……その、探してるところです」
肩をすぼめて言った。気づけばこの世に存在し、どこから来たのか、何のためにいるのか分からぬまま、寂しさに泣いていたところを、ノヴィアと出会ったのである。
「故郷を求めて彷徨う……エインセルね」
ずばりと言う。エインセルとは、招かれた使命を忘れた、魂の無い存在を表す言葉だった。だがマリアーナは一転、優しげに微笑み、
「エインセルは、何かの事情で使命を忘れさせせられていいいいるだけで、失ったわけではないのよ。いつかきっと、その使命を思い出すわ」
「そ、そうなの……？」
「ドラクロワについてだが……」
ジークが、淡々と話の腰を折った。
「接触してきたのは、いつ頃だ？」
「それは……わたくしの評判のせいで、ドラクロワが来たのか、ということかしら？」

たっぷりと艶を込めて笑みながら、

「違うわ。あの男は単に、〈癒す者〉への……シーラへの思い入れが、強いだけよ」

また、その名が出た。それほど特別な女性なのかとノヴィアが我知らず身を乗り出すと、

「シーラが生きてたら、わたくしが聖堂長になるなんて、ありえなかったでしょう……」

マリアーナは、憂えるように言ったものだ。

「……でもあの人は、この聖堂で癒しを施すよりも、自分から危険な戦場に行ってしまったわ……。ドラクロワも……そして貴方も、シーラに癒されたのだったわね、ジーク？」

ジークは腕を組んで黙し、何も言わない。

「彼女が亡くなったとき、聖堂中が彼女のためにミサを挙げたわ。ラプンツェルの試練でも、ただ一人、千の段を数えた彼女の、あまりにも早い死を惜しんで……」

「ラプンツェルの試練……」

今度はにわかに、ノヴィアが顔色を変えた。

「どんな試練なんですか？」

「試練の内容を教えるわけにはいかないの」

マリアーナが、残念そうに言う。

「ただ、ラプンツェルという女性については、教えてあげられるわ。言い伝えでは、見る

だけで、人の傷や病を癒し、時には、相手を傷つけることも、出来たそうよ」
「見るだけで……ですか」
「でも、その力を受け継ぐ者がいないことが、ラプンツェルの苦悩だった……そのために、彼女は死の間際、自分の魂を自らこの地に縛り付け、今なお、後継者の登場を待っているの……。あの、〈試練の丘〉で……」
「〈試練の丘〉……」
「貴女も、受けてみるかしら？　そうすれば、試練がどんなものかも分かるわ」
「あ、あの……マリアーナさんも……」
「わたくしも、三度ほど受けたわ」
ぎゅっと杖を握りしめ、身を乗り出すや、
「誰かへの競争心でやるのなら、やめた方が良い。本当に競うべき相手は、自分の心だ」
ジークの言葉に冷や水を浴びせかけられ、ノヴィアは赤くなって居ずまいを正した。
「わ、私、ジーク様の従士ですし——ジーク様の許しが無い限り……」
「試練を受ける受けないは、自由だがな」
ずずっと茶をすすりつつ、ジークが言う。
「どっちなのさ」

呆れて、アリスハートが喚く。
「変わらないわね。冷たい……ジーク」
マリアーナは目を細めて微笑し、黙ってシャベルの柄を、こつこつと指で叩くジークに、
「ドラクロワは、きっとまた現れるわ。聖堂教会が協力するかどうか、答えを聞きに……。
そこを、待ち構えて捕えましょう。騙し討ちみたいで、気が引けて困ってしまうけど」
いささかも気が引けた様子もなく笑って、
「それまでの間、可愛い従士さんがどう時間を過ごすか、自由ってわけよね？」
笑みを、ノヴィアとアリスハートに向けた。
ジークは、何も言わなかった。

ノヴィアの用意した昼食を平らげると、ジークはまたぞろ町の墓地へと行ってしまった。
試練のことを聞いて、妙に心が高ぶるノヴィアは、ジークについて行けない心苦しさも
あって大人しくしていられず、聖堂教会のあちこちをアリスハートとともに歩いた。
聖堂で、病者のために忙しく働く〈銀の乙女〉達が、みな物腰柔らかなのに驚いて、
「あの聖堂長が、怖すぎるんだねえ……」
アリスハートが、しみじみと言う。

「良い所ね……しっかり修行も出来て、雰囲気も良くて……伝統もあって……」
「なんとなく、懐かしい気もするのよねぇ」
「あら……もしこの辺りに、アリスハートの故郷があるなら、私も、ここに住もうかな」
「あの狼男との旅はどうすんのさ」
アリスハートが呆れて笑ったとき、
「私——」
咄嗟に口に出来ぬほどの強烈な思いが湧き、
「どしたの、ノヴィア？」
「ううん……なんでもない」
呟きつつ、内心で、その思いを反芻した。
夕刻になってジークが帰り着き、食事が済んで自分の寝所に向かおうとするジークが、
「ゆっくり休め。しばらく自由にしていい」
こつこつとシャベルの柄を叩きながら去ってゆくのを気配で確かめながら、ノヴィアは、完全にその思いが定まるのを感じていた。
（試練を受けよう——）
眠りに就きながら、閃くようにノヴィアの脳裏を駆けるのは、その思いだった。そして、

（それで、どうにもならなかったら、自分のこの旅は、ここでお終い――）
更に強く、心つらぬく思いがあった。
枕の端では、アリスハートがすやすやと寝息を立てている。
ノヴィアは改めて、自分とジークの関係に考えを及ばせた。そもそも、重要な任務を負うジークが、何の役にも立たない自分を連れているのは、何故か。それは、ノヴィアを守るためだ。母を喪い、受け継いだ力に苦しみ、無謀を承知で自棄になっていた自分の状態を、ジークは察してくれていたのだ。
半ば、ノヴィアの好きなようにさせながら、身の回りの世話の仕事を与えることで、ノヴィアの意識を必要以上の葛藤からそらしつつ、根気よく見守る――命がけの任務の最中に、それが出来る男なのだ……ジークは。
その優しさを思うと、涙が出そうだった。
（これで最後――最後の……我が儘）
試練を受け、真にジークの従士として旅を助けられるようになるか、せめてそのきっかけをつかむのだ。それが出来なければ、いつまでもジークの足手まといになるだけだった。
そのときは潔く旅を諦めよう。このラプンツェル聖堂教会に置いてもらい、修行を積もう。そしてそうなれば、二度と、ジークの旅に同道する機会は、無いだろう。〈銀の乙女〉

としての仕事が、自分勝手を許してくれなくなるからだ。
自分勝手でいられる今のうちが、最初で最後のチャンスだった。
そう決意するノヴィアの脳裏からは、もはやシーラの姿も、マリアーナの言葉も、綺麗に消え去っていた――

「良いんじゃないか」
翌日、気が抜けそうなほど、あっさりしたジークの返答で、ノヴィアの試練が決まった。
代わりに、マリアーナがやけに嬉しげに、
「ノヴィアちゃんなら、すぐに、試練を許可出来るわね。本当、わたくしも、ノヴィアちゃんみたいな従士が欲しいわぁ……」
などと、アリスハートを、心の底から恐ろしがらせるようなことを言うのだった。
ノヴィアは、端然として、迷いが無い。
ジークは何の心配もしていない素振りで、昼からまた町の墓地へと行ってしまっていた。
「どういう試練なんだろうねぇ」
ノヴィアがどんな決意をしたか知らないアリスハートが、興味津々で言うのにも、
「明日になれば、分かるわ」

微笑して、返すのだった。
その夜――ジークに甘えるのはこれで最後だという思いゆえに、かえって安らかに眠りに就いたノヴィアは、夢の中で、ふと、誰かと話している自分に気づいていた。
相手は、母だった。今まで言いたくても言えなかったことを、火を吐くように叫んでいる。それが収まると、今度は大声で泣き喚き、かと思うと、まるで自分が母の友人であるかのように穏やかに互いの事を話し合っている。
そのことに現実の自分が気づき――ふと夢を離れ、うっすらと目蓋を開き、
「母さん……」
自分の目が、確かに物を見ていることにも気づかず、すぐにまた、夢に戻ったのだった。
同じ頃――
「理想の為には手段を選ばない――もともと、そういう男だったのか、それとも……」
悄然と、夜空に問うジークの姿があった。
「シーラ……お前は、どう思う……？」
むろん答えはない。ふと――そこで、別の誰かに呼ばれたように、夜の高みを振り仰ぎ、
「分かっている。何百年もの束縛の果てに、その魂、俺の従士が、必ず解き放つ……」
それを最後に、部屋に戻っていった。

試練の日が来た。ノヴィアはアリスハートとともに、マリアーナに連れられ、〈試練の丘〉に向かった。ジークも、この日はどこにも行かず、黙々とノヴィアに同行している。
丘を登りきり、石畳が敷き詰められた平らな場所に出た。何人かの〈銀の乙女〉が佇み、
「ここ？　なんにもないよ？」
アリスハートの言う通り、下方に町が見晴らせる他は、何も見えない。ただ、石畳には大きく聖印が記されており、その縁に沿って、〈銀の乙女〉達が立ち並んでいるのである。
マリアーナが、ノヴィアを中央にいざない、
「そこに、目に見えない階段があるわ」
試練の説明は、それきりと言って良かった。
ノヴィアが杖で辺りを探ると、こつん、と何もない場所で、音が跳ねた。こつこつとそれを叩く。何もないそこに、何かがあるのだ。
「確かに……階段があります」
「んな、馬鹿な」
アリスハートがそこに舞い降りようとすると、するりと通り抜けてしまう。だが、ノヴィアが杖を突くと、確かに音がするのだ。

ノヴィアが、右足を、そこに乗せた。
ほう……とジークが、珍しく感嘆した。
更に左足を乗せると、ちょうど階段を一段上がった形で、ノヴィアの体が、宙に浮く様子を、アリスハートが呆然となって見ている。
「そこに階段があると信じる限り、ラプンツェルは、自分のいる天空に貴女を導くわ。しかし階段の存在が信じられなければ……階段は消え、試練者は、落ちます」
「はい。分かりました」
「命を失うほどの高さで、もし不安が起こったら、すぐに階段を降りなさい。さもなくば、真っ逆様に落ちることになるわ」
「はい。分かりました」
ふと、そのとき、その場にいる全員が、あることに気づいた。そもそもノヴィアの目が見えないことに——である。
「ノヴィアには大したことないんじゃん？」
アリスハートが、明るく言う一方、マリアーナが、慌てたようにジークに耳打ちした。
「この子、危ないわ。自分がどんな高さに居るか、分からないかも——」
「ただ登って行けば良いだけだ」

ジークが、ノヴィアにも聞こえるような声で言った。マリアーナが驚くのも構わず、
「下で誰が何を騒ごうと、お前が気にすることはただ一つ——自分の心だけだ」
ノヴィアの肩に触れ、はっきりと励まし、
「太陽に手が触れるまで、登って来い。俺とチビが、ここで待っている」
「は……はいっ」
いつもはチビと呼ばれて怒るアリスハートも、妙にじーんとして許してしまうのだった。
間もなく、ノヴィアの試練が、始まった。

階段は螺旋状になっているらしく、ノヴィアの足取りだけが、その透明な形状を探る手掛かりだった。三人の〈銀の乙女〉が下から段を数え、百段を越える頃には、ノヴィアの姿がどんどん小さくなっていった。
「お前は、何段まで登った？」
ふと、ジークが、マリアーナに訊いた。
「五百五十二段——」
正確な数字で答えた。よほど、その時の試練の恐怖が、身にしみているのだろう。
「……確か、聖堂長になるには、七百段を越えることが、規定だったな……」

その言葉に、みながはっとなった。マリアーナの顔が、みるみる怒りの形相を帯びる。
「関係ないわ。わたくしは癒しの力で……」
どん！　ジークが激しく石畳にシャベルを突き刺す音が、マリアーナを黙らせた。
「己の限界を知ることによって、己に打ち克つすべも得られる……だが、お前は別の方法に頼った。ドラクロワの授けた陰謀に……」
「え、なに、どういうこと？」
アリスハートがきょとんとなって言うのと、
「おやりなさい！　今すぐ！」
マリアーナが、叫ぶのとが、同時だった。
突然、丘の四方から矢が降り注ぎ、〈銀の乙女〉達が絶叫を上げて倒れた。
アリスハートが慌てふためく横で、ジークが素早くシャベルの柄を外し、銀剣を抜きざま、刃を閃かせ、飛んできた矢を打ち払う。
と――、続けて丘の四方から、真っ白い甲冑の兵団が、槍を構えて押し寄せてきた。
その兵団の姿たるや、全身、白薔薇の模様に金糸銀糸の縁取りをし、アリスハートが呆れ返るほどに、豪華な装飾まみれなのである。
「死者の声を聞く貴方に、隠し事は無理ね」

マリアーナが、悪びれずに言った。
「ドラクロワが、お前に疫病を操る法を授けたな？　代わりに、あいつは何を望んだ？」
「秘儀の要となる物を育てること——ここが、その場所よ……気づかなかったかしら？」
にわかに、石畳の聖印がじわりと赤い液体をにじませ、アリスハートが悲鳴を上げた。
「ば、ば、化け物ぉぉっ!?」
あの、グノーの洞窟で見たのと同様のものが、石畳一面に盛り上がり、鼓動していた。
「ドラクロワは言ったわ……試練を求める強い魂は、疫病で殺す民衆の魂の、何倍も役に立つって……そして〈招く者〉の魂は、その何百倍も〈刻の竜頭〉を成長させる……貴方は、もともとそのための存在なのかしら？」
無言のジークを、マリアーナが嘲笑った。
「貴方が魔兵を招こうとしたら、すぐに、階段を登っているあの子に、矢を射るわよ」
「な、なにそれぇっ!?」
アリスハートが、文字通り仰天する一方、
「やれば良い」
ジークには、動じた風も無い。
「ちょ、ちょっと、狼男ぉ、それは……」

「本当にやるわよ、ジーク。でも貴方さえ黙って死んでくれれば、あの子は、わたくしの従士として……」
「やってみろ」
マリアーナがさっと表情を消した。ぱちりと指を鳴らすと、脇にいた兵が弓を構え、
「足を狙いなさい」
すかさず矢が放たれた。上空へと走るや、にわかに風が巻き、横殴りに矢を吹き払い、
「そんな……！」
上空のノヴィアの法衣は、乱れもしない。
「浅知恵だったな――ノヴィアは既に、ラプンツェルの祝福によって守られている！」
大音声とともに、左手が激しく雷花を帯び、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
雷花の束を、掌ごと地面に叩きつけた。旋風と稲妻が走り、兵達が驚愕の声を上げ、
「金刻星の連なりの下、麗魔ファーガスとなりて我が敵に躍りかかれ！」
次々に地面から飛び出したのは、体は女性だがその頭も手足も鋭い刃という魔兵だった。
「射手座の陣！」
言下、四方に展開し、宙を舞い飛びながら、散り散りに手足の金属を飛ばした。その飛

来する刃が、凄まじい速度で白薔薇の鎧を貫き、兵達の包囲陣が一転して乱れに乱れた。
「お、お、お前の病に殺された〈銀の乙女〉達の魂が、お前を呼んでいるぞ、マリアーナ」
凍りつくマリアーナの眼前に、阿鼻叫喚の修羅場が繰り広げられようとしていた。

足が止まっていた。いったい何段目か。三百から先は、数えるのをやめていた。
今、ノヴィアは、背筋が凍りつくような恐怖に襲われながら懸命に杖で宙を探っていた。
そこにあると思っていた階段が無く、危うくバランスを崩しそうになったのだ。そのせいで、それまで一定の調子で登っていたのが、急に恐怖にとらわれ、動けなくなっていた。
やがて杖で探り当て、また一段、登った。
螺旋状になっていた階段が、急に形を変えた――。そう悟るや、それまで登ってきた高さが自覚され、ついで、真っ逆様に落ちる自分の姿が想像された。ぞっと慄えた。もし、そこにあると思って踏み出した先に、階段がなかったら……それ以上に、今立っている階段が消えたら――層倍の恐怖が心身を襲った。
杖が宙をさまよう。ついで自分の体が揺れ、恐怖で顔中が歪み、涙がにじんだ。
「怖いよぉ……」
思わず言葉が零れた。励ましてくれる者はいない。助けてくれる者さえいない。完全な

孤独の中で、ノヴィアは、ただ足を進めることさえ出来ない自分の情けなさに震えていた。
寂しさを伝えるべきだった――ふいに、そんな想念が湧いた。
分かってくれない母を責めるのと同時に、分かってもらおうとしない自分をどうにかすべきだった。もっと言葉を交わせばよかった。心を放てばよかった。
何もかもが遅すぎた。その後悔が心の中で嵐のように吹き荒び、今いる場所へのたまらない恐怖とともに、もはや恥ずかしいと思う余裕さえ失い、涙を溢れさせて大声で喚いた。
「助けてよ！　助けてよ！　怖いよぉっ！」
それでも、必死で階段を降りようとする自分と戦い、声を嗄らして叫び続けた。
いったいどれほどの間、そうして喚き続けていたのか――
気づけば、自然と涙も引き、やけに清々とした気分が、心身に訪れていた。
ふと、無の心に、何か引き寄せられるものを感じ、反射的に、足が動いた。
一瞬だけ恐怖が薄れ、足は見事に新たな一段を踏んでいる。そのとき突然、自分を引き寄せるものの意図を察した気がした。それはごく自然なことだった。この階段は、そこに、あるのではない。作り出されるものであり、登る者の心が、それを存在させるのだ――そう思ったとき、誰かが頭上で微笑んだ気がした。途端、なすすべのないほどのこの困難の中で、自分が今すべきことを、ふいに悟った。

ノヴィアはゆっくりと息を整えた。
そして、そっと、握りしめていた杖から手を離し——
今や迷いの元となったそれを、捨て去ったのだった。

あっと声を上げたのはアリスハートだった。
杖が落ちてきて石畳の上で折れ砕ける様に、
「ノ、ノヴィアの杖が……！」
「ノヴィアが落ちて来たわけじゃない」
ジークは、悠然と返したものだ。
勝敗は、既に決したといってよかった。
白薔薇の兵団は自らの血でその鎧を赤く染め、大半が地を這っている。単純な包囲戦などジークに通じるはずもなく、もはや壊滅状態の兵達を前に、しかし、マリアーナは、
「さすがの貴方にも、読めなかったようね」
突然、けたたましい笑い声を上げ、言った。
「それも当然ね。ほとんど偶然なのですもの。貴方が、エインセルを連れているなんて」
「なに——？」

咄嗟に、ジークはアリスハートを見やった。
「え……あたしが、なに？」
「わたくしが、最初にドラクロワに協力したのは、二年も前のことよ。あらゆる策を講じ、中には、すぐに成果が表れない分、より確実な仕掛けも施したわ――可愛い妖精さん」
アリスハートがぽかんとなるのも構わず、
「貴女の故郷は、ここから西にあるわ」
「はぁ……？」
「わたくしとドラクロワはそこで多くのエインセルを招き、各地に放ったわ。貴女の特徴は、目立たぬよう力を吸う遅成型であることよ、妖精さん。ノヴィアちゃんが、いつまでも力を使いこなせなかったのも、貴女が少しずつ、力を吸い取っていたせいでもあるわね」
婉然と笑うマリアーナの言葉に、ジークもアリスハートも、愕然として凍りつき、
「力を持つ者を求めて彷徨う妖精さん……意志を持つまでに育った貴女こそ、最初の歯車よ。疫病で死んだ全ての魂と、ここで這いつくばってる馬鹿どもの魂を捧げて――」
「よせっ――！」
ジークが切迫の声を上げた。目にも止まらぬ迅さで、その手の銀剣を投げ放つや――
「回り出すのよ、〈刻の竜頭〉が！」

マリアーナが叫んだ。次の瞬間、その胸元をジークの剣が貫くや、マリアーナを中心に目に見えぬ力が迸った。地に這う騎士団が一斉に断末魔の絶叫を上げた。地面が揺れ、一面に赤黒く鼓動する巨竜の化石が、咆吼を上げ、塔ほどもある身を起こしたのだった。

アリスハートが驚愕の叫びを上げた。その体が、目の眩むような金の輝きを放っている。その輝きに向かって、化石の竜が、首をもたげた。咄嗟にジークがけしかけた魔兵どもを四肢でなぎ倒し、ジークの眼前で、

「いや……やだ……助けて……」

ジークに必死の目を向けるアリスハートを、竜がひとのみに食らったのだった。

その様子を、マリアーナが微笑して見つめ、

「死は、怖くない……ドラクロワは、言った……選ばれた者による、死の無い世界……争いを永久に無くすため……死を無くす……」

口に大量の血が溢れ、倒れた。ジークが駆け寄って剣を抜いたとき、既に絶命していた。剣を手に、ジークが振り返る。そこに、アリスハートを食らった竜が、全身を金に輝かせ、見る間に肉体を生じてゆくのだった。

無限に続くかと思われた階段の頂上に、今、到達したことを、ノヴィアは知った。

階段から落ちることも、帰るということさえも忘れ、登り続けたのだ。涼しげな風に、思わず微笑が零れた。そして今、自分を宙に支え、見守っている存在へと、意識を向けた。

(――待っていました)

何百年もの間、自らをこの天空に縛り付けてきた魂の切々とした思いが流れ込んでくる。

(新たな力を、求めていますか――？)

ノヴィアの心持ち次第では、今にも想像を絶する力の奔流を受けそうになるのへ、

「私……自分で使いこなせない力は、もう、十分なんです。ごめんなさい……私、この階段を登らせて頂いただけで、満足です」

暖かな気配に包まれながら、言ったものだ。

途端――力の奔流が綺麗に消え去り、

(それこそが、力です)

ノヴィアの隙を突くようにして、にわかに全身が燃え盛るかのような感覚が湧いていた。

あっと目を見開き、ノヴィアはそれを見た。

青空のもとで虹色に輝くもの――一段一段踏みしめ、辿り着き、今や水晶が陽光を受けるかのように輝く、長い長い階段だった。

そして、それを見る自分の目が開いたのだということを、深く実感しながら、

(貴女の目に宿るのは、万里を見通す透視の力――それに、私の幻視の力を、委ねます)
そっと天空を見上げた。ラプンツェルの望みを察し、静かに息を整え、ノヴィアは、偉大な魂を送るための、葬送の歌を歌った。

体が、静かに宙を降りてゆく。
遠かった地面がゆっくりと近づき、やがてノヴィアの目に、丘の上に立つ、巨大なものの姿が、映っていた。塔ほどもある身を赤黒く脈動させ、爬虫類に似た顔と四肢に、異様なほど鋭い牙と爪を生やし、荒れ狂っている。
その怪物に、ただ一人、ジークが、魔兵を率いて戦っている姿が、見えた。
更には、その巨大なものの中にのみ込まれた大事な友達の姿さえもが、はっきりと見え、
(これが、万里眼……お母さんの力……)
地面が接近し、ふわりと、降り立った。
怪物の目が、ノヴィアを向いた。すかさず、ジークが、ノヴィアの前に立ちはだかり、
「ノヴィアっ！　逃げろっ！」
ジークの叫びと、ついで、魔兵をその爪で一瞬に引き裂く巨大な怪物の咆吼が重なった。
ノヴィアは、咆吼する怪物から逃げもせず、すっとジークの傍らに立った。その動作に、

「目が、見えるのか」
訊くのへ、決然とうなずき——言った。
「大きな、金色に光る矢が……見えます」
その瞬間。何もない宙に、続けざまに空を切る鋭い音が響き、怪物の体のそこかしこに、巨大な金色の矢が次々に突き立っている。
さすがのジークが、驚きに瞠目した。
怪物が、身をよじって苦悶の叫びを上げた。
「鎖が……見えます」
今度は、突き刺さった矢尻に鎖が現れ、見る間に怪物の動きを封じるではないか。
このとき、ノヴィアの目は、現実の光景と同時に、実際には存在しない幻を、見ていた。
それは幻を見ることによって具現する——
「ラプンツェルの——幻視の力……」
ノヴィアが、告げた。そのとき——怪物が咆吼を上げ、鎖を引き千切った。咄嗟にノヴィアは更なる束縛を見ようとしたが、急に、血の気が引くほどの疲労感に襲われていた。
それが、力を継承したばかりの、ノヴィアの限界だった。
怪物の背に、辺りが暗くなるほど巨大な翼が生え、強風を巻いて宙に浮き、

「待って、アリスハート！」
ノヴィアの叫びも虚しく、瞬く間に上空に舞い上がり、西の方角へと飛び去って行った。
「あの向こうに……ドラクロワがいる」
傷だらけのジークが立って、静かに呟いた。
ノヴィアは、はっと振り返り、ほとんど初めて見るジークの顔を、眩しそうに見上げた。
「追うぞ。あのチビを、助けるんだ」
「助ける……もし助けられなかったら……」
言いさして、ノヴィアは言葉をのみ込んだ。
ジークの決然とした表情は、もしもの時のことなど、微塵も考えていないように見えた。
ノヴィアは、黙ってうなずいた。自分が新たに得た力こそ、それではないか——強く、そう思った。それは、遠くを見通すことでも、幻を見ることで具現することでもない。
生きてゆく上での、勇気の力だった。
目に見えない階段の存在を信じて、足を踏み出すように——ノヴィアはただアリスハートの無事を信じ、ジークとともに丘を降りた。

第六話　エインセルの魂

夕闇が淡く朧に降りる森の底に、二人の人影が、腰を下ろしている。
一人は、長身の男であった。燃えるような赤髪が、研ぎ澄まされた美貌を飾っている。
ボロボロの白外套に、黒革の鎧、腕には赤籠手と、実に殺伐とした戦闘衣裳である。が、その膝に横たえるのは、いかにも戦いとは無縁そうな、大きな銀のシャベルだった。
今、そのシャベルで浅く掘った穴に、薪が積み重ねられている。火は、ついていない。
「見えるか、ノヴィア」
男が言う。薪を挟んで、一人の少女が、男と向かい合って、座っていた。
男の背丈の半分にも満たぬ、小柄な少女である。その青い法衣の胸元には、聖性を力とする〈銀の乙女〉の紋章が、飾られている。
淡く透き通る紫の瞳を、一心に薪に向け、
「あ……火が、見えます、ジーク様」
呟くや、ふいに、ほのかな明りが灯った。
薪に、火が生じたのである。なおも炎を見つめる少女の目が、火の明りを呑んで、更にはっきりと赤く燃える火の姿を見いだしていた。
幻視の力――そこにそれがあるという幻を見ることで、具現させる力である。

それが、この少女が試練の果てに得た力だったが――
少女が、ふっと息を抜いて、顔を上げた。
その途端――薪から、火が消え失せた。
焦げ付いた匂いとともに、濃い闇が訪れる。
あ……と拍子抜けしたように少女が嘆息を零す。男が、無言で火打ち石を取り出した。
間もなく、男の手で、火が焚かれた。
「私に、使いこなせるでしょうか……」
心細げに言う少女――ノヴィアの視覚には、今や幻視の力と、あらゆるものを透視する万里眼の、二つの力が継承されているのだった。
「力を使いこなすには、限界を知ることだ」
男――ジークが、淡々と言う。
ノヴィアは、はい……、と二つの力の重さに耐えかねるように目を伏せ、返答した。
限界――ノヴィアの幻視は、まだ、人や動物や火など、複雑なものや、他のものに強い影響を与えるものを具現するのは難しかった。
また、矢を具現させても、真っ直ぐ飛ぶだけで、軌道を自由に変えるのは無理だ。
幻視も透視も、一日に何度も使えず、二つの力を一度に使うとなると、気を失うほどの

疲労に襲われた。自由に使いこなすには、それこそ何十年もの修行が必要で、ノヴィアは、
（大丈夫、ノヴィアならすぐ使えるよ――）
明るくそう言ってくれる声を、求めていた。
掌ほどの妖精――金の瞳と髪、白いドレスから覗く羽も金に輝く、大事な親友――
（アリスハート……）
その姿が、今、無いことに、たまらない寂しさを覚えるノヴィアに、
「視覚に関係する業は、聖法庁でも僅かしか使い手がいないほど、難易度が高い……」
ジークは、慰めるでも励ますでもなく、
「まあ、慣れだ」
あっさりと、言った。
「慣れ……ですか」
「ある男が、そう言っていた。そいつは、幻惑の力を得意とする――幻術の達人だった」
いったい誰のことかと疑問に思っていると、
「ドラクロワという男だ……」
その名を告げ、ノヴィアを驚かせた。
二年前、聖法庁から秘儀を盗み出して逃げて以来、各地で暗躍を繰り返す男――その男

の追討こそが、ジークの使命であるのだ。
「俺が魔兵を招く業も、いわば、幻の力だ。強い力が、形をなし、魔兵として人の目に映る――人の目に映ることによって、それは実体として更に強固になる。人の目に映る、ということは、それだけで力になるものなんだ」
「人の目に映ることが……力に」
「エインセルも、その力によって、この世に存在していると言っていい――」
エインセル――いわば、意志を持った幻だった。そのエインセルであるアリスハートが、怪物と化して飛翔してから三日が経っている。
今、ジークとノヴィアは、その怪物が消息を絶った地点へと、向かっているのである。
ノヴィアが、万里眼でその行方を追い続けていたが、ある地点で、急に見失ったのだ。
「あれが、アリスハートだなんて……」
ノヴィアが最後に見たその姿は、巨大な怪物だった。翼を生やして飛び、塔ほどもある身は赤黒く脈動し、爬虫類に似た顔に牙を剝き、四本の足には鎌のごとき爪――その姿を思い出すたび、おぞましさにぞっとなった。
「〈刻の竜頭〉……って、何なんですか」
「外典イザーク書に記された秘儀の名だ」

「外典……？」
「聖法庁の中でも、特に禁じられた書——ドラクロワが盗み出したものだ」
いつものごとく短い説明に、
「ドラクロワも、幻を追っているんだ——」
ジークはぽつりと、呟くように付け加えた。
その幻が、確かな形を得て力を振るい出す前に、止めなければならない——そしてジークは、その方法も、既に考え出しており、
「いいか。俺とお前の力を使って、あのチビを元に戻す方法は、こうだ——」
説明するジークの顔を、ノヴィアは、しっかりと見つめた。その顔は、盲目であったノヴィアが思い描いていた以上に、精悍で、鋭く研ぎ澄まされ、そして頼り甲斐があった。
アリスハート——貴女は幻なんかじゃない。
ジークの顔を見つめながら、ノヴィアは強く思う。貴女には魂がある。それが私と貴女を出会わせてくれた。貴女は決して、役目が終わったら消えてしまう存在なんかじゃない。
その思いを噛みしめ、眠りにつく間際、
「頑張るのよ、ノヴィアちゃん」
そっと、自分に向かって呟いた。そして、

「はい……頑張ります」
小さく自分で返した途端、涙が零れた。
それは地に降り、翼を畳むと、天に向かって壮絶な咆吼を上げた。忘れたはずの故郷に帰り着いたことへの、幸せの咆吼であった。
その幸せに、今やそれの核である、小さな存在は完全にのみ込まれてしまっている。
今まで抱き続けてきた虚しさ寂しさは消え、
（アリスハート……）
誰かが呼んだ気がしたが、それが誰の声であるかも、思い出せなくなっていた。
やがて、怪物の体のあちこちに、金に輝く糸が生じた。その柔らかな糸に包まれ、四肢を丸め、眠りにつこうとした、そのとき――
「〈竜繭〉が……ついに具現する」
声とともに、何人かの人影が、現れていた。
中でも、声の主の姿が、怪物の目を引いた。
しなやかな長身に、長い銀髪――そしてその顔には、銀に光る、仮面を着けているのだ。
「〈竜精〉は力を集めてさまよい、〈竜骸〉は大地にて魂を食らう――二つが合わさって

〈竜体〉と化し、始まりの地にて〈竜繭〉となるのだ……秘儀を招く、繭に……」
仮面の男の冷ややかに響く声を耳にしながら、怪物はやがて深い眠りに落ちていった。

ふと、何かの気配で、ノヴィアは目覚めた。
静まりかえる闇に、誰かが立っている。
ジークかと思って起き上がったノヴィアは、そこで、ぎくりと身を強張らせた。
すぐ目の前で、一人の少女が、闇に浮かぶようにして、ノヴィアを見つめていた。
ノヴィアと、ほぼ同年齢の少女である。
何色ともつかぬ淡い瞳に、切々とした悲しみの光を溜めて、こちらを見ている。
長い金の髪が、薄手の絹衣の胸元にまでかかっており、朧なその体を通して、かすかに、向こう側の木々が、透けて見えていた。
だが、何よりノヴィアを凍りつかせたのは、その少女の相貌であった。それは、ノヴィアのよく知る者に、あまりによく似ているのだ。
少女が、すうっとその白い指を上げた。
少女が指さす先に、ノヴィアが目を向けた途端――少女の姿が、ふっと薄らいだ。
「待って……貴女は――？」

咄嗟に、ノヴィアが声をかけると、少女の唇が、小さく動き――そして、消え去った。
「どうした」
ジークが身を起こす。ノヴィアは、少女が消えた空間を見つめたまま、
「……アリス」
少女が残した名を、呟いていた。

森を出て丘を越えると、急に豊饒な農耕地が出現していた。収穫を控えた黄金色の穂の海に囲まれるようにして、石英造りの豪奢な聖堂を中心とした都市が見え、
「聖地ラフェンドラだ」
ジークが告げた。古来、この地帯には、天界からの聖性が降り注ぎ、どんな作物を植えても、必ず豊作になるのだという。
土地の領主は、代々聖地の司祭の役目も兼ねており、聖法庁とも、同盟の関係にあった。
だが何より重要なのは、この地こそ、怪物と化したアリスハートが消えた地点であり――そしてまた、昨夜、現れた少女が、指さした場所でもあるということだ。
ジークは、聖法庁の使者という立場で、直接、領主に色々と訊くつもりだと言い、
「偶然にしては、出来すぎている」

市庁舎への道すがら、憮然と呟いたものだ。
「あの女の子は、なぜ現れたのでしょうか」
「分からない。俺の方に出たなら、捕えて尋問することも出来たが……」
「幽霊でも、女の子を尋問だなんて……」
「戦場の作法に則って行う訊問だ。素直に吐けば、そうそう乱暴なことはしない」
「私の方に出た理由……分かる気がします」
ここにアリスハートがいたら、そういう問題なのかと口を挟んだであろうような会話を交わしながら、やがて市庁舎に到着した。

「空を飛ぶ怪物が、ここに来た――？」
ラフェンドラ領主は、裕福な都市を自分の体で宣伝するような、肥えた身を念入りに着飾った男だった。表情は柔和だが油断のならない目をしている。赤ら顔に脂汗を噴き出し、
「いやはや、今まで聖法庁の人間から聞いた中で一番、愉快な言葉ですな。空飛ぶ怪物」
お世辞にも上品とは言えない笑い声を上げ、
「馬鹿言っちゃいけません」
一転、怒りの形相で、ジークを睨み返した。

「聖法庁が今までどれだけこの土地から税を徴収してると思ってるんですか。こちらが本当に困ってる時には何もしてくれないくせに今度は何の言いがかりですか。怪物が現れたから税を出せとでも言うつもりですか」
ジークは、いや——と言葉を挟んだが、領主はひとくさり文句を言うのをやめなかった。笑うにせよ怒るにせよ脂汗を噴き出すものだから、ハンカチを何枚も取り出しては、顔を拭い、ごみ箱に捨てる動作を繰り返すのだ。
ノヴィアが数える限り、十八枚のハンカチが領主の脂汗の犠牲になったところで、さすがにハンカチが切れた。と思ったら、領主がぽんぽんと手を叩くと、執事が給仕用の手押し車にどっさりハンカチを積んで現れ、
「ふうむ。収穫祭をきっかけに、また税を増やすのかと思いましたが、違うようですな」
どうやら納得したようにハンカチをせっせとポケツトに詰め込んでいる。ノヴィアは危うく、あの少女の幽霊は、実は無駄に使われたハンカチの怨霊かと思い込むところだった。
「とにかく、空飛ぶ怪物なんて、祭の催しにも出ませんよ。とんだ無駄足でしたな」
がははと笑いながら腰を上げる領主に、つと、ノヴィアが身を乗り出し、声をかけた。
「アリスという女の子を知りませんか」
領主の腰が、ソファから僅かに離れた所で、ぴたりと止まった。ついでに脂汗も止まり、

「知りませんな」
仮面のように固まった顔で、答えていた。
ふと、ノヴィアの目に、領主の顔が、何か別の表情を——違う相貌を、現すかに見えた。
領主は顔をそむけ、立ち上がった。
「今から収穫祭のための会議がありましてな。話の続きは、その後でもよろしいかな？」
ジークは、シャベルの柄を、こつこつと指で叩きながら、うなずいてみせた。

「怪しいですね」
「怪しいな」
互いに口にしつつも、何がどう怪しいものか、判然としないジークとノヴィアであった。
領主が戻るまでの間、別室で、出された茶を飲むうち、ふと、ノヴィアは思い返して、
「あの御領主、一瞬、別人に見えました」
何気なく口にするや、ジークの目が鋭くノヴィアを見据えた。そのあまりの鋭さに射すくめられ、アリスハートがジークを狼男と呼んでいた理由が分かるノヴィアだった。
「別人だと……？」
「か、顔が……その、違う人に……」

ジークはうなずき、何やら考え込んだ。
ふと、その目を、部屋の一隅に留め、
「昨日の幽霊というのは……そいつか」
その視線を追うノヴィアが、弾かれたように立ち上がった。
そこに、あの少女が、佇んでいるのだ。
哀しい目がじっとノヴィアを向いており、その細い手が、窓の一つを、指さしている。
ノヴィアは、咄嗟に、少女の指さす先を透視し、思わず、あっと声を上げていた。
そこに、恐ろしく静かに、市庁舎を包囲する兵の一群があったからである。
「へ……兵隊に、囲まれています」
途端、ジークが放たれた矢のように素早く動き、窓際から、そっと外の様子を見やった。
「なんという静かな動きだ……」
ジークの全身に戦いの気配が満ち、
「領主の方から、先手を打ってきたか」
左手が、魔兵を招来する力を帯びる——
と、ふいに、少女の姿が滑るように動き、部屋の一隅の壁へと、消えていった。
ノヴィアは、力を使いすぎて疲労せぬよう気を付けながら、更に少女の行方を透視した。

「ジーク様、そこに階段が見えます」
ジークがさっと動き、壁を手探りすると、なんと、くるりと壁が回った。果たして、開かれた暗闇に、狭い階段が降りている。
「非常時の、隠し階段らしいな……」
ジークが呟く。その階段の向こうに、少女が立っており、ふっと、その姿が消えた。
ジークとノヴィアは顔を見合わせ、やがて、物も言わず、階段に身を投じていた。

兵が続々と速やかに市庁舎の周囲を取り囲むのを、建物の陰から確かめながら、
「幽霊は、まだいるか」
ジークが訊くと、ノヴィアはうなずいた。
二人が、隠し階段から客室を脱してからも、少女の幽霊がところどころに現れては、指さすのである。しかも、ノヴィアの万里眼を理解しているのか、少女は、建物の向こうから、真っ直ぐノヴィアを見つめ返してくるのだ。
やがて少女の導きに従い、市庁舎を脱し、都市の奥——石英造りの聖堂に、入っていた。
みな収穫祭の準備に駆り出されているらしく、人影はない。容易く回廊を抜けると、やがて、聖職者しか立ち入りが許されない、禁止の聖印を刻まれた扉が、立ちはだかった。

「どいていろ、ノヴィア」

ジークが扉に歩み寄り、静かに聖印に左手を当てた。ばしっ、と火花が散ったが、抵抗はそれだけだった。間もなく、ジークの左手に屈したように、鍵がひとりでに開かれた。

ジークは、更に扉を押し開き、

「これは――」

「すごい……」

ジークとノヴィアが共に感嘆の声を上げた。

円形の、広大な広間であった。

その中心に、巨大なものが聳え立っている。

それは、無数の聖印が刻み込まれた、市庁舎よりも遥かに巨大な、一本の樹であった。

広間の天井は開かれ、降り注ぐ陽光に、葉や、地面に敷き詰められた聖石が輝いている。

「噂に聞く、ラフェンドラの聖樹か……」

これが、聖地の秘密だと、ジークは言った。

この樹が、天界の聖性を集め、大地に降ろし、作物の豊穣を約束しているのだという。

ふと、何かが、地面に敷かれた聖石の上で跳ねた。見ると、樹の枝の尖端らしい。葉は枯れ、枝の表面は炭のように黒ずんでいる。

見上げると、頭上から、さらさらと音を立てて枝々が崩れ、砂のように落ちてきていた。
「聖樹が、枯れようとしている……？」
ジークが、問うともなく呟いた。
あ……とノヴィアが声を上げた。
樹の根本で、少女がこちらを見ているのだ。
二人が近づくと、少女の姿がふっと消えた。
代わりに、それまで幹の陰に隠れて見えなかった物が、突如、眼前に現れるのであった。
ジークもノヴィアも咄嗟に言葉も無い。
それは、巨大な、黄金の繭であった。
陽光を受けながらも、それ自体が淡く金色に光り、かすかな脈動の音を響かせている。
繭は、樹の幹に張り付くようにして糸を絡ませており、ふと下方に目を向けると、そこに、小さな墓があるのが、分かった。
繭の糸が墓石に絡みつき、墓を荒らすように地を抉り、砕けた棺の一部を覗かせている。
だが、遺体は、どこにも見えない。
「もしかして、あの女の子のお墓――」
ノヴィアは繭を見やり、はっと息をのんだ。

「どうした」
ジークが声をかけるや、ノヴィアの総身がわななき、その目に、涙がにじんだ。
「ア、アリスハートが……見えます」
「この、繭の中にか――」
さすがのジークが唸り、すぐさま、
「よし。決めていた通りに、やるぞ」
ノヴィアも目尻を拭い、繭に、歩み寄った。
そのとき――どん！　とジークが地面にシャベルを突き立て、素早く振り向いた。
「これだから、聖法庁は油断ならない」
にわかに、領主の声が、広間に響いた。
まるで気配を感じさせない静けさであったにもかかわらず、ノヴィアが慌てて振り向くや、幾百もの兵が、迅速果敢に広間に雪崩れ込み、続々と二人を包囲していった。
かちり。ジークが無言でシャベルの柄を回し――引き抜いた。新たに現れた銀の柄を握りしめ、無造作に銀剣を抜き放つ。
「ノヴィア――掩護しろ」
ぼそりと、声を低めて、ジークは言った。

刹那、領主に向かって、ジークが走り出していた。剣や槍の距離ではない。まさしく矢の距離を走り抜け、兵達の虚を突き、瞬く間に領主に切迫した。振るう手も見えぬ迅さで、領主の顔目掛け、剣の光芒を走らせる。

だが驚くべきことに、肥え太った領主が、素早く跳び退り、僅かにその頬を切られたものの、完全に、ジークの剣をかわしていた。

両者の信じがたい身のこなしに呆気にとられていた兵達が、慌てて槍を振るい始めた。

転瞬、ジークの身が体重を失ったかのように宙を舞い、次々に突き出される槍をかわし、

「た、沢山の矢が……見えます！」

ノヴィアの声とともに、空間に無数の矢が現れ、扇状に降り注いで地面に突き刺さった。

数が多い分、矢も小さく威力も無いが、ジークを追う兵達の足を止めるには十分だった。

ノヴィアが、ただの従士ではないことを悟った兵達が、俄然、身構えた。

その隙に、再び距離を取ったジークに、

「よく見抜いたな……ジーク」

領主が、言った。その声音が一変している。

切り裂かれた頬から血は流れず、なんとその傷口からみるみる領主の顔がほころび――

一枚の、銀に光る、仮面と化していた。

「この〈惑い(まど)の面〉をつけている間は、心も別人になりきるのでな……そう簡単に見抜けるものではないはずだったが……」
そう呟く(つぶや)領主の体が、伸(の)びた。
肥え太っていた体はしなやかな長身に変じ、黒かった髪(かみ)は、長い銀髪(ぎんぱつ)へと化していった。
衣服(いふく)は、青ざめたような光沢(こうたく)を放つマントに変貌(へんぼう)し、下から貴族の着る胴衣(どうい)が現れる。
白い滑(なめ)らかな手が、銀の仮面を外した。
氷で出来た神像(しんぞう)のごとき白皙(はくせき)の美貌(びぼう)が、深い群青(ぐんじょう)の瞳(ひとみ)に、凄烈(せいれつ)な眼光(がんこう)をたたえ、言った。
「久(ひさ)しいな……ジーク」

「……ドラクロワ」
ジークが応(こた)え、ノヴィアを愕然(がくぜん)とさせた。
「本物の領主は病(やまい)で死んだ——二年前に」
ドラクロワが、仮面を手にしたまま言った。
「私が、ここの領主に成り代わることは、領主自身も、了解済み(りょうかいず)のことだった……」
ドラクロワが、ふとまた仮面を顔に当てた。
「聖樹が枯(か)れ始めたのだ。寿命(じゅみょう)なのだ」

ふいにまたあの領主の声が、仮面から響く。
「聖法庁は何もしてくれぬ。聖樹を救う秘儀があるくせに、禁じられているといって施してくれぬのだ。頼む、この地を救ってくれ。我が娘アリスの事ならば、心配無い。聖樹に仕える聖女として、喜んで命を捧げるだろう」
そこでまた、仮面を外した。
「彼らが秘儀を求め……私が秘儀を試した」
「聖樹を枯らせる業も……聖法庁の禁じられた秘儀の一つだったな……ドラクロワ」
ジークが、言った。淡々とした声音が、込み上げてくる感情に、かすかに震えていた。
「わざと聖樹を枯らせ、自分を匿ってくれる場所を作ってから、秘儀を盗み出したのか」
その途端、ドラクロワの面に、険しく、凍てつくような微笑が、浮かんだ。
「どのみち、聖樹は寿命だったのだ。その寿命を、ほんの少し縮めただけだ……ジーク」
その微笑に、ノヴィアは、総身が粟立つほど、ぞっとなった。目的のためには手段を選ばぬ、冷酷な意志がこもった、微笑だった。
その、ドラクロワに、完全に服従するように、兵達が、無言で周囲を取り囲んでいる。
「アリスという名の少女の魂を使って、エインセルを招いたな――」
「ただのエインセルではない。〈竜精〉という。それを招くには、強い聖性を持つ魂が必

要だった——聖樹に一生を捧げる、聖女の魂が。何百体も招いたが、帰り着いたのは、たったの一体だけだったよ……ジーク」
「シーラの墓を暴いたのも、秘儀のためか」
ジークが、静かに剣を下げ、言った。
「シーラの魂も……秘儀に使う気なのか」
「だとしたら、どうするのだ、ジークよ」
ドラクロワの目が、にわかに燃え立つような怒りを帯びて、ジークを睨み据えた。
「お前が、どうするというのだ、ジークよ」
ジークは、悲しい顔でドラクロワを見返し、
「俺が、お前を止めるよ、ドラクロワ……」
刹那、その左手に烈しい雷光が迸った。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
大音声とともに、白熱する雷光を放つ左手を掲げ、すかさず地面に叩きつけた。
聖樹の枝が一斉に揺れ動くほどの旋風が巻き起こり、輝かしい稲妻が地中から吹き荒れた。驚愕する兵達の眼前に、
「地刻星の導きの下、総力をあげよ！」

言下、異形の軍勢が一斉にその姿を現した。
「双子座の陣！」
続々と、左右対称の形で、斜線陣形を築くのは、かつて現れた、全ての魔兵であった。
百を超す剛魔が左右に並び、その後背に砲魔と哭魔が控え、中央では十六体の凄魔がジークとノヴィアを護る円陣をなし、頭上では、宙で麗魔が同じ円陣をなしている。
「これだけの兵種を、一度に招くか……」
ドラクロワが、兵達の後方に退きながら、怒りの目はそのままに、薄く微笑した。
「腕を上げたな……ジーク」
先頭を切ったのは哭魔であった。兵達に向かって跳ね跳び、槍で突かれるや、いきなり自らの体を爆発させ、兵達ごと吹き飛んだ。
広間が震撼した。それを合図に、剛魔が怒濤の地鳴りを上げて左右の兵達へ突進し、胸に生やす角で、次々に兵達を串刺しに倒した。
その突進を逃れた兵達を、すぐさま、砲魔の右腕から放たれる火球で狙い撃ちにする。
左右に展開した陣の隙間を突き、兵達がジークとノヴィアに殺到したが、これを、諸手に双剣を振るう凄魔が迎え撃ってなぎ倒し、上空から舞い降りる麗魔が、鋭い刃である手足で、頭上から兵達を切り裂いてゆく。

初めて魔兵の戦いの凄まじさを目の当たりにしたノヴィアは、血の気が引くほどの衝撃に、咄嗟に歯をくいしばって耐えた。
そのノヴィアが、ふと、異変に気づいた。
敵の兵の数が、にわかに変化したのである。
むろん、倒せば数が減ることは当然だが、ノヴィアの目には、敵が減ったり増えたりしているように見えるのだった。
ふいに、咆吼が上がった。左右の兵達を押し潰したはずの剛魔どもが、逆に、兵達の槍で四方から貫かれ、形を失って鉄屑と化し、くずおれてゆくではないか。
兵達の槍に光が灯った。聖印を刻まれた槍の穂が、剛魔どもを散々に貫き、倒してゆく。
剛魔もすかさず反撃するのだがその角で相手を貫いたと見るや、敵の兵が消え、まるで違う場所から現れた兵に打ち倒されるのだ。
砲魔の火球も、凄魔の剣も、いたずらに空を裂くばかりになってきていた。
――幻術。ノヴィアの脳裏を、その言葉が走り抜けた。ドラクロワは幻術の達人だ。
いったい総勢何人の兵団なのか、あそこに倒れている兵は本物か幻か――それさえ分からない。攻め寄せれば後方に回り込まれ、退けば敵も一緒に陣に紛れ込んでくる。これほど接近した戦いであるのに、幻に翻弄され、魔兵どもの方がじりじりと数を減らしていた。

「ノヴィア、見えるか」
円陣を後退させ、ジークが声をかけてきた。
「幻……ですね。その陰に本物が……」
「よし――今からお前が、俺の目になれ」
その言葉に、ノヴィアはいきなり全身にずしりと重い物を乗せられた思いを味わったが、
「は……はいっ！」
気丈に、返答した。私は、ジーク様の従士だ。その思いとともに、自分に万里眼を授けてくれた母に祈った。幻視の力を授けてくれたラプンツェルの魂に祈った。そして、自分にいつでも明るさと勇気をくれたアリスハートに祈った。
ノヴィアは、幻の向こうの真実を見据えるべく、透視の力を発揮させた。
傍らで、ジークが剣を手に、目を閉じた。

激しい戦闘の最中――樹に絡みつく金の繭の中でも、一つの異変が起ころうとしていた。
深い眠りの淵から、ゆっくりと目覚めてゆく感覚が、ふいに、小さな存在を揺さぶった。
小さな存在は、金色の光の塊となって繭の中に浮かび、そこに、一人の少女が現れ、光を抱くように両手を添え、囁きかけている。

（起きて――貴女は、私の最後の心――）
少女の手の中で、光が、か細く震えた。
（私が私でなくなる前に、起きて――）
光が、いやいやをするように揺れ惑う。
（起きたくない――）
（どうして――）
（裏切った――大事な友達を）
（どうして――）
（あたしが、目を見えなくさせてた――）
（彼女は、貴女を見付けてくれたのよ――）
悲しげな輝きを零す光に、少女が言った。
（彼女の力を分けてもらえなければ、貴女は消えて無くなっていたかもしれない――）
（あたしが、一生懸命に目を開こうとしていた友達の力を奪っていた――）
（彼女は、それでも、貴女を呼んでいるわ）
そのとき、ふいに辺りが強い輝きを帯び、
（お願い、起きて、これを止めて――）

少女が、悲痛な表情を浮かべた。
(誰か――これを止めて――)
刹那、少女の思いを吹き飛ばす激しい力の奔流が荒れ狂い、禍々しい輝きが、少女と、小さな光を、瞬く間にのみ込んでしまった。

「幻です、本物は後ろから来ます」
ノヴィアが言った。ひゅん。ジークがすかさず剣を振るう。魔兵どもが幻の兵を無視し、一見して何も無いところへと殺到した。
そしてそこに、愕然と凍りつく兵が現れ、一瞬にして魔兵になぎ倒されるのだった。
敵の、幻影という最大の武器が次々に破られるや、形勢は見る間に逆転してゆき、
「来ます。回り込むつもりです」
ノヴィアの警告に、ジークは目を閉じたまま従った。幻影に隠れ、円陣に侵入をはかる兵達が、魔兵に塞がれ、一瞬で打ち倒された。
凄惨な戦いをノヴィアは必死の思いで見つめた。自分を乗り越えるために。ジークに導かれるばかりだった盲目の自分を乗り越え、今、ジークの目となって戦いを支えるために。
その思いを頼りに、戦いの重圧と、力を使う疲労に耐えるノヴィアの眼差しが、突撃す

る兵群をとらえた。幻影では百と見えるが、本物は僅かに二十名ほどの一群である。
その兵達の陰に、朦朧と翳る人影を見いだし、はっと広間の入り口を確かめた。そこに立って兵に指示を飛ばすドラクロワの姿が、ノヴィアの万里眼に、半透明の幻と映った。
「ドラクロワ本人が来ます！」
ノヴィアの叫びとともに、双剣を振るう凄魔が、兵達をなぎ倒す。その兵達を盾に、ドラクロワが、単独で円陣に斬り込んできた。
かっと目を見開くドラクロワに、左右から、二体の凄魔が、縦横に双剣を振るうや――
青ざめた剣の光芒が、ドラクロワの手から、生き物のように走るのを、ノヴィアは見た。
凄魔の手が、足が、宙を舞った。
二体の凄魔が、まばたきをする間に、地に這いつくばり、戦闘不能となっている。
息をのむノヴィアの眼前で、ドラクロワの剣尖が、ジークに向かって、突き込まれた。
それを、ジークは、目を閉じたまま弾いた。
灼けるような火花が二つの刃の間に起こり、激しく絡んで、鍔元がぶつかり合った。
ジークが、目を開いた。
ドラクロワが、ジークの目を睨み据えた。
きりきりと噛み合う刃の音が、二人の間で、響いていた。

「二年、かかったな……」
　ドラクロワが、呟いた。
「秘儀を試すまでに……お前が来るまでに」
　刃が鳴った。ジークとドラクロワが舞うようにして距離を取り、互いに剣の輝きしか見せぬ迅さで刃を振るい、火花を散らして打ち合った。二人の動作は驚くほど似通い、互いが互いを影にするように剣を弾かせ、一瞬でまた距離を取り、対峙した。
　ふと、ジークの頬を、薄く、線が走った。
　線は赤く染まり、瞬く間に血を流し始めた。
　ドラクロワは、全くの無傷である。
　そのとき、魔兵どもが、咆吼を上げて敵の掃討に入った。兵達が次々に倒れ、ドラクロワの周囲にも、魔兵がじりじりと集まってきている。明らかな優勢であるにもかかわらず、ジークとドラクロワを見つめるノヴィアの胸を、得体の知れない動悸がはぜていた。
　ドラクロワが、ふと、鋭い眼光はそのままに、目を細めて、微笑した。
「収穫祭が始まる——刈り入れの時だ」
　兵達の最後の一人が倒れた、そのとき。
　にわかに——辺りに、金の輝きが舞った。

はっと、ノヴィアが、金の繭を振り返った。
気づけば、兵達の流す血が、繭へと流れ込み、繭を、赤く膨れ上がらせている。
敏感に危機を察知した魔兵どもが、一斉に、脈動する繭に向かって、咆吼を上げた。
ノヴィアは、瞠目した。繭の前に、あの、少女が立って、悲痛な顔で何かを叫んでいた。
その少女の姿が繭に吸い込まれるようにして消えた。
刹那、繭が内側から大きく膨れ上がり、爆発したように引き裂かれていた。
辺り一面に、金の糸の破片が舞い乱れ——
破られた繭から、そっと歩み出す者がいた。
金の輝きをまとう、その少女の姿に、ノヴィアは、呆然と、その名を口にしていた。
「アリス……」

ドラクロワが、ふわりとマントを翻らせた。
と見るや、にわかにその姿が消えた。
ジークが、素早く身を転じて繭を振り向く。
いつの間にか、ドラクロワが、繭の傍らに立ち、繭から歩み出す少女を見つめ、言った。
「〈竜人〉——秘儀の要だ……」

少女が、ゆっくりと、繭から歩み出た。
金に輝く瞳と、ほっそりとした頰に、ノヴィアのよく知る妖精の面影をたたえている。
突然、魔兵どもが一斉に走り寄った。びくっと身をすくませるノヴィアの目の前で、魔兵が少女に向かって咆吼を上げて殺到した。
ノヴィアが、悲鳴を上げた。
殺到した魔兵どもの姿が、砕け散っていた。
金の輝きが、あの怪物の牙の形となって広がり、次々に魔兵どもを貪り食ってゆくのだ。
ジークが、走った。ノヴィアの眼前に走り込み、少女に向かって、左手を掲げた。
左手から放たれた雷花が、金の輝きとぶつかり合い、燃え上がるような火花がはぜた。
ジークの体が、跳ね飛ばされた。
信じがたいことに、ノヴィアの眼前で、ジークが全身から血を噴き出し、倒れ伏した。
悲鳴を上げて手を差し伸べるノヴィアに、
「構うな……決めていた通りに、やるぞ」
血まみれのジークが、呻くように言った。
「お前の力で……やつの力を、封じろ」
少女が、ノヴィアに近づいた。ノヴィアは、震えながらも凜と背を伸ばし、ジークから

離れ、少女に、涙のにじむ目を、きっと向けた。
「そこにいるのね……アリスハート」
少女の体から、金の輝きが溢れるや——
「見えません」
決然とした口調で、ノヴィアが言い放った。
「貴女の力は、私には、見えません」
ぱっ、と金の輝きが消失した。
少女が、初めて、驚きの表情を浮かべた。
なおも金の輝きを振り零すが、ノヴィアの眼差しに遭うや、忽然と消失するのである。
見えないという幻——無視の具現であった。
少女が、後じさった。ノヴィアが更に迫る。
「私には、貴女が見える……」
ノヴィアは、視界が暗くなるほどの疲労に耐えながら、しかとその眼差しに少女を捉え、
「アリスハート……貴女の魂が、見える」
にわかに——少女が胸を押さえ、激しく喘いだ。まるで、そこにあるものを封じ込めようとするように、胸を両手で覆い、身悶える。

そのとき、ジークが、かっと目を見開いた。
跳ね起きざま、雷光を放つ左手を振るい、
「ジーク・ヴァールハイトが招く!」
少女の胸元に、その手を、叩きつけていた。
少女の全身を、雷光が走り抜けた。天を仰ぐ少女の口から、細い悲鳴が上がった。
ジークの手が、少女から離れた。
少女の胸元に、それまでとは違う、淡い金の輝きが零れ——小さな光が、現れていた。

(お行きなさい——)
声とともに、強い思いが伝わってきていた。
無窮の青空——どこまでも自由に飛んでいくこと——自分の命を犠牲に、都市の聖樹を救う決意をした少女が、最後に夢見た思い。
ああ、そうか——と、少女の魂から生まれた小さな存在は、思った。
聖樹に仕える身として、一生をこの聖堂に縛り付けられ、生きてゆく運命にあった少女の魂が、遠く、青空に羽ばたくことを夢見て、自分という存在を生み出したのだ——
(貴女は、自由な私の心——私の最後の心)

その思いに後押しされるようにして、金の光は、閉ざされていた殻を破っていた。
「〈竜精〉を、再び招き出すだと……」
ドラクロワが、瞠目した。
少女の身が、まさに聖樹と同じくひび割れ、たちまち指先から崩れ落ちてゆくのである。
そしてその胸から、それまでとは違う、淡い金の輝きが現れ——強い思いに引かれるようにして、ノヴィアの手へと渡っていった。
ノヴィアの手の中で光は徐々に形をなし、小さな妖精となって、うっすらと目を開いた。
「……ノヴィアが……あたしを見てる」
妖精が、まだぼんやりとした顔で、言った。
「そうよ、アリスハート……」
ノヴィアの目に、涙がにじみ、溢れた。
「私ね……目が見えるようになったの……」
「ノヴィアぁ」
ノヴィアの手の上でアリスハートが起き、
「その目、あたしのせいだったんだよぉ」

そう言って、泣きじゃくった。
ノヴィアは、きつくかぶりを振った。手にアリスハートを抱き、二人して涙を零しながら、その場に座り込んでしまっていた。

崩れゆく少女がドラクロワを振り返り、よろよろと歩み寄った。
「秘儀は、十分に試された……」
呟きざま、ドラクロワは剣尖を上げ、少女の身へと、刃の光を閃かせた。
少女の姿が両断され、ぱっと、金の輝きが散り――跡形もなく、宙に崩れ去った。
その輝きの向こうから、ジークが歩み寄り、
「秘儀を求めて……その先に何があるんだ」
剣を手に、総身を血にまみれさせるジークを、ドラクロワは不思議な静かさで見つめた。
「知りたければ、追って来い……ジーク」
言うドラクロワの姿が、朧にかすみ、
「私と……シーラが、お前を待っている」
ジークが咄嗟に手を伸ばすや、ドラクロワの姿が、かき消えた。
後には、あの銀の仮面が、ぽつんと、床に置かれているだけだった。

聖樹は、目に見えて、枝の先から枯れ落ちていった。その黒ずんだかけらが、陽光の中を静かに落ち、床に降り積もってゆく。
ジークは、剣を元のシャベルに戻す際、ふと、少女の墓に目を留め、じっと覗き込んだ。
砕けた棺の破片をどけると、そこに、新たな、淡い緑の芽が伸びているのが分かった。
「あの少女の魂が、芽生えさせたんだ……」
聖樹に背を向け、歩みながら、呟いた。
「お前の秘儀ではなく……ドラクロワ」

ジーク達が、揃って裏手から聖堂を出ると、丘の上を、青空が広がった。
「ああ、これだったんだぁ」
ノヴィアの肩で、アリスハートが言った。
「これって、なに？　アリスハート？」
「あの女の子がね、あたしに言ったの。自由に、空を飛んで行きたかったんだって」
「……その思いが、チビになったわけか」
「そう、あたしはそこから生まれたんだ……って、チビって言うなぁっ、この狼男っ！」

「お前が一番元気そうだな、チビ」
傷だらけのジークが、憮然として言う。
ノヴィアが、くすっと笑った。ノヴィアも気づかぬうちに、あちこち傷を負っていた。
「何言ってんのさっ。あたしなんか、消えて無くなるところだったんだよっ」
アリスハートは、胸を張って言う。
それから、青空を見上げ、
「ま、つまり、どこまでも飛んでいけるこの空が、いわばあたしの故郷だったってわけ」
でも……と付け加え、
「あの子、一人ぼっちで飛ぶ寂しさのことは、考えてなかったみたい」
そう言って、ノヴィアを上目遣いに見た。
ノヴィアはにっこり笑って、うなずいた。
友達——その魔法の言葉が、今再び二人の間を結びつけていた。たとえその言葉が幻のようなものだったとしても、それは、いつか必ず魂の宿る、この世で最も貴重な幻だった。
「ねえ、これからどうすんのぉ」
アリスハートが明るく喚くと、
「ドラクロワを追う」

淡々としたジークの返答が来た。
「ふぅん。ノヴィアも、ついてくのよねぇ」
「だって私、ジーク様の従士だもの」
ノヴィアは、当然のように返す。
「そうねぇ。ま、あたしはノヴィアの友達だからね。あたしは、ノヴィアについてくよ」
ノヴィアは微笑し、そして、ジークの背を見つめた。ドラクロワという、かつての親友にして大罪者を追うジークもまた、幻を追う者なのかもしれない——ふいに、そう思った。
その幻に、いつか魂は宿るのだろうか……。
遠く果てしないその答えを追うことが、ジークの旅であった。
そして、その旅がどんな結末を迎えようとも、全てを見守ることが、今の自分の役目だ——ノヴィアはそう心に決め、ジークの淀みのない足音に、耳を澄ませた。
やがて、一行は丘を越え、新たな旅路へ、歩を進ませゆくのだった。

番外編　エルダーシャの娘“決戦前夜”

その日は、少女の十四歳の誕生日だった。
「母さんも、あなたと同じ歳に、この力を、母さんの母親から授かったわ……ノヴィア」
母は、言った。紫の瞳を持つ、万里眼の天使――艶やかな青い法衣をまとい、栗色の髪をした母が、少女の顔にそっと両手を触れた。
「あなたも、十四歳になったのね――」
沁みるような声で呟きながら、少女の顔を撫でる。力を受け継がせるだけの器が、少女にあるかどうかを確かめているのだ。こういうとき、母は、母である以上に、自分を試す偉大な存在として、少女の目に映るのだった。
少女が、緊張に顔を強張らせる傍らで、
「お誕生日おめでとぉ、ノヴィアぁ」
あっけらかんとした声が、明るく少女の緊張を和ませる。掌ほどの大きさの妖精だ。シルクのドレスに女性形をした身を包み、金髪金瞳、その背ではばたく羽も金に輝いている。
「ありがとう、アリスハート。これからもノヴィアのお友達でいてあげてちょうだいね」
母が、少女に代わって礼を言うと、
「もちろんよぉ」

アリスハートは、にっこり笑って言う。母もまた、娘以上に嬉しげに微笑んで、
「本当に、ノヴィアは、はぐれ妖精のあなたに会えて良かったわ」
「は、はぐれって言わないのぉっ」
アリスハートが本気になってわめく。その明るさに満ちた声が、少女を安心させた。
「さ、ノヴィア……」
母が、少女の緊張がやわらいだのを見計らって手を滑らせた。指先が少女の目元に触れ、目蓋を閉じさせる。その真剣な母の表情が——少女が最後に見た、母の顔となった。
「〈見守る者〉の称号の後継者である、あなたに、透視の力——万里眼を、授けます」
たちまち、その手から少女の閉じた瞳へと、力が流れ込んできた。光の固まりが目蓋をすりぬけて入り込んでくるようだ。あまりに強い聖性に、心が、光を見たと錯覚していた。
その聖性の強さは、すなわち母自身の強さであり偉大さだった。その母の聖性が少女に備わった才能の扉を、ゆっくりと開いてゆく。
「母さんが与えられるのは最初のきっかけだけ……力を育てるのは、あなた自身よ」
母が、言った。そのときであった。ふと、少女の中で疑問が生じた。
母が何のために、自分にこの力を与えようとしているのか。それは少女が物心付いたときから母に対し、感じ続けてきたことだ。

共に旅をし、多くのものを見せてくれた母だったが、決して、全てを与えてくれたわけではない。むしろ、少女が心の底で欲しているものは、なかなか与えてもらえなかった。友達もその一つで、アリスハートと出会うまで、少女は一人ぼっちだった。大陸中に、母の力を求める人々がおり、少女はただ母の戦いの後をついてゆくだけだ。そんな旅から旅への暮らしで友達が出来るわけがない。

また母自身、母親として以上に、後継者を育てる師のように少女に接していた。それは無条件の愛情とはほど遠いものだ。その感じを受けるたびに、少女の中で得体の知れない寂しさが降り積もっていったものだ。

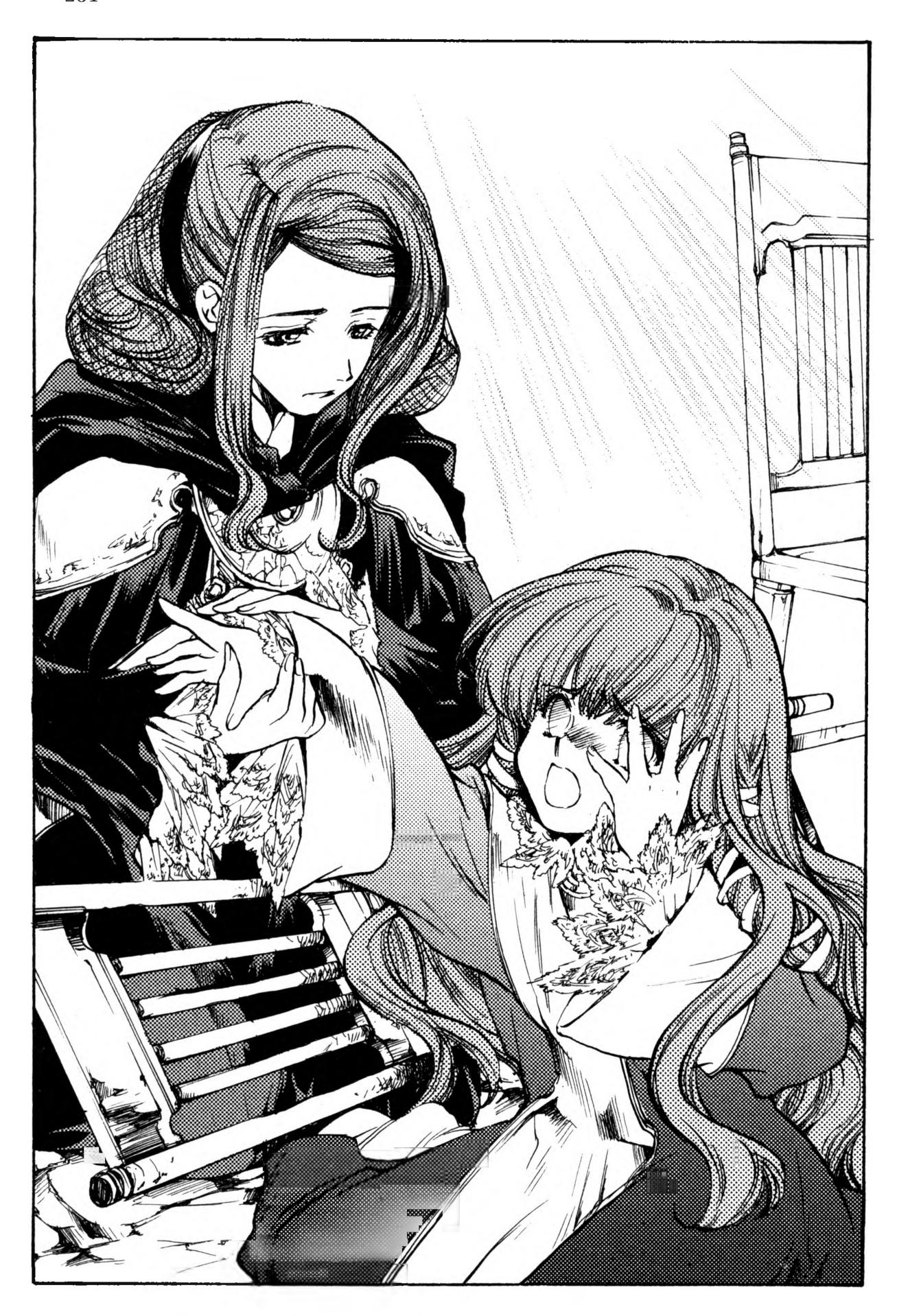
今、まさしく母の力を受け継ごうとする少女の心の奥底で、母への疑問が、にわかに渦を巻き始めた。渦の中心にあるのは、強い寂しさだ。自分は母に、後継者としてしか見られていないのか？　それとも、ちゃんと、娘として見てくれているのか――

その問いの向こうには、ひどく寂しい答えがあるような気がした。そのとき――

少女の目の奥で、烈しい痛みがはぜた。

「痛いよ、母さんっ。痛いよっ」

思わず大声で叫んでいた。母が驚愕に息をのむ気配が、かすかに伝わってきた。気づけば、瞳に流れ込んでいたはずの光がかき消え、

「ど、どしたのっ、ノヴィアっ⁉」
アリスハートの声を頼りに振り向いたが、
「目が開かないよ、母さん、目が……！」
叫びながら、少女は、愕然と気づいていた。
目蓋は既に開いている。なのに、辺りの景色がまるで見えなくなっていたのである。
「母さん、アリスハート？　どこなの⁉」
必死に両手を虚空にやった。
「ここだよ、ノヴィア、ここにいるよっ」
すぐそばでアリスハートの気配がする。だが何も見えない。ふいに、虚空をさまよう少女の手を、誰かがつかんだ。母の手だった。
「ノヴィアちゃん……」
母が、ふいにひどく悲しい声で呼んだ。いつも少女を弟子のように呼ぶときの、厳しい声音ではなかった。一瞬、少女の目の奥の痛みが、やわらいだようだった。だが——
「力は継承されたわ。後はあなた次第よ」
少女を抱きしめながら、そんなことを言う母の声に、少女の眼差しの奥底で、何かが固く凍りついたような感じがあった。母の聖性を受け継いだせいで、やけに母の心が見える

ような気がした。自分を後継者としてしか見ていない母の心が。
「何も見えないよ……母さん」
少女が、虚ろな声で、言った。
十四歳の誕生日――得たものは暗闇だった。

「母さんは、騎士団と一緒に見回りに行って来るわ。二人とも、仲良くしてるのよ」
母が言った。はーい、とアリスハートが元気良く返す傍ら、少女は、
「いつ戻ってくるの？」
茫々と、光を失った目を宙にさまよわせて訊いた。ひどく醒めたような声だった。
「夕方には戻るわ。それまで、教会のお仕事をしてなさい、ノヴィアちゃん」
「うん。お夕飯、用意して待ってる」
目が見えぬのにもかかわらず少女が言う。
アリスハートがちょっと、ぎくっとなった。
少女が、目が見えなくなってから、とみにこしらえるようになった料理の数々を、アリスハートはまだ食べた事が無い。あまりにもその見た目が問題なのだった。だが、
「楽しみにしてるわ」

母は笑って、修道院を出ていった。
今いる都市はルールドという。母はここで、都市を蛮族の襲撃から護るため、〈銀の乙女〉から派遣された者として、騎士団を率いる立場にあった。常に危険に満ちた、気の抜けぬ任務であり、当然のように、母には少女の相手をする暇は、なかった。
「いきましょ、アリスハート。私も、母さんに言われた仕事をしないと」
少女が、こつこつと杖を鳴らしながら、母が去った反対の方向へと、移動する。
「あ、そこ壁っ……」
アリスハートが、言いさす。少女は、建物の壁を、まるで見えているように避けていた。
「よく分かるわねぇ……」
「何度も通れば、どこに何があるかくらい、すぐに覚えるわ」
少女が微笑み、慣れた手付きで、杖で足下を探りながら、淀みなく歩んでゆく様に、
「ノヴィアったら、あたしが飛ぶより早く歩けるんじゃない？　すごいわぁ」
アリスハートが、感心した。一方で、少女がこのように歩けるまでの苦しみを、誰よりも知っているのがアリスハートだった。
目が見えなくなってから、何か月も経っていた。この身軽な友達は、目が見えなくなった少女にとって、今や光そのものだった。どこに何があるのかを事細かに教えてくれるし、

何しろ、その天性の明るさで、塞ぎそうになる少女の心を何度救ってくれただろうか。

力の継承がうまくいかず、目が見えなくなってしまった少女に、母が与えたのが、この白木の杖だった。そのとき母は、

「母さんも、そうだった……母さんの母さんから力を受け継いだとき、目が塞がったの。私も、自分の母親の事を――」

そう、かすかに口ごもり、

「大丈夫よ。いつか自分で、道を見つけられるわ。母さんには……何も出来ないけど」

急に、声音を優しくして言ったものだ。

その母の声の底にあるものが、切なさである事は、少女にはまだ、分からなかった。

そうして少女は杖を手に取った。だが、暗闇の向こう側に足を踏み出すまでに何日もかかった。アリスハートが懸命に励まし、慰めてくれなかったら、果たして歩き出す事が出来たか分からない。それほどの恐怖だった。

必死に一歩を踏み出し、注意深く歩く事を覚え、やがて、表を出歩けるまでになった。

それから数か月を経た今――

「案外、このままでも、良いのかも」

少女は、なんとそんな事を呟いていた。

「このまま って、目の事？　なんで？」
アリスハートが、びっくりした声を放つ。
「なんでかしら……」
少女は、茫々と顔を虚空に向けながら、
「その方が母さん、優しいからかな」
ぽつんと、呟いていた。

少女が母から与えられた仕事は、教会での歌子の役だった。子の誕生の祝詞や、祈りの合唱、そして——葬送の歌を、捧げるのだ。
万里眼の天使フェリシテの娘が、歌を捧げてくれる事を、街の大勢の人が望んだ。母が任務に出ている間、ノヴィアはほとんど教会で歌っていた。特に最近は、近辺で争いが激しくなり、死者への葬歌がひどく多い。
「あたし、ちょっと遊んでくるー」
アリスハートが、ひょいと飛んでいってしまうのは、教会に満ちる、湿っぽい空気のせいだ。死んだ兵士の家族が沈痛な面持ちでおり、笑いは無く、気の詰まるような沈黙が垂れ込めるため、アリスハートはついついそこから逃げ出してしまうのだった。

といってノヴィアを置き去りにしたまま帰ってこない、という事もなく、決まって葬歌の終わる頃にはまた戻ってくる。少女は、アリスハートの身軽さをひどく羨ましくも思う。

棺を前にして、少女が他の修道女とともに葬歌を捧げていると、ふいに――

少女は、手の中にあるものに気づいた。むろん、少女が両手に握っているのは、盲人用の白い杖である。わざわざ母が教会に頼んで、聖木である白木を、彫らせたものだ。

その杖の、握りのすぐ下に、何かが彫りこんであることに、突然、気づいたのだった。

少女は、歌いながら、杖に指を這わせ、何が彫りこまれてあるのかを探った。すぐに、それが、一連の文字であるのが分かった。

祈りの文句――まさしく今、歌っている葬歌にも使われている、聖典の一節だった。

安らぎたまえ、安らぎたまえ、あなた達の平安は生まれた時に約束されていたものなのだから……。そういう聖句だった。

わざわざ杖の握りのそばに、そんな文句を彫らせるなど、さも信心の篤い母らしい。一方で、まるで聖典の一節を忘れないよう、注意書きをされているようで、何となく、むっとするところもある。聖典は毎晩、母が読み聞かせてくれ、少女はそれを懸命に聞き取り、既に、ほとんど暗唱していた。母が一心に自分に声をかけてくれる事など、聖典を読んで聞かせる時くらいしかなかった。

（……なんだろう？）
少女が更に指でなぞっていくと、何やら、祈りとは違うものが彫られているようだった。
祈りの言葉であれば、既に知っているから予想もつきやすく、読み取りやすいのだが、
こればかりは何が書いてあるのか分からない。
口では何度も歌った葬歌を歌いながら、何度も指を滑らせるうちに、ぼんやりと、言葉
の最初の部分が、指先に察せられた。
『私の大切な――』
にわかに、その言葉が彫られている事が分かり、少女は、反射的に指を離していた。
まるで火に触ったような反応だった。
歌をとちりかけ、慌てて声に力をこめる。少女の胸の中で、急に動悸がはぜていた。
母の言葉だ。母が、聖典の句ではなく、自分の言葉を、そこに刻んだのだ。
私の大切な――なんなのか？
その後の言葉が、想像出来るようでいて出来なかった。正確には、心が想像することを
拒んでいた。母は、自分を、大切な、なんだというのか。大切な後継者か。それとも……
やがて葬送がひと段落し、アリスハートが戻ってきて、少女の傍らに来るなり、
「どしたのぉ？　顔が赤いよぉ？」

心配そうに訊くと、少女は、息を荒らげ、
「歌う時に……息継ぎ、忘れちゃって……」
なんと、そんなことを言った。
「息するの忘れるって……そんなに、歌うことに、集中してたわけぇ？」
「だって……」
少女が、わけを言おうとして、ふと口ごもった。アリスハートに、杖に刻まれた言葉の事を言えば、すぐにそれを見ようとするだろう。そして、声に出して読むだろう。目が見えない少女を、助けるつもりで。
だが少女はなぜか、それが怖かった。自分は母にとって、大切な——何なのか。それは、手の中に握りしめられた、永遠の謎々だった。
「なんかあったの？　ノヴィアぁ」
「ううん、なんでもない」
慌ててまたかぶりを振った。
「あんたって、大物よねぇ。息するの忘れたりしないわよ、普通」
アリスハートは心底、感心して言った。
ノヴィアは、何も言わなかった。

修道院の一階にある部屋が、ノヴィアと母の住まいだった。他の部屋からは離れになっており、玄関も別だった。この都市に来てから一年——既に住み慣れた感じがあるその玄関口にさしかかったとき、

「あ、ほらほら。また置いてあるよぉ」

アリスハートが、声を上げた。

ノヴィアが、ゆっくりとドアの辺りを撫でると、柔らかなものに触れていた。それを手に取ると、途端に、艶やかな花の香りがした。

花が一輪、ドアの隙間に挟まっていたのだ。

「これで、何本目だろう……」

少女が呟いた。ここ数か月、ふと気づけば、誰かがこの住まいに花を置いてゆくのである。多くが玄関口であり、たまに窓辺に置かれたり、門の入り口にあったりもした。

「きっと街の人が、ノヴィアに勇気を出しなよって言ってるのよぉ。ロマンチックねぇ」

アリスハートが、面白がって言う傍ら、

「シチューの香り付けにちょうど良いわ」

ノヴィアも、にっこりと呟いている。

「た、食べるのぉっ？」

「あら、いつもそうしてたのよ。こんな風に、お花を置いて下さるなんて本当に親切ね……いつか、お料理でお返ししたいな」

これには、アリスハートも絶句している。

だが実際、この花こそ何よりの親切だった。

いつの間にか花が置かれ始めたのも、少女の目が閉ざされてからなのだ。花は、少女が暗闇にうずくまるのを防ぎ、少女に外への興味を起こさせ、ついには部屋から歩き出すきっかけとなったのだった。だが誰が花を持ってきているかは、いまだに分からず、大方は部屋に飾られているのかと思えば――

「まさか料理されてたなんてねぇ……」

思わず唸るアリスハートだった。

花と杖を手に、少女が部屋に入ろうとしたとき。にわかに、町に喧騒が起こった。大勢の者が、ばたばたと街路を走る音が聞こえ、

「敵だ！　敵に騎士団が襲われた！」

痛烈な叫びが、少女の耳を打った。

ぽとりと、少女の手から、花が落ちた。

「な、なんなの、なにが起こったの……？」
「母さん……。もしかして母さんが……」
少女が呟いた。アリスハートがはっとなる。周囲の暗闇が重く、少女を押し潰すように迫って来ていた。杖を握る少女の手が震えた。
「参ったわ、完全に待ち伏せられるなんて」
母は、大して参ってもいないような、平然とした調子で言ったものだった。
都市にある騎士団の寄宿舎の広場にいた。
周囲では帰還した兵達が、何やら殺気立って、残りの者達に、事の経緯を説明していた。
「待ち伏せ……？」
少女が、呟いた。母の万里眼は、伏兵など、たちまちのうちに見破る。それでも、待ち伏せられたという言葉には不吉な響きがあった。
「みんな、すごく苛々してるぅ」
アリスハートが、少女の首筋にしがみつくようにして言う。見回りに出た騎士団を待ち伏せるなど、騎士の中に、都市を狙う蛮族に情報を流す、内通者がいる可能性が高い。騎士団が殺気立つのも当然だった。

「母さん……」

少女が不安そうに呼ぶと、

「大丈夫よ、母さんを信じなさい」

母は、ひどく明るい声で言った。そこへ、

「フェリシテどの！　ご無事で！」

朗らかな声が、飛んだ。別の部隊を率いて見回っていた、白馬の騎士が、駆けつけてきたのだ。金髪白皙の騎士の登場に、たちまち面食いのアリスハートが、

「ブランカ様だぁ！　ブランカ様ぁ！」

歓声を上げて、その騎士の名を連呼した。

「そちらに敵は出た、ブランカ隊長？」

「いえ、どうやら、あなたの部隊だけを狙っての事らしいですな……」

騎士が言うや、少女がびくっとなった。

母は、この都市を守る騎士団の要だ。まさしく指揮を司る「目」であるのだ。その母を、敵が正確に狙ってきているのだった。

「ノヴィア、心配いらないわ」

少女の不安を察したように、その肩に、母が手を触れてきた。軽く抱きしめつつ、

「さ、修道院へ戻ってなさい」
すぐに手を離し、少女の背をそっと押した。
「母さん……」
「大丈夫よ」
母の毅然とした声が、少女の言葉を遮った。
「御飯、作って、待ってるから……」
少女はそう言い残し、うつむき去った。

夕刻をだいぶ過ぎてから母は帰宅した。
アリスハートは食事を終えて、居間でうたた寝をしている。少女も食卓に座ったまま、うつらうつらしていると、母が帰って来て、
「遅くなって、ごめんなさい」
すっかり冷めた料理に手を付けるのが、気配で分かった。ぴりぴりとした緊張も伝わり、
「母さん……」
思わず、不安げな声が零れた。
「大丈夫よ、ノヴィアちゃん」

母は、声を優しくして、その言葉を繰り返した。だが今回は、その後が違った。
「万が一の時のための用意はあるわ」
少女には何を言われたのか分からなかった。
「万が一……？」
「強い敵が、この辺りに来たみたいなの」
「強い敵って……？」
「聖法庁に叛逆する男……大勢の人間が捕まえようとしているけれど、まだ誰も、確かな行方も目的もつかめていない人物……」
「母さんなら捕まえられるってこと？」
僅かに、沈黙が降りた。
「……難しいかもしれない」
ぽつりと母が言った。母が何を考えているのか分からず、少女は急激に不安に襲われた。
「難しいって……？」
恐る恐る訊くと、
「万が一の時の事は、考えているわ」
最初のその言葉に戻った。万が一とは、いったいどういう意味か——

「いい、ノヴィア。母さんの言う事をよく聞いて。母さんにもしも、も、もしもの事があった場合の策を、あなたに授けます」
少女がびくっとなった。授けるという言葉は、少女にとってひどく恐ろしい言葉となっていた。その言葉によって少女は暗闇に放り出された。これ以上、何も授かりたくなどない――全身がそう悲鳴を上げるようだった。
「母さん、私、嫌だよ……」
慌てて杖をつかみ、立ち上がろうとする少女を、ふいに、何かが遮り――抱きしめた。
「お願い……時間が無いの。今も、見えない敵が、何かを企んでいるのよ……」
母が、少女を抱きながら、言った。
「見えない敵……？」
「味方の中に裏切り者がいるわ。聖法庁への叛逆に応じる者が……。今度ばかりは、母さんでも倒せないかもしれない。だから、呼んだの……聖法庁最強の、軍勢である男を」
「軍勢……男……？」
「私に何かあれば、ある男が来るわ。その男を信じなさい。でも決して、誰にも言っては駄目……いいわね、ノヴィア」
ふいに、少女の中で、怖さが、悲しみに変わった。こうして抱きしめられていてさえ、

母は既に遠いところにいるような気がした。
「なんで？　なんで、他の人じゃ駄目なの？　なんでいつも、母さんばっかり……」
「誰かがやらなければいけない事よ」
母のひどく優しい声が、少女を遮った。
「ジーク・ヴァールハイト……それが男の名よ。万一のことが何かあっても、彼が、街を……あなたを、守ってくれるわ。そして彼なら、もしかすると、あなたの目を開かせられるかもしれない……」
「私の目を……？　その人が……？」
驚く少女の頬を、母がそっと撫でた。まるで母自身には、もう何も少女に対してしてやれる事がないとでもいうような所作だった。
「もし、どうしても、あなたの中で力が発揮されず、目が開かない時は……〈銀の乙女〉に頼んで、その力を消してもらいなさい」
少女の悲しみが膨れ上がるのも知らず、母の声はどこまでも優しく、そして残酷だった。
「力が消えれば、自然と目は元に戻るわ」
そう言って、母は、万が一の時のための策を、少女に伝えた。少女はただ、じっと歯を食いしばって、重くのしかかるような暗闇に耐えていた。やがて母が策を伝え終えると、

「行かないで、母さん！」
少女は、ついに暗闇の重さに耐えられずに、母にしがみついて、わめき出していた。
「街の人たちなんてどうだっていいじゃない！　母さんがやらなくたっていいじゃない！　行かないでよ、危ない事はやめてよ！」
その声に、アリスハートがびっくりして目を覚ました。すぐに飛んできて、
「ノヴィアぁ、どうしたのぉ？」
声をかけるが、少女は、母の腕にしがみついたまま、ただ泣く事しか出来ずにいた。
「大丈夫……大丈夫よ、ノヴィア」
母が言って、少女を抱く手に力をこめた。

その五日後に母は死んだ。

街の人々は、手厚く母を葬ってくれたが、少女に聞こえたのは、ただの騒々しさと、街の救い主を失った悲嘆の声だけだった。
「ねえ、アリスハート、訊いていい？」
母の棺を前にして、少女が声をかけた。

べしょべしょと泣きながらアリスハートが、
「なぁに、ノヴィアぁ。何でも訊いてよぉ」
「これ、本当にお母さん？」
「え……」
「誰か……私の知らない人じゃないの？」
手で、死者の頰を撫でつつ言うノヴィアに、
「ノヴィアのお母さんだよぉ……」
アリスハートが、わぁっと泣いた。
つと、騎士団の隊長であるブランカが、すぐ傍らに来て、言った。
「我らが駆けつけた時には、既に……申し訳ない、ノヴィア……」
ノヴィアはうなずき、母の頰を撫でながら、
「冷たいな……」
ぽつんと、それだけを呟いていた。
全ては暗闇の向こうで起こる、ひどく現実感を欠いた、夢の出来事のように思えていた。
「蛮族の背後に、聖法庁ゆかりの騎士団がついているとしか思えぬ」

「まさか裏切り者が――？」
「ノヴィアの万里眼さえ開けば……」
それらの言葉が、頻繁にノヴィアの耳に入って来るようになった。市庁舎の皆も、騎士団も、ほとんどそれら三つの事しか口にしないようになっていた。
「大丈夫です」
少女は、何度となく言った。
「聖法庁の軍勢が現れて、私たちを助けに来てくれます。母がそう言っておりました」
そのたびに返ってくるのは、
「信じがたい……」
という反応だった。だが少女は気にしなかった。母が遺した策を、少女はただ機械的に行うだけだった。一方で、
「ノヴィアの目さえ開けば、今までと同じように、万里眼の使い手が街を守ってくれる」
街の人々のそんな声が、ちらほら聞こえたが、少女はいたって無反応だった。
母の死以来、戦死者のために墓地へ葬歌を歌いに行くことが少女の日課となった。死者の無念が堕気の風を呼んで荒れ狂う中、少女はただひたすら杖を手に、葬歌を歌い続けた。

そこに母の墓もあるという事が、ひどく非現実的な事のように思われた。その杖に刻まれた言葉は、永遠の謎として遺された。

間もなく、その少女を、現実が襲った。

「市民軍を組織し、打って出る！」

市庁舎の誰かが言いだした事だった。

「万里眼の天使フェリシテの仇を討つ！」

そんな叫びとともに、市民から兵が集められた。今や都市を危機的状況に陥れる敵を、自ら撃破しようというのである。

杖を手に墓地から帰るノヴィアの耳にも、騒然とする街の様子が届いてきた。

「凄い数の人ぉ、みんなで戦うんだぁ」

アリスハートが感嘆する傍らで、

「まるで一日中、雷が鳴ってるみたい」

少女は、街の騒がしさに首をすくめている。

「せっかく、聖法庁から軍勢が来るのに」

「本当に来るのぉ？」

「母さんが言ってたもの。来るわよ」

そう言い続けるのも、策の一部だが、少女はその事はアリスハートにも言っていない。
「軍勢かぁ……。あ、ノヴィアぁ、また、花が置いてあるよぉ」
アリスハートの声とともに、少女は、確かに花の香りをかいでいた。だが、少女はまだ花を手に取ってもいない。その瞬間、
「アリスハート……」
少女は忽然と、花の贈り主が誰かを悟った。
「え？　なぁに？」
「……ううん。何でもない」
言って、少女は花を探り、手に取った。同じ香りが、すぐそばのアリスハートからもしていた。少女は、そっと花を胸に抱き、
「ありがとう……」
暗闇の中で、ふいに暖かいものに触れた気がした。そしてふと、母の死以来、まだ一滴も涙を流してはいないことに唐突に気づいた。
「冷たいな……」
自分の心がいつの間にか、ひどく冷え冷えとし、たとえこの街が滅ぶほどの危機が迫っていても、重要な事に思えなくなっていた。

悲しみに麻痺したようになる心が一転したのは、それから、二日後の事だった。
その日、街に響いていた出陣のざわめきは、絶望的な沈黙に変じた。なんと打って出た市民軍が、敵に全滅させられたというのだ。
市庁舎は混乱に陥り、街を逃げ出す者まで現れた。その混乱をかろうじて防いだのは、騎士団の隊長であるブランカだった。
「まだ手はあるはずだ。今こそ市民が一丸となって戦う時だ。ルールドの都市の誇りに懸けて、我ら騎士団は一歩も退かぬ事を誓う」
市庁舎の広場でのブランカの演説を、少女もアリスハートとともに聞いていた。市庁舎の者たちが、少女にも、街の人々を勇気づけるよう、願ったからである。
「大丈夫です、みなさん」
杖を手に、目が見えぬ少女は、言った。
「聖法庁の影の軍勢が、私たちを救いにやって来ます。どうか今しばらく待って下さい」
市民はその言葉にすがった。少女が呆気に取られるほどの喝采が少女を送った。
「ありがとう、ノヴィア。お陰でみなが恐慌に陥る事だけは防げた……」
壇上から降りた少女に、ブランカが言った。

ブランカが間近に来たせいで、きゃあきゃあと歓声を上げるアリスハートをよそに、
「いえ、私はただ、母に言われた通りにしているだけですから……」
少女が言いさし、さっと青ざめた。
「どうしました……？」
少女の顔色を察して、ブランカが更に近寄った。その途端、少女は、はっきりと鋭い臭いをかいだ。血の臭い——それはほんのかすかだが、確かにブランカの身からしていた。
ブランカがそっと手を肩にかけようとするのが気配で分かった。少女は咄嗟に退き、
「すいません……気分が悪くて……」
「あまり大勢の人の前に出たせいですかな」
「はい……」
少女は慌てて頭を下げ、逃げ出すようにその場を去っていた。胸の奥では心臓が激しく鼓動し、母の言っていた目に見えぬ敵——裏切り者が誰であるかを、猛然と告げていた。
「ブランカ隊長……」
その名を呟いた途端、ぞっとなった。
「素敵よねぇ、ブランカ様、みんなのためにこんな状況でも、先頭で戦うなんてぇ」
アリスハートがわめく一方、少女は、あまりの事に、叫びだしたいくらいだった。

だが今叫べば、母の策も台無しになるし、何よりアリスハートも危険に巻き込む事になる。母の策が功を奏するかどうかはともかく、何としてもアリスハートだけは助けるのだ。
暗闇に覆われた自分に、暖かさと、ほのかな光を与えてくれるこの友達だけは救う——
卒然と決意が湧いた。今まで心が凍えて眠っていたのだと思った。気づけば絶望の刃はすぐ背後まで迫っていたのだ。

（大丈夫——）
母の声が脳裏に甦った。心強さと、寂しさとが、同時に起こった。もう自分を守ってくれる存在はいなかった。全てが母の託した策に——それを準備するノヴィアと、
（ジーク・ヴァールハイト……）
その男の到来に、かかっていた。

「こんな遠くにまで来て、大丈夫ぅ？」
アリスハートの不安げな声をよそに、
「みんな自分の事が不安で、誰も埋葬さえ出来ないでいるんだもの……誰かがやらなきゃいけないことよ、アリスハート」
少女は、葬歌の日課を、実行し続けた。それも、都市の墓地ではなく、先日の、市民軍

の大敗した戦場へ、足を運んでの事である。
辺りには無念の風が吹き荒れ、とても少女にそれを宥められるとは思えなかった。
だがそれでも少女がここを訪れるのは、ひとえに母の策を託された男が到来するのを待っていたからであり――また、自分に出来る事が、それだけだったからだ。
「せめて戦って死んだ人たちを、慰める事くらいしか、私には出来ないから……」
杖を手に死者の前に立ち、少女は言った。
都市では、市民全員での抗戦が計画されていた。戦況は刻々と悪化し、時として少女自身が、母の策も何も信じられなくなるときがあるほどであった。もはや何をしても絶望的なのではないか、という不安に襲われるつど、
（彼なら、もしかすると……）
不思議と、母のその言葉が、少女に勇気を与えた。その男なら、少女の目を開く事が出来るかもしれない。またそうでなければ、母から受け継いだ力を丸ごと消してしまうしか、光を取り戻す方法は無い――
偉大な母がそうまで言う男が、どんな人物であるか知りたかった。その知りたいという思いが、少女を救い続けた。
やがて、決戦を間近に控えたある日――

少女がいつものように葬送の歌を歌っていると、指が、ほとんど勝手に杖を探っていた。安らぎたまえ、安らぎたまえ。杖に刻まれた聖典の句を指がなぞるうち、ふと、最後の言葉の部分を、指が読んでいた。
少女の歌声に変化は無かった。態度にも何も現れなかった。それは既に少女が十分に知っていた事だった。ただ少女が、それを確かめるのを恐れていただけで。
『私の大切な娘、ノヴィアへ』
杖にはそう刻まれていた。母は決して、ただ後継者としてだけ自分を見てはいなかった。
「ノヴィアぁ、どうしたの、大丈夫ぅ？」
アリスハートが、心配そうに少女の頰を撫でた。その頰を、暖かい涙が後から後から流れて止まらなかった。
「分かってた……分かってたのに……」
少女が泣きながら言った。母が死んでから初めて、涙が零れていた。母に愛されているかどうか、確かめたいばかりに、自分が母を愛していることを伝え損なった。
そしてもはやそれを伝えるすべはなかった。ただ母の魂が天に還る事を祈るだけだった。
その事がひどく悲しく、辛かった。
安らぎたまえ、安らぎたまえ。声が、熱っぽい嗚咽と共に、激しい風に消えてゆく。

安らぎたまえ、あなた達の平安は生まれた時から約束されていたのだから――死者を慰めているのと同時に、まるで自分に向かって歌っているようだった。
少女は歌い、そして歌いながら泣いた。
風もまた、ごうごうと慟哭していた。

「今日も行くのぉ？」
アリスハートが訊いた。少女は杖を突きながら、街道を真っ直ぐに戦場跡へと進み、
「そうよ。もしかすると、軍勢が来ているかも知れないもの」
「軍勢ったって……なーんにもいないよぉ」
「影の軍勢だって話だから、きっと、黒くてよく見えないのよ」
「いや、別に、影の軍勢だからって、本当に黒いわけじゃあ……」
呆れたように返すアリスハートに、少女がくすくす笑った。少女にもう迷いはなかった。母を信じ、母の遺した策を信じた。自分はあの偉大な母の娘だ。強くそう思うことで、緊張と恐怖に対抗していた。
やがていつものように戦場跡で立ち止まり、杖を握りしめ、閉ざされた視界の向こうで吹き荒ぶ風に、耳を澄ませた。

どこからか、足音が聞こえる気がした。
母が最後に全てを託した男の足音――もしかすると少女の目を開かせてくれるかもしれないという、その男の歩む影を、少女はまさしくその脳裏にはっきりと見ていた。自然と、母が教えた聖典の一節が口をついて出た。

主、汚れし霊に問いたもう。
「汝の名は何か」
彼、答えていわく――

「〝軍団〟……我ら大勢なるゆえに」
少女の呟きとともに、風が、大きく騒いだ。
「なに、それぇ」
アリスハートが不思議そうに首を傾げた。
少女は、真摯な顔を、彼方に向けている。
その答えの到来を告げるように、風が、おうおうと、頭上で、騒いでいた。

後書き

初めましての方も、またお会いしましたねの方も、こんにちは、冲方です。
皆様のご愛顧のお陰様を持ちまして、『カオス レギオン』短編集の刊行と相成りました。
しかも、雑誌ドラゴンマガジンに連載された六話に、番外編を追加してのお届けです。
ジークと出会う前の、ノヴィアとアリスハートの生活を紹介するこの番外編、第一話と密接に結びついた構成になっております。
全話を読んだ後で、番外編を読み、そこからまた第一話を読むと、また違った味わいが楽しめるのではないか、とウブカタ本人は思っております。是非お楽しみあれ。
さて、この物語では、盲目となった少女ノヴィアと、ひたすら明るいアリスハートが、謎の墓掘り人ジークと出会い、その後を追って旅に出ます。
彼らの真っ直ぐ歩みゆく姿が、とにかく僕は大好きなのです。
その第一話が、雑誌ドラゴンマガジンに連載されたのが二千二年の夏――

『カオス　レギオン』が初めて世に出るのと時期を同じくして、ワールドカップで日本中が燃え上がっておりました。僕自身も、担当のシバッチユイユイ氏から、
「大観衆を生で観られるなんて、滅多に無い機会ですから、観に行って下さい」
などとメールを送られ、編集公認でのサッカー観戦に、いそいそと足を運んだりしたものです。五万人が同じ瞬間に叫ぶとこうなるのか、と感動しました。もちろん試合にも感動しましたとも。青いユニフォームに顔面日の丸、調子に乗って大阪から宮城まで日本縦断、七試合連続で観戦し、完全燃焼。財布がすっからかんになって原稿料を前払いしてもらったのも、今では良い思い出です。トルコ戦の後は悲しかったなあ……。
そういえば、ウブカタが、韓国のサッカー選手アン・ジョンファンに物凄くよく似ていて、家族・友人・編集諸氏、ついでに本人も揃ってびっくりしたのも、その頃でした。
韓国とトルコが戦った、三位決定戦では、ワールドカップ観戦用に、ドラマガ編集部に持ち込まれたテレビに向かって、
「何やってんだ、ウブカタ、シュートだ」
「ウブカタぁ、決めろ！」
コールが起きていたとのこと。僕じゃないっちゅーねん。あの人が僕に似てるだけ。

……ああ、それにしても、色々ありました、二千二年。何と言っても『ロード・オブ・ザ・リング』が公開されたのが、ちょうど、第一話を推敲している頃でありました。
担当のシバッチユイユイ氏などは、
「レギオンの軍団戦の参考になるかもしれませんので観て下さい」
と力説するものだから、これまた公認で、嬉々として映画館に足を運んだものです。
冒頭から、さっそく大迫力の軍団戦。なんというキャストの数か。あの映像の力たるや、もう凄い凄い。本当に凄い。後になって、打ち合わせで吠えたものです、ウブカタ。
「四十枚で、あんなシーン、書けるわけがありませんヨー」
と。
それでも、やはり観て良かったですとも。陣形や指揮というものが無いまま、軍団戦などをしたら、本当に何が何だか分からなくなるというのが、良く分かりました。
ジークは凄いです。
そして、忘れてはいけないのが、『カオス レギオン』のゲーム発表。
ドラマガ誌上の特集で「俺と軍団、喚ばないか？」と、いきなりジークが手招いた時には、とうとう発表されたかと、思わずガッツポーズ。

この後書きが活字になる頃には、既にゲームが発売され、きっと多くの人々が、モンスターを剣で跳ね上げ、素早く招き出して、コンボを決めるのに夢中になっているでしょう。ですが、短編連載中は、厳しい箝口令が敷かれ、ゲームのゲの字も口にしてはいけなかったのです。それがまた、何とも苦しかったですとも。

富士見とカプコンのタイアップたるや、もう水も漏らさぬ隙の無さ。僕の役目はひたすら、ジークやノヴィアやアリスハートの心を追いかける事でありました。

一方では、ゲーム制作が並行して行われ、新たな画面の数々が作り出されるたびに刺激を受け、「それなら僕はこれをやってやる」と叩き返す日々。

また一方では、結賀さとるさんが、素晴らしい絵をどんどん描き出して下さっている。さながら、毎日が異種格闘技戦。ここで僕が負けたら、小説が、ゲームや絵に負けた事になるのではないか。いつの間にか、そんな風に思い込んだりもしたものですヨ。

そしてやはり、こうしてジーク達の旅を見届けて思うのは、小説には小説の面白さがあり、絵やゲームにも、それぞれにしか出来ない事があるのだなあという事でした。

ありきたりな結論かもしれませんが、その事を今、深く実感しております。

ゲームスタッフの皆様、本当にお疲れ様でした。そして『カオス レギオン』の世界を絵で広げて下さった結賀さとるさんに、大感謝です。

ちなみに——

ジークが招き出す〝魔兵〟ですが、ゲームには登場しないものが、小説では何種類か登場しております。いったいどれが小説のみの登場か、探すのも楽しいかもしれません。

さて——ノヴィアがジークを追いかける旅は、この短編集でひとまずの区切りを迎えました。引き続き、夏頃刊行予定の『カオス レギオン外伝（仮）』では、また違うジーク達の様子が描かれる予定です。どうぞお楽しみあれ。

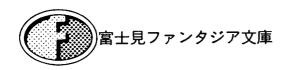
最後になりましたが、多くの刺激とご教授を下さった担当のシバッチユイユイ氏、富士見の編集諸氏、カプコンの皆様、そして結賀さとるさん、本当にありがとうございました。

そして連載中のジーク達を愛して下さった皆様へ。心からありがとうございます。

どうぞこれからも、応援のほど宜しくお願い申し上げます。

冲方 丁　二千三年　二月

初出　月刊ドラゴンマガジン２００２年９月号～２００３年１月号＋書き下ろし

富士見ファンタジア文庫

カオス レギオン0

招魔六陣篇

平成15年3月25日　初版発行

著者――冲方（うぶかた）　丁（とう）

発行者――小川　洋

発行所――富士見書房

〒102-8144
東京都千代田区富士見1-12-14
電話　営業部　03(3238)8531
　　　編集部　03(3238)8585
振替　00170-5-86044

印刷所――旭印刷

製本所――本間製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります

2003 Fujimishobo, Printed in Japan

ISBN4-8291-1496-7 C0193